

AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY

愛知県立大学 新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念誌

愛知県立大学
新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念誌



AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY

愛知県立大学 新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念誌

周年記念ロゴ



花ひらく、底力

I can do, 愛県大。

シンボルマーク



5学部を花卉(花びら)で表現しました。

また、めしべを十(10周年)と十十(20周年)で表現しました。

5学部連携で咲く花を表現しています。

愛知県立芸術大学の第10代学長 白木彰教授にデザインしていただきました。

キャッチフレーズ

「花ひらく、底力」

本学の学生が持つ潜在能力を発揮し、

大きく羽ばたいて(花ひらいて)ほしいという願いと、

大学が未来に向かって花をひらかせるという意志を、

シンボルマークに合わせて表現しています。

「I can do, 愛県大。」

「愛県大」という呼称を浸透させ、

愛知県立大学を学内外にアピールすることを狙いとしています。

また「I can do」と「愛県大」は、

押韻による馴染みややすさと、本学で学ぶ学生達、

また愛県大の無限の可能性を表現しています。

CONTENTS

1. ごあいさつ

久富木原 玲 学長	6
鮎京 正訓 理事長	7

2. 周年記念に寄せて

丸山 真司 周年記念事業実行委員会 委員長・副学長(総括)	8
山下 達治 全学同窓会 会長	10

3. 寄稿 — 母校へのまなざし —

川下 政美 (日本特殊陶業株式会社 元最高顧問/外国語学部スペイン学科 卒業生)	11
佐野 正 (全学同窓会 副会長兼事務局長/文学部英文学科 卒業生)	12

4. 寄稿 — 新大学誕生・長久手移転を振り返って —

森 正夫 (元学長(第10代))	18
山田 正浩 (元文学部日本文学学科 教授)	22
日置 雅子 (元外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻 教授)	23
日置 英鋭 (学術情報部長)	24
槇島 隆教 (学術情報部図書情報課 職員)	25
糸魚川 美樹 (外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 教員/外国語学部スペイン学科 卒業生)	26
川畑 博昭 (日本文学部歴史文化学科 教員/外国語学部スペイン学科 卒業生)	27
小島 伊織 典子 (文学部児童教育学科 卒業生)	28
小栗 宏次 (情報科学部情報科学科 教員)	29
辻 孝吉 (情報科学部情報科学科 教員)	30
伊藤 正英 (情報科学部情報科学科 教員/情報科学研究科博士後期課程 単位取得退学)	31
瀬野 由衣 (教育福祉学部教育発達学科 教員/文学部児童教育学科 卒業生)	32
小栗 由紀子 (学術情報部図書情報課 職員/文学部英文学科 卒業生)	33
高島 忠義 (前学長(第12代))	34
佐々木 雄太 (元学長(第11代))	38
堀田 英夫 (元外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 教授/外国語学部スペイン学科 卒業生)	40
加藤 義信 (元教育福祉学部教育発達学科 教授)	41
草刈 淳子 (元愛知県立看護大学 学長(第2代))	42
鎌倉 やよい (日本赤十字豊田看護大学 学長(元本学副学長))	44
梅村 明里 (看護学部看護学科 卒業生)	45
大塚 英二 (日本文学部部長・兼国際文化研究科長)	46
若子 直 (元事務部門長)	48
口ベル 智子 (愛知県立芸術大学事務部門長/国際文化研究科 修了生)	49
北條 泰親 (元事務部門長/外国語学部フランス学科 卒業生)	50

5. 記念事業・関連企画

6. コラム

7. 大学のあゆみ

編集後記	90
------	----

ごあいさつ／周年記念に寄せて／寄稿 一母校へのまなざし一

愛知と世界の「一隅を照らす」大学へ



久富木原 玲
学長

このたび、本学は長久手移転20周年と新大学設立10周年を迎えました。周年は本学の今までを振り返り、これからの大学の展望を描くための大切な節目です。そこで私は、任期中の3年間で周年事業期間に充てることにいたしました。1年間だけの記念式典や祝賀会に終わらせず、3年間にわたって本学の存在感を学内外に周知し認識して戴くことによって、本学のさらなるステップとしたいという思いからです。

そして学長就任時の2018年を準備期間として、2019年が本番、2020年度は周年事業の成果発信の年と位置付けました。その中心的事業は、「災害弱者対策・支援プロジェクト」です。災害は日本や世界各地で頻発しており、特に愛知は、南海トラフ地震に見舞われる恐れがあるとされています。

私は、就任時の3つのビジョンのひとつに「いのちの学びと探究」を掲げました。そこで上記のプロジェクトを、このビジョンの一翼を担うものとして、周年事業に位置づけたのです。「災害弱者」の「いのち」を守ることは、すべての人のいのちを救うことにつながります。弱者には幼児・高齢者・障害を持つ人などのほかに、愛知県域に多く居住する外国籍の人々も含まれます。外国人とどのように共生していくかということも喫緊の課題です。本学は看護学部や外国語学部を中心に他の3つの学部も、教育や文化、最新のテクノロジーなど多様な角度から、

この課題を受け止めることができます。

私の残り2つのビジョンは、「異文化交流を通じて人をつなぎ世界を結ぶ」・「5学部連携による研究と教育」ですが、これらも「災害弱者」のプロジェクトに密接にかかわります。外国籍住民等との異文化交流と5学部連携を含む3つのビジョンを組み込んだ周年事業プロジェクトこそ、「災害弱者対策・支援プロジェクト」なのです。

このように、この地域の人々の「いのち」を守る課題に5学部が連携して取り組むことは、本学独自の活動になり得ます。そして、この試みは近隣地域への貢献にとどまらず、日本各地あるいは世界各地ともつながるような知見を生み出す可能性を秘めています。ぜひ、このような方向性で、本学ならではの研究・教育・地域貢献を進めていきたいと考えています。

ここに掲げた「愛知と世界の『一隅を照らす』大学へ」という標題は、私のビジョンのエッセンスです。同時に、これからの本学の展望であると共に、私の切なる願いです。

最後になりましたが、式典・祝賀会にご列席戴きました愛知県知事大村秀章様、大垣共立銀行取締役会長故土屋嶋様、佐々木雄太元学長はじめ、みなさま方に厚く御礼申し上げます。全学同窓会会長山下達治様、同事務局長佐野正様には、周年記念事業実行委員会の正式な委員として格別のお力添えを頂戴いたしました。ここに記して、深謝申し上げます。

愛知県立大学長久手移転20周年・ 新大学発足10周年を迎えて



鮎京 正訓
愛知県立大学法人 理事長

愛知県立大学長久手移転20周年・新大学発足10周年を迎え、この機会に一言ご挨拶を申し上げます。愛知県立大学と愛知県立芸術大学が愛知県立大学法人のもとに統合され、わたしは三代目の法人理事長として、今日に至っております。

愛知県立大学が久富木原玲学長のもとで、学生の教育及び研究の進展に向けて、日々奮闘されていることに、常々感銘を深くしています。わたしは、愛知県立大学がより一層の発展を遂げられますことを願うとともに、愛知県立大学法人としても、県立大学の発展を支えてまいりたいと考えています。

さて、せっかくの機会ですので、少しだけ自分のことを申し上げます。

わたしは、前職は名古屋大学法学研究科の教員をつとめ、アジア法という専門分野を担当し、とりわけ、ベトナム法の研究を行うとともに、アジアからの留学生の受け入れや、アジアの途上国に設立した日本法教育研究センターで法学人材育成に取り組んでまいりました。そして、アジアの中でも、とくにベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー、モンゴル、ウズベキスタンなどの法をめぐる研究を行ってきました。

これらの国々に共通するのは、かつては他国による植民地支配を受け、その後、独立国家として新しい国づく

りを行ってきたことでした。わたしは、講義を受けた学生たちに宗主国が植民地支配をするとはどういうことか、また、植民地支配をされるとはどういうことか、そして、そのような理不尽な支配をずっと続けることはできない、と語ってきました。

今年、「県大エッセンス——多文化社会への新たなまなざし、ウズベキスタン！——」という授業の一コマを担当させていただきました。本来は対面授業で行うところ、新型コロナの関連で、通信でのビデオ講義となりました。一方的な授業だったので、愛知県立大学の学生たちの反応が分かりませんでした。この科目の担当者的の上川通夫先生が、数日後に学生たちの授業感想文を届けてくださいました。

“教科書上の知識や内容として植民地のことを知っているにしても、その知識だけしかもっていない状態であり、植民地、植民地支配について深く考えたことがなかった”、“植民地支配をすることがかつて世界で優位に立てる称号のようなものであったことは、誇ってはならない歴史である”など、学生たちの真摯な受け止め方を知り、とても嬉しかったし、本学の学生たちを心から誇りに感じました。

周年事業を行うことにより、私たちは、より良い授業や教育を学生にきちんと行うことができているか、を振り返る機会にしていきたい、とあらためて誓った次第です。

周年記念事業を振り返って

— 愛県大の継承・変革・発展 —



丸山 真司

周年記念事業実行委員会 委員長・副学長（総括）

愛知県立大学が長久手キャンパスに移転して20年、さらに愛知県立大学と愛知県立看護大学が統合して10年の「節目」の年を迎え、本学では2018～2020年度の3ヶ年を周年記念事業（以下、記念事業）の年として、周年記念事業実行委員会を中心に様々な行事や事業を企画・実施しました。記念事業の発足にあたってテーマとして掲げたものは、大学を取り巻く厳しい状況の中で、この記念事業を通して愛知県立大学の魅力や底力（ポテンシャル）を学内外に向けてアピールすることであり、この記念事業を学生・教職員・同窓生とともに愛県大の継承—変革—発展へとつなげる「節目」として位置づけることでした。

主な記念事業として、まず最初に挙げられるのは、本学情報科学部の小栗宏次教授と「知の拠点あいち」他との共同研究による愛県大オリジナルあまざけ「愛riche」（あいりっしゅ）の開発・販売です。学生、教職員からの公募により「愛riche」という名称や、記念事業のキャッチコピー（「花ひらく底力」・「I can do 愛県大」）が決まりました。さらに、キャッチコピーのロゴマークを愛知県立芸術大学の白木彰前学長がデザインしてくれました。これは、学生・教職員・県芸大が連携してともに創る記念事業の特徴が反映されたものです。

第二弾は、昨年度の大学祭期間中（2019年11月3日）に開催された「記念講演—記念式典—祝賀パーティー」を

セットにした記念行事です。多様な学問を融合して新しい世界を切り拓いている神崎亮平教授（東京大学先端科学技術研究センター所長）の記念講演は、まさに「文理融合の知」「異文化交流の知」を創造して地域や社会に貢献できる大学を目指す本学の理念にフィットするものでした。続いて行われた記念式典及び同窓会主催の祝賀パーティーには愛知県知事、公立大学協会会長、大垣共立銀行会長、他大学の学長、元愛知県立大学学長、名誉教授、同窓生をはじめ多くの方がご臨席くださり、愛県大の伝統と可能性を発信することができました。

第三弾として、愛県大の学生・教職員に自分のいのちと同時に他者のいのちを守るための意識と知識と行動力を身につけてほしいと考え、「愛県大 災害弱者対策・支援プロジェクト」を立ち上げました。災害弱者（乳幼児、高齢者、傷病者、障害者（家族）、外国人など）を対象とすることは災害対策・支援の本質を捉えることにつながります。2019年度には防災訓練日に「災害・防災関連書籍・グッズ・写真」の展示や清水宣明教授（看護学部）による講演（「愛知の災害弱者のいのちを守る」）を行い、2月には名古屋市中川区と「子どものいのちを守るための災害対策事業協定」を締結しました。そして、2020年度が目玉行事として、本学の5学部長と県民が交流する「愛県大は災害にどう向き合えるか—5学部からのアプローチ」というテーマのシンポジウム（11月1日）を実施しま

した。本学5学部長がシンポジストとして一同に揃い、発信するシンポジウムは本学で初めてのことです。シンポジウムでは、まず5学部長から災害や災害弱者支援に対する各学部の教育研究の可能性についての報告があり、続いてハイチ地震（2010）の際に現地で国際緊急援助隊医療チームの団長として活動された二石昌人氏の特別報告、最後に地域で活躍されている3名の方から現場の課題や本学への期待についての報告がありました。質疑応答では、参加者から多くの質問や意見が投げかけられ、大学と県民をつなぐ視点での議論が展開されました。シンポジウム後のアンケート結果、「満足した」と答えた参加者は約9割。地域と繋がる災害弱者対策・支援の教育研究に対する本学への期待とニーズの高さが感じられるシンポジウムでした。さらに3年間にわたる「災害弱者対策・支援プロジェクト」活動の締めとして「プロジェクト」動画を作成しました。動画は、本学の各学部で現在進行中の災害弱者対策・支援に関わる教育研究活動の具体的な取り組みを紹介したものです。3年間の「プロジェクト」活動を契機に、各学部の教員・学生が地域と連携し、災害弱者対策・支援の教育研究活動の第一歩を踏み出したように思います。

今回の記念事業で特筆すべきことは、周年記念事業実行委員会に同窓会会長の山下氏、副会長兼事務局長の佐野氏が委員として加わり、同窓会とタッグを組んで、

「教職同」（教員・職員・同窓会）協働で事業を展開してきた点であります。教員・職員・同窓会の三者で構成される学内委員会は県大史上初めてのことでないかと思えます。実行委員会では三位一体となってこれらの他にも多くの関連企画を学内外で展開してきました。

愛県大には、そして愛県大生にはポテンシャルがあります。そのポテンシャルが学内外から正当に評価されているでしょうか。正当に評価されていないとしたらそれはもったいないことです。学生・教職員・同窓生が協働して取り組む記念事業が愛県大の伝統や魅力の継承・変革・発展の土台となることを確信しています。これからも本学を愛する多くのみなさんと一緒に愛県大の底力を開花させていきたいと思っています。

年輪を重ねるといふこと



山下 達治

全学同窓会 会長(文学部国文学科 卒業生)

愛知県立大学長久手移転20周年・新大学発足10周年、まことにおめでとうございます。僭越でございますが、卒業生を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

1995年に結成された全学同窓会は、大学の発展、拡充のありさまに目を見張りつつ伴走して参りました。もちろんその変化を喜びつつも、短期大学やII部の廃止には複雑な思いもありました。そのようなことも含めて、状況の中で成長して行く大学への思いをますます大切に参りたいと存じます。

ことに本年のコロナ禍での、大学関係者、学生諸君のご苦勞を考えると卒業生としては、居ても立っても居られないとの思いに駆られます。久富木原学長の「ひとりの退学者も出さない」との強いご決意を伺い、全学同窓会としても在学生支援を可能な限り行うべきだとの考えに至りました。同窓会は、一義的には卒業生どうしの親睦交流が目的で存在しているものではありませんが、同時に、必然的に、後輩たちに何をしてあげられるかという発想に及ぶべきものと考えております。

発足以来25年を経た全学同窓会の思い出の中で、印象に残るシーンは数々ありますが、屈指のひとつが、1998年3月30日の「長久手お引越しの場面です。それまでの名古屋市瑞穂区高田町の旧キャンパスの片隅のお古のロッカーから始まった同窓会活動の拠点の移転

です。敷地が旧キャンパスの10倍となった長久手キャンパスに迷子になりながらも、たどり着いた部屋は、文学部棟3階、その眺めの素晴らしかったこと。ただひたすら感激して、当時の森学長に感謝した役員一同でした。もっとも、その後残念ながら、実験・実習棟の地下に再移転して現在にいたっております。もっと残念なのは、そのとき一緒に記念撮影した役員のうちもう何人かは、鬼籍に入られてしまったことです。

愛知県立大学の発展をお祈りしつつ、全学同窓会も大学とともに年輪を重ねて行きたいと存じます。

3. 寄稿 — 母校へのまなざし —

我母校と心象風景

川下 政美 日本特殊陶業株式会社 元最高顧問(外国語学部スペイン学科 卒業生)

2020年秋、母校からの周年記念行事に関わる執筆依頼を受け、まずは原点回帰を決め、昔の通学路を往復で辿った。自宅より53年前と同様に徒歩、バスを乗り継ぎ高田町の母校校舎に着き(現在は名古屋経済大学高蔵高等学校)、校内散策を終えて帰路に就く時、そこには白昼下にも拘わらず、エモーショナルな初老の自分が居た。(過激な学生運動の正門バリケード、和風室・和風館での徹夜の語り、サッカー部の合宿、講堂での各種イベント、数々の友の顔……走馬灯の如く飛び交うフラッシュ画像に一瞬立ち竦み、感極まりそうな自分と戦っていた。)

自分の一生を決めてくれた愛知県立大学、感謝しても感謝し切れぬ我母校。

1968年春、名古屋に家庭の事情で地元の国公立大学限定での受験がやっと許された青年が居た。一方、その若者は世界を駆け巡り、3ヶ国語をマスターしたいと言う秘めたる熱情を抱いて居り、目の前の厳しい現実に煩悶する日々を過ごして居た。

想いは通ずる!!

1968年春雷を伴い、運命を決める1回目の奇跡!!

何とこの年に愛知県立大学に「外国語学部スペイン学科」が創設されたので有る。

彼は入学と同時に英語に続く2番目の外国語と即座に接する事が出来る喜びに浸り、同時合格した他の国立大学は眼中から消え去った。入学後は開設初年度の熱気溢れる諸先生方や工夫を凝らしたカリキュラムの下、団塊の世代のあの厳しい受験戦争に倍する勉学に勤しむ事が出来た。母校教育の素晴らしさは、当時極めて希少価値だった日本政府支援の日墨交換留学生一期生にこの若者を含む、5名の合格者を出した事で全てが証明されて居る。彼は学業以外にも多くの素晴らしいサッカー部の諸先輩や同僚達に恵まれ、文字通り、愛知県立大学の学生生活を満喫、謳歌したので有った。

恩師群から肉親以上の数々の助言を受けた後、スタートを切った社会人生活は若者には過酷かつ実に厳しく、文字通り一気呵成の一言。家族同伴を含め、海外生活は通算20年強、歴訪国約50ヶ国、インドネシア語の修得……と瞬間の月日の経過となり、白髪が増え、気が付けば代表取締役の肩書が付いていた。

同時に自分の中で騒めく「内なる声」に苦しみ、悩み出したのも正しくこの頃で有った。

内なる声は常に自分に問い続けていた……母校への感謝と恩返しや如何に?? スペイン学科同窓会が立ち上がった時、会長職を3期6年務めた事で自己満足していないか??……自然の摂理とは言え、父や兄貴の様だった恩師達の相次ぐ旅立ちや、スペイン学科一期生の同級生達の余りに早い悲報に接する都度、焦りに近い気持ちに苛まれる事が増えた。

想いは通ずる!!

2010年秋風に乗れ、天命とも思われる2回目の奇跡!!

母校の愛知県立大学から「中部の企業トップに聞く」なる講座開設に伴う、講師の依頼が教授として母校に残った盟友より持ち込まれた。願っても無い機会と絶好のタイミングで有り、持ち得る経験則を駆使し、熟慮を重ね、精魂傾け練り上げた「社会生活参入の心得」を演題に若き後輩学生諸君への授業を行った。以後3年間合計数300枚程の講義レポートは生涯の宝物の一つになって居る。

そしてこの講座が不思議な一期一会の縁となり、母校との関わり合いが一層深まり、2013年に愛知県立大学と愛知県立芸術大学の2校を統括管理する「愛知県公立大学法人」の経営審議会委員に就任した。以後6年間、学長選考委員会委員、大学教学改革人材育成諮問会議委員他、深く母校の改革と発展に関与する事となった。

高田町時代、体育の授業で専用バスに揺られて訪問する事しか無かった長久手キャンパスの広さ、変貌振り、その威容さに当初は圧倒されつつも、我母校に遂に微力乍ら恩返しと御礼が叶う事に喜びを噛み締めた6年間でも有った。この間、未来志向に立脚しコラボが叶った優秀な教職員の方々や2名の経営審議会委員の方には改めて心からの御礼を申し上げたい。この職を辞した日、彼の地より見守って下さって居た方々に黙祷を捧げ、長き個人的想いに終止符を打ち、更なる3つの奇跡との遭遇エピソードを加えて完結報告とさせて頂く旨お伝えを申し上げた。

一方、この誌面を借り、昨今の世相と世の中の風潮を背景に同窓の後輩諸氏に贈りたい言葉が有る。それは「たいりよく」と「かきくけこ」で有る。今後、時に応じ何等かの一助に成り得る瞬間が有れば、一先輩として望外の喜びで有る。

苦しい日々を過ごす毎日の源泉たる「体力」には十分留意し、自己研鑽を怠らず「対力」を養い、「態力」を磨き上げ、不動の「耐力」を熟成させ、「待力」を育み、来るべき好機到来の折には一気に「大力」を発揮願いたい。

更には社会生活の円滑さを計るべく、先ずはかきくけこの原点を大事にして欲しい。

「か」=会話はコミュニケーションの玄関口 「き」=聞く耳を持って、人の話は聞け 「く」=苦勞せよ、苦悩せよ、苦悶せよ、そうすれば必ず工夫が生まれる 「け」=謙虚たれ謙讓たれ 「こ」=心に響く言葉磨け

自身は未だ公職を持つ身では有るが、4つの趣味たる家庭菜園、社交ダンス、ゴルフ、座禅道場を継続しつつ、地域社会への奉仕を怠らず、老母に寄り添い、孫と戯れ、はしゃぐ自分も大切に行きたい……と考える昨今では有る。

愛知県立大学移転20年、大学統合10年、本当におめでとうございます。貴校の益々のご発展を祈念致します。

そして、有り難う!! 我母校愛知県立大学!!

愛知県立大の思い出

佐野 正 全学同窓会 副会長兼事務局長(文学部英文学科 卒業生)

私が愛知県立大学に入ったのは、今から半世紀以上前の、昭和42年の春でありました。当時の県大の様子は今とは随分様違っているのです、この機会に少しご紹介いたします。

平成10年に長久手に引っ越すまでは、私達が学んだ頃の県大は、名古屋市瑞穂区高田町にありました。この校地は命のビザを発給して多くのユダヤ人を救ったことで有名な杉原千畝や、江戸川乱歩が学んだ名門旧制五中(現・瑞穂高校)の跡地を、瑞穂ヶ丘中学校と半分ずつ分けた、本当に小さな狭いものでした。私達が入学する少し前までは、校庭には五中山と呼ばれる古墳があり、女子学生はそこに登って遊んだそうです。

その頃は、昭和22年生まれからの数年、戦後のベビーブーマーと言われた団塊の世代が、大学に進学し始めた頃でした。愛知県も、より多くの学生を受け入れるために、小規模だった愛知県立女子大学を、昭和41年から愛知県立大学と名称変更をして、校舎を建て増しをして、外国語学部を増設して、男子学生も受け入れるようになりました。私達が入学した当時は名門の女子大、「県女」の雰囲気はまだまだ強く残っており、3・4年生は県女の女子学生でした。先生方の中には「男子が入って来たら、随分ガラが悪くなった」とよく嘆いておられる方もみえました。また、今はなき夜間の県立女子短大や、県大二部も同じ校舎・校庭を使用しておりました。

部活動も野球部はありましたが、まだ部員も少なく、新入部員募集のキャッチコピーは「君も今すぐ正選手」という魅力的なもので、対戦相手は近所の高等学校でありました。私は新入生歓迎会で、「エスパニア・カーニ」という華やかな演奏で迎えてくださり、また、新入部員募集のポスターには「美しい先輩が、手取り足取り親切に教えます」とうたった、ギターマンドリンクラブに入りました。当時の1000人足らずの小さな大学の中で、総勢70人の部員を誇るギタマンは、100名ほどの合唱部に次ぐ大きなクラブでありました。

ギタマンの男の先輩はフランス科2年生のKさん一人だけで、男子は1年生が私を含め3名入りました。募集のポスターに書いてあったとおり、私は美しい女性の英文学科2年生の先輩Wさんに、ギターの弾き方を一から教えていただきました。しかし、数ヶ月すると、大きな体と体力の必要な、コントラバスを弾くように言われました。コントラバスは、大きすぎて持ち運ぶのに不便でした。

その頃はマイカーブームが県大生に来る前で、車に乗っている学生は一人もいなくて、演奏会などでコントラバスを運ぶのには、タクシーに乗せて運ばなくてはなりません。なかなかタクシーが大きなコントラバスを載せてくれないので、運ぶのには大変苦労をしました。また、当時は弦に羊の腸(ガット)を使っていたので、少し嫌な匂いがしました。半田農業高校や、鳴海製陶などに行き、演奏会をしたり、名古屋市のお寺や、知多半島の旅館、夏休みには藪原に合宿に行ったのを覚えています。その時は、朝から晩まで何時間も血の出るような練習が続きました。ギタマンには一年ほど在籍しましたが、いつの間にか足が遠のき、除籍処分になってしまいました。

その頃長久手には、すでに県大の用地が確保されており、体育館での授業の他に、何度か私達は40分ほど大学のバスに揺られて、はるばる体育の授業を受けに行きました。広い敷地には管理棟のようなものが一つ建っているだけの寂しい所でした。ぐるりと回りを散歩して、深呼吸を数回してまたバスに揺られて大学に帰ってきました。

英文学科には著名な先生方がたくさん在籍してみえたのですが、私はちっとも勉強に身が入らないまま、一年留年をして、英語の教員免許状とギターの弾き方だけ覚えて、5年目ようやく卒業をしました。その頃70年安保反対の学生運動が盛り上がり、世間は騒然としておりました。留年や大学をドロップアウトするなどは、それほど珍しいことではありませんでした。当時40人の英文学科で4名ほど私と同じように留年していました。幸運なことに、その頃の国立大学と公立大学は、一ヶ月の授業料がわずか1000円ということもあり金銭的な負担は大変小さく、私の親も留年にもあまりうるさく言うことはありませんでした。激しい学生運動の広がり、私が3年生になる時、東京大学の安田講堂がバリケード封鎖され、昭和44年には東大の大学入試が中止されるというようなこともありました。県大では、大学の規模が小さいこと、女子学生が大多数だったこともあり、影響はあまりありませんでした。しかし、その年の大学入試は東大を受けられない優秀な学生が、玉突き式に下へ降りてきて、県大でも入試ではかなりの影響があったものと思われれます。

私は頂いた教員免許で、40年近く愛知県の私立高等学校で、英語教員として働いてきました。これで愛知県のお金を使って勉強させていただいたことに対して、十分ではないと思いますが幾分かはお返しができたと思っています。ギタマンでは、ギターの弾き方を教えていた

だきましたが、部活動から離れても、ギターは時々弾いておりました。最近のコロナで外出を自粛しているときには、家でギターを弾くことが多くなりました。

家でギターを弾くときは、聴衆は妻一人ではありますが、彼女は大層褒め上手で私のギターを「うまいうまい」と褒めちぎります。豚もおだてりや木に登るそうですが、私もおだてられれば、ギターも弾きます。妻が食事の用意をする間、何曲も演奏しています。妻は「高級なレストランにいるみたい」と申しますが、高級なレストランではギターではなく、ピアノ演奏がほとんどだと思います。ギターは「小さなオーケストラ」と言われるように独奏楽器なので、メロディーも伴奏も一人で出来ます。共演者がなくてもいいので、便利な楽器です。あいにく、県大ギタマンは長久手に引っ越しをしてからしばらくして廃部になってしまいました。誠に残念なことです。

今では、長久手キャンパスには立派な校舎が立ち並び、情報科学部や看護学部など、学部も増設され、ロボットの研究棟や、看護学部の新しい建物も増えました。更には大学院も出来て、その中で3000人を超える学生が学んでいるのです。学部の再編がなされ、私達が学んだ英文学科が英米学科と合体してなくなり寂しく感じていますが、世の中もコロナ騒動を除けば、落ち着いており、学内も静かに学問をする雰囲気が漂っています。

そして街の中とは違い、ここ愛知県立大学の周辺には、学生を勉強から引き離すような誘惑は見当たりません。そして、大学には、教員・職員他に学生の勉学をサポートする、後援会や全学同窓会という組織があります。後輩の皆さんはこれらのサポート体制を十分に活用して、しっかりと勉学に、部活動に励んでください。皆さんの活躍を期待しています。そして同窓会活動に興味のある方は、自由な時間が取れるようになったらぜひ同窓会活動に参加してください。心よりお待ちしております。

愛知県立大学 高田キャンパス(移転前)



正門



南からの眺望(瑞陵高校屋上から)



6号館



7号館



8号館



時計台の風景



中庭



学生会館前



図書館



和風館



講堂

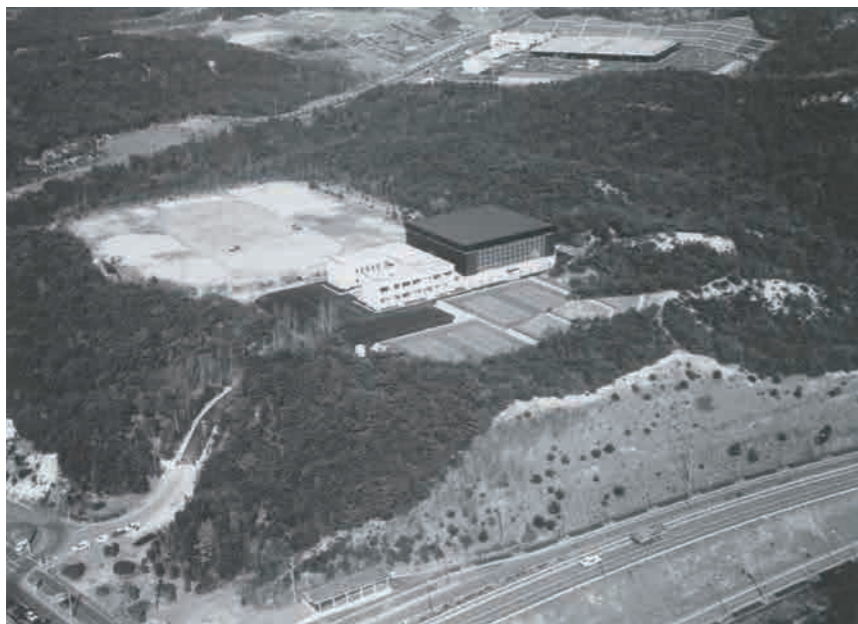


本館



事務室

長久手運動場



長久手運動場の建設



長久手グラウンド



長久手テニスコート・体育館



体育授業で長久手運動場へ

寄稿 —新大学誕生・長久手移転を振り返って—



はじめの六年

森 正夫 元学長(第10代)

今日、2020年の愛知県立大学は、外国語、日本文化、教育福祉、看護、情報科学の5学部、国際文化、人間発達学、看護学、情報科学の大学院4研究科を擁し、6センター及び6研究所から構成され、長久手・守山の両キャンパスで活動を展開する総合大学であり、愛知県立芸術大学とともに、愛知県公立大学法人を構成する。1998年4月にはじめて来学し、以後6年間、2004年3月までの長久手草創期に学長として在職した私にとって、20年後のこの発展の姿は、文字通り目を見張るばかりである。2004年4月、法人化情勢の進む複雑な難局の中で学長の任に就かれた佐々木雄太氏の類まれなご奮闘をはじめとし、2009年、本学と統合した愛知県立看護大学の方がたなど、数多くの関係者のご努力の蓄積なくしては考えられない。

ただ、1998年4月の長久手キャンパスも、とりわけ1991年以来の名古屋市瑞穂区高田町のキャンパスにおける塩澤君夫学長と教職員・学生の不断の改革が結実し、その7年間のご努力が輝きを放ち、新鮮な息吹きに溢れており、私を感動させた。以下は、長久手キャンパス開設以来6年間、立上げの折の歩みの、いくつかの特徴的側面の紹介である。

I. 移転・開学一新たなる出発

2019年4月は、正確に言えば、愛知県立大学が1998年4月、ここ長久手の新キャンパスに移転してから21年目を迎えた。

敗戦直後の1947年、愛知県立女子専門学校として発足した本学は、1951年4月、名古屋市瑞穂区高田町の県立熱田中学(五中)跡に移転し、1957年、四年制の愛知県立女子大学へ改組し、1966年、男女共学の愛知県立大学となり、戦前からの文教地区である名古屋市瑞穂区民のよきご理解を得ながら着実に成長してきた。ただ、キャンパスの狭さが年々切実に感じられるようになり、1990年、前年に「愛知県立大学将来計画」(案)を作成した本学は、愛知県と二人三脚で、新たな土地への移転・拡充につながる作業を開始した。本学の教職員・学生の熱意と要望は、以後1991年、学長に就任された塩澤君夫先生を動かし、7年間の長きにわたる準備と県当局の理解を得て、遂に長久手の新キャンパスが誕生した。

新キャンパスは単なる移転ではなく、移転・開学であった。そこにはハード・ソフトの両面があった。

キャンパスが10倍になり、建物が3倍になり、緑濃い広大な敷地の、明るく静かな教室で、学生は授業を落ち着いて聴き、教員は集中できる研究室を確保し、安心して学科内部と全学とで話し合いがもてる会議室・講堂が

ある。新しいハードの所産である。

前年、1997年、大学進学率は全国で47.3%に達して高等教育の大衆化が顕著になり、社会人特別選抜を実施する学部や昼夜開講制へのニーズが高まり、大学院入学者も急増して高等教育の高度化が進展し、社会の各方面における情報化の発展はインターネットを広範に普及させた。また、公立大学は、その12年前の1984年の34校に較べて57校に達し、実に40.4%も増えていた。第二のハードともいうべき社会環境の大きな変化が生まれていたのである。1998年の長久手キャンパスの誕生が移転・開学と呼ばれる所以は、これらハードの大きな変化に対応する新しいソフトの創造である。1991年からの7年間の歳月、瑞穂区高田町で、当時在学していた教職員がお互いに辛苦とその意見交換を重ねながら、編み出したのは、この大きな変化を感じ取り、教育の方法・中味そのものを質的に充実する体制であった。

第一は教育組織の拡充である。はじめて理工系の学部としての情報科学部を設立した。そして、文学部に日本文化、外国語学部中国及びドイツの計三学科を新設して国内外の地域研究の体制を拡充するとともに、文学・外国語の二学部を基盤として本学初の大学院を置いた。国際的な文化摩擦・文化交流の研究と教育に従事する大学院国際文化研究科修士課程である。さらに、文学部の社会福祉・児童教育二学科を拡充し、前者に四年制の保母課程を設置した。

こうした教育組織の拡充は、もとより、情報化、国際化、福祉社会化、生涯学習社会化の進展に応えるためだが、すべての教育組織を連ねて、愛知県から日本、そして東アジア・東南アジア・欧米・ラテンアメリカに及ぶ地域と地域社会への貢献を期している点に、本学の大きな特色がある。理工系の情報科学部にも情報システム学科に加え、地域情報科学科が置かれていることに注目していただきたい。なお、その後2002年には大学院国際文化研究科に博士課程、大学院情報科学研究科修士課程が設置され、2004年には同博士課程が設置された。

典拠：「移転開学記念式典」における「学長挨拶」(1998年5月15日)

1998年の長久手への移転は、ここに述べてきたように、単なる大学の設置場所の名古屋市瑞穂区高田町から愛知県長久手町(現在は長久手市)への移転ではなく、高等教育の量・質を拡充する開学、本学にとってはいわば第二の開学であった。

現実に、翌1999年3月の卒業式の時点で、社会人の学生は大幅に増え、帰国子女、中国引き揚げ者や留学生

の入学も顕著だった。なお、1998年4月の入学者685名のうち、社会人は150名、夜間主コースは203名、通常の在学年齢を越える25歳以上65歳までの年齢層に属する学生は113名に達し、1999年4月の入学者にもほぼ同様な分布が見られた。まさに、長久手への移転は文字通り新たな開学であった。

II. たちまち訪れた難局

その1

半年で予算削減20%・十年間に10%定員削減

しかしながら、難局もまたたちまち訪れた。

来世紀につながる本学の明るい展望がこのようにはっきりと見えてきた開学後わずか半年の間に、本学をめぐる県内外の環境には、他方で前途を憂慮させるほどの激変が生じた。その最大のもの、日本経済の底知れぬ不況との中で深刻化した金融不安である。この経済情勢を切り開く術をもたないわが国の政治システムもまた不安を大きく増幅した。

愛知県の1998年度の県税収入は当初予定額を1050億円下回ることとなり、大阪、神奈川などの現況とともにテレビの全国ニュースで伝えられるまでになった。影響は本学の当該年度予算の20%削減と翌1999年度以降10年10%の定員削減計画に関する指示となって顕在化した。本学の予算・定員はこれまでになく切迫した事態の下に置かれていた。

典拠：「移転・開学式典から半年」(『愛知県立大学学報』第42号(1998年11月10日))

その2

続く教育研究費削減・国公立大学設置形態検討の開始

2000年度の本学教育研究費は1998年度の75%となり、文部省(当時)は国立大学法人化に着手し、自治省は公立大学会計制度の検討を開始した。

本学が1998年度の長久手町への移転・拡充に当たって掲げた①国際化、②情報化、③福祉社会及び④生涯学習社会への対応、という四つの基本目標は、移転・拡充が本格的に構想された1990年代初頭にはまだ見えていなかった地域社会変貌の主要な側面を的確に把握して設定されたものであった。四つの基本目標に沿って構築された学部・学科・大学院研究科・センター・施設等の教育研究組織は着実に成長し、当時の判断の先見性を証明している。

にもかかわらず、1990年代初頭には想像すらされないか、あるいは問題視されることの少なかった状況が顕在化しつつあることも直視しなければならなかった。たとえば、日本経済の構造的破綻の一環としての愛知県にお

ける製造業の長期停滞は、県の法人税収入を大幅に減少させ、その結果が本学の教育研究費を直撃し、2000年度では、すでに触れたように1998年度の75%にまで落ち込んだ。四つの基本目標の下での教育・研究活動に影響するところは大きかった。

他方、2008年度の大学全入時代開始を導く少子化の進行、これらに基づく十八歳入学の学生たちの学力や志向に関わる変化、その中での国立大学の独立行政法人化の動向については、2000年8月から文部省(当時)の検討会議を構成する四つの委員会が審議を開始し、2002年3月末までには構想がまとまるはずであった。しかし、独立行政法人化後の国立大学の具体像には未確定な要素がなお多く、ましてやそれが公立大学の法人化にどのような形で連動するかは不明であった。

2000年度から、本学では、将来計画委員会を結成して委員を選出し、二十一世紀の愛知県地域社会に対し愛知県立大学がどのように貢献するか、という課題を自ら設定し、その解決に資する将来計画の立案を開始した。

典拠：「四つの基本目標と新将来計画」(『愛知県立大学学報』第44号 2000年10月31日)

III. 打ち続く難局に立ち向かう一教職員そろって草を刈る

本学は、1998年度の財政状況とこれに伴う厳しい節減が必至となり、美しい校内緑地の維持管理を業者に委託することが難しいという状況に直面した。学部事務室の職員を中心に、この年の10月から毎週1回、5～6名で学内の草取りを行う案もあった。しかし、職員だけでなく、教員や学生にも参加を呼びかけ、「キャンパスグリーン運動の日」を毎年定期的に設定してはどうかという提案も出た。学長、事務局長で適切な企画を考え、各学部でも話し合うことになった。結局、環境美化を学長はじめ、教員・職員・学生が可能な限り参加して行うこととした。

翌1999年も、環境美化計画が検討され、正門を中心とした外周部分で行うこととし、10月27日(水)の13時から14時にかけて行った。今でもおよそ20年前、穏やかに晴れたこの日の午後、教職員が、正門の左右に総出で展開し、草を刈った姿が、険に浮かぶ。

2000年も、植栽予算が十分でないため、年1回実施してきた教職員・学生による草取りを年4回実施することとし、第1回目を5月24日(水)に行い、その後の日程については再度考慮することとした。

典拠：平成10年度第8回評議会議事録、同11年度第12回評議会議事録、同12年度第3回評議会議事録

IV. 大学が大学であるために—公立大学法人化と愛知県の方針提示の情勢の中で

(1) 本学の存在意義の再確認

2003年4月25日、公立大学の法人化に関する特例を含んだ地方独立行政法人法案が閣議決定され、国会に上程された。法案の帰趨はその後の審議に委ねられたが、成立した場合、本学の設置者としての責任をもつ愛知県と本学とは、いずれ法人化の途を選択するのかどうかの判断を迫られることになる。

かつて、私たちはこの長久手キャンパスへの移転・拡充を構想し、設置者愛知県と長期にわたる交渉を行い、1998年にそれを実現した。しかし時代は大きく変わった。愛知県の財政状況の危機の様相が持続する中で、地方自治体必置の施設ではない大学が新たに将来を模索する条件は厳しさを増していた。2001年、愛知県は行政改革の一環として、県立の大学の地方独立行政法人化をも視野に入れることを明示し、まもなく愛知県が県立の三大学の今後のあり方についての検討を開始することが予測された。

(2) 大学が大学であるための条件と公立大学

大学の任務は学生から豊かな人間性と基礎学力を引き出し、自主的に活動する主体を育て上げることにある。大学がこの意味での大学であるためのもっとも大切な条件は教育研究の自由である。上記の地方独立行政法人法における「公立大学法人に関する特例」の章で、設立団体は「公立大学法人が設置する教育研究の特性に常に配慮しなければならない」と特に規定しているのは、この条件が不可欠だからである。この場合、大切なのは、教育研究の特性を支えるものとしてのこの学問の自由は、教育研究の私物化とは相容れないことである。

学問の自由とは、広く国民が、あるいは地域住民が、学生を自主的に活動する主体に育て上げ、真理を追究し、真実を知るためにこそ大学に付与されてきたものである。すなわち、学問の自由は国民、あるいは地域住民のためのものである。したがって、研究テーマの設定、カリキュラムの編成、教員定数・ポストの配置などを決めていく際にも、国民や地域住民への貢献につながる大学としての基本方針がまず策定されなければならないであろう。

公立大学協会では、二十一世紀を迎えるに当たり、今後の公立大学の進路を「分権時代の公立大学」と集約した。地方分権が進めば進むほど、地方公共団体を設置者とする公立大学は地域社会への貢献を強く要請されることになる。

(3) 本学の研究・教育の現有力量—地域貢献の条件

本学の研究水準を示す客観的指標の一つに触れたい。国公私立すべての研究機関に属する日本国の科学研究費の領域で、本学の教員は奮闘していた。本学の2000年度の新規採択率38%強という数値が、全国の膨大な研究機関中第5位になったという文部省(当時)通知は本学の大きな驚きと喜びであった。この水準は、2001年度から2003年度に至るまでの33件、31件、32件という合計採択件数に継承されている。このうち人文科学の全分野について、国立情報学研究所のデータベースNACSISに基づく算定結果によれば、本学は、1998～2002年度の通算で、全国788の研究機関中第51位、公立大学中第3位であった。

本学は、この2003年4月、在学の学生数が大学院生を含めて3000人以上の規模をもつに至った。公立大学協会・21世紀の公立大学の財政のあり方検討会は、5つの外形的指標に基づく分析により、本学を公立の12の大都市圏総合大学の一つに位置づけた。ちなみに、現段階における自己規定では、本学は「四年制学士課程を基軸とし、大学院で高度職業人養成を併せ行う、公立の複合型大学」である。

(4) 本学の課題

しかしながら、私たちには克服すべき課題もまた多かった。本学は、学生の気分をも含む学内外の事態を冷静かつ客観的に把握するという側面、及び外部からの提言や批判を謙虚に受け止めて自己を不断に改造するという側面においては、きわめて不十分ではなかっただろうか。

この状態を突破するためには、本学の構成員が、その関心を各個人と各学科の外にも向け、大学という一つの自立的な組織体としての自覚を飛躍的に高め、自己点検・評価、学外評価及び第三者機関の評価などで既に明らかにされた諸課題を解決していく必要があった。

本学が地域社会に貢献し得る二十一世紀の公立大学として大きく成長させ得るかどうかは、この点にかかっていた。

典拠：「大学が大学であるために」『愛知県立大学学報』第47号(2003年5月31日)

V. 愛知県立大学における地域連携・地域貢献

(1) 移転・開学6年目に設定した課題としての地域連携・地域貢献

私たち愛知県立大学では、ここ長久手キャンパスに移転した1998年度以来、その時々の本学にとってもっとも切実な課題を設定して、自己点検・自己評価を実施してきた。移転当初に設置した課題は、「移転拡充」(1998)、「教育・研究活動」(1999)、「昼夜開講制」(2000)、「教育・研究活動の総体及び全教員の研究業績・教育活動・

社会活動」(2001)、「一般外国語教育」(2002)であった。そして2003年度の自己点検・評価委員会が設定した課題が「愛知県立大学における地域連携・地域貢献」であった。

(2) 本学に沸き起こった自らへの内的な問いかけ

しかしながら、自己点検・評価と将来計画を任務とする評議会第三委員会の2003年度第1回会議で、文学部の一委員から自己点検・自己評価の課題として、地域連携・地域貢献が提案された際同委員会の空気は忘れることができない。他にも懸案の課題は複数存在していた。だが、すべての委員がこの一委員の提案に対し、即座に心からの賛意を表明し、同委員会の採択するところとなったのである。それは、本学が、すでにこの面で十分な実績を挙げてきたという確信をもち、適切な総括をするに足る理論的準備を終えていたからでは必ずしもない。自分たちが果たして公立大学の使命である地域連携・地域貢献において何ほどのことをしてきたのか。どのような問題点を持ち、どのように取り組むべきか。本学構成員は、むしろそのことを客観的に把握したいと考えていたのである。私たちは地域連携・地域貢献において何をなすべきかを自らに問いかけたのであった。それは21世紀初頭の稀に見る複雑な状況の中で、愛知県設置の公立大学としての本学の存在意義を自ら明らかにするための不可欠の営為であった。

(3) 全国嚆矢の試みとしての地域連携・地域貢献それ自体の自己点検・評価

この自己点検・評価に際し、本学の学生、院生、卒業生及び保護者、愛知県の教育界、産業界及び地方自治体から寄せられたアンケートにおいて、地域連携・地域貢献に関わる本学の活動はどのように受け止められているか。そこにはどのような特徴があり、どのような問題点が内在しているか。本学の構成員は真摯な眼差しで本報告書の検証を見守り、本学の学外評価委員会のご批判を待った。

地域連携・地域貢献を直接的にテーマとする全学的な自己点検・評価は、全国的に見て、おそらく本学のこの試みをもって嚆矢とする。それだけに、本学構成員は、本報告書の採用した項目の設定や分析の視点が自己点検・評価の方法論として適切であるか否かについても大方のご教示を得たいと願った。

最後に、本文約230頁、参考資料及びアンケートデータ約280頁の大部な本報告書を作成した自己点検・評価委員会及び事務局の関係各位に厚くお礼を申し述べたい。

典拠：愛知県立大学自己点検・自己評価委員会2003年度報告書「愛知県立大学における地域連携・地域貢献」(2004年3月)

長久手キャンパス開設当初6年間の歩みの特徴的側面のご紹介と言いながら、その間に自ら記した文書の抜粋に留まり、汗顔の至りである。最後の3行にも、21年前の文末の謝辞を使わせていただいたが、感謝の気持ちは当時と変わらない。なお、IIIでは現県大総務課のご支援を得たことを記させていただく。

“整備計画”のころ

山田 正浩 元文学部日本文化学科 教授

県立大学は、1998年4月から現在の長久手キャンパスで新しい装いのもとで再出発したが、遡って‘87年横越学長の時、移転・拡充の動きが具体的に進み始めてから、10年を経てようやく実現したものである。大学としての計画を県に提出するため学内で喧々諤々の議論が進んだが、それを受けて’90年12月には、県で「愛知県立大学整備計画に関する報告書」が策定された。当初、‘96年4月から、とされていたが、実際には2年遅れて実現したものである。移転・拡充の中身はなかなか盛りだくさんで、①長久手キャンパスへの移転 ②情報科学部の新設 ③文学部、外国語学部での学科増設 ④大学院（修士課程）の設置 ⑤女子短大（夜間）と外国語学部II部を廃止し、昼夜開講制に模様替えする、など。後に何回も当時の文部省に事前相談に出かけたが、ある時の応対した係官氏が、正式のやりとりが終わった後の雑談の時、“一時にこんなにたくさんをやる例はほとんどない”と言っていたことを思い出す。

わたしが整備計画の中で関わったのは、a) 一般教育の一部メンバーを母体にして学科を1つ起ち上げること b) 整備計画の後半で計画全般の実務を担当する教員側のメンバー（調整委員）に加わったこと、であった。

a) 整備計画が進行していた頃、全国の多くの大学で議論されていた課題の1つに“教養改革”があった。組織としての教養部は解体して大学全体で教養教育を分担する方向、教養部を専門教育も担当する“総合科学部”的なものに改組する方向、などである。上述の学内の議論は学長提示の“5つの大柱”を基にして進められたが、その1つに、「一般教育の改革」が挙げられていた。教養教育は全学で分担すること、一般教育教員の一部、人文、社会系教員を母体として1学科を立ち上げること、の2つについて学内の合意は早々に出来た。異論が出た記憶はない。ただ、県との間では厳しいやり取りがあった、と聞いている。自然系教員は情報科学部へ、体育教員は児童教育学科に転属することになった（通常教養担当スタッフに含まれるべき外国語教員は以前から文学部英文学科、外国語学部に所属していた）。学科は日本史の各分野を中心にして構成し、学科名称は“歴史文化学科”を予定していたが、途中で“日本文化学科”に変更した。“歴史文化学科”の名称に県からなかなかゴーサインが来なかったのである。わたしが退職する頃、また学部学科の再編が行われたが、その結果、現在の日本文化学部歴史文化学科になった。20年近くたって当初構想した学科名称に戻ったわけである。

b) 整備計画全般に関わるようになって、学内で出席する会議の数、県庁に出かける頻度が増えた。それに当

時の文部省に2か月か2か月半のインターバルで事前相談に出かける仕事が増えた。いつの間にか、朝学校に出ると、まず事務局の建設準備室（整備計画のために事務局内に臨時に置かれた）に顔を出して小一時間をつぶし、それから研究室に入る、そんなことがすっかり身につけてしまっていた。この頃、大学の増設、増設は“大都市内での増設は認めない”、“学生定員増は原則認めない”という厳しい制約下にあった。県立大学は名古屋市内から長久手に移るのだから前者については何の問題も無かった。後者をクリアすることが大きな問題であった。学生定員増は原則認めない、にもかかわらず定員増をするためには、いくつかある例外項目に該当させることが必要であった。外国語学部II部は廃止するからその定員は振り替えられるが、足りない。短大も廃止するが、短大の定員は4大には振り替えられない…。例外項目の1つに“昼夜開講制”があって、これに該当させることが出来てクリアできることになった。1回目の事前相談で明確な返事が返ってきて、ホッとしたことが記憶に鮮明である。夜間の大学教育が当初の目的であった“勤労学生のための教育”からやや外れてしまっている、という認識があり、一方で高まってきた社会教育、生涯教育の需要に答えるため、昼夜開講制は当時の文部省にとって、“おすすめメニュー”の1つだったのである（夜間主コースに在籍しても、相当程度昼間主コースで単位が取れる）。

長久手に移る前年、秋だったと思う。当時の塩澤学長が仰るに、「何か記念に、高田キャンパスのものを長久手に持って行きたいんだけど…」と。間もなく図書館の前の大きなクスノキが何本か、枝を取っ払われ根をブスブス切り取られた状態で長久手に運ばれていった。行った先は長久手キャンパスの南門に出る道と体育館に向かう道が分かれる三角形の所である。2年前、県大に用があって行った時“久しぶりに…”と思いついて足を向けてみた。1本だけ少し元気がないように見えた。

新学部入試と怒涛の学生部

日置 雅子 元外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻 教授

「進むも地獄、留まるも地獄!」、愛知県立大学の移転拡充計画が視野に入ってきた頃、既に首都圏の大学で郊外移転を果たした大学の中には、「失敗だったのでは?」というつぶやきが聞こえていた。移転の土地である長久手校地は、人里離れた東部丘陵地帯に位置する半ば山の中である。一方、狭逸な旧高田町校舎では、1学科の増設も不可能という状態であった。ならば、「いずれも地獄なら、前に進もう!」とばかりに、移転計画は本格化した。高島学生部次長と共に、私が学生部長としてその任にあたったのは、平成9年度から10年度(1997-98年度)、旧高田町校舎の最後の年と新長久手キャンパスの最初の年であって、いわば県大版「疾風怒涛」の2年間であったと言えよう。

当時の旧学生部の仕事は、学生の入学から卒業に至るまで、教育と教務関係以外のほぼすべての学生生活万般を管掌していた。4月の入学式、夏のオープン・キャンパス、秋の大学祭、1・2月の入試と3月の卒業式、これが学生部の5大イベントである。中でも、学内外に対して最も神経を使うのは入試であり、それは今でも変わりはない。そして、私の最も強い思い出に残るのも、平成9年度の辛苦を極めた入試である。

この年の大学入試センター試験や文学部と外国語学部の入試は、学生部の従来のノウハウで粛々と進められた。問題は、新設の「情報科学部」の入試である。新設学部には志願者が殺到するが、本学も例外ではなく、倍率は36倍の余に達した。当然、狭い高田町校舎に何千人もの受験生を受け入れるキャパはなく、名古屋市の総合アリーナを借りて行うことになった。加えて試験問題も、センター入試を利用することはできないので、すべて自前の試験問題を用意しなければならない。これだけでも、それまで経験したことのない入試の実施である。その準備のために、学生部の担当職員は夜を徹して働いた。皆カリカリ、ピリピリして、学生部長ですらうかつに声をかけられないほどであった。夜ともなれば、部屋はタバコで紫煙たなびく始末、女性職員がいくら「禁煙」のビラを貼っても、効果なしであった。

吉田課長補佐による陣頭指揮の下、学生部職員が必至で準備しているさなかにも、教員や他の部署の職員は長久手への引っ越し準備に余念がなく、2月も末になると、とうとう学生部だけが取り残されてしまった。がらんとした校舎に、学生部の明かりだけが灯る風情は何ともわびしいものであるが、そんな感傷にふける余裕もなく、職員はただひたすら3月の入試に向けて全力を上げてくれた。

そして、いよいよ新学部入試の当日がやってきた。広いアリーナに整然と並べられた机につく沈黙の受験生、

それを2階から見下ろしながら監督・指示するわれわれ執行部。はらはらしながら見守る中で、試験は順番に粛々と進行し、あと残すは理科の試験。と最後に来たところで、パラバラと問題ミスが発生!やはり避けられなかったか。無念の思いはあったが、ただ、採点に影響するミスではなかったことが、不幸中の幸いであった。

入試もすべて無事に終えた3月末、整理する暇もなく、学生部の引っ越しが一気に行われた。明けて新年度の4月1日、今度は入学式の準備が目前に迫っていた。式そのものは手慣れたものとはいえ、入試業務で新キャンパスの説明会に出られなかった学生部にとって、キャンパス内の建物配置や動線はもとより、最新の照明・音響装置が設備された講堂を動かすのもひと苦労であった。

入学式は爽やかな好天に恵まれ、新入生たちの顔は、真新しいキャンパスの中でいずれも、いつにも増して晴れやかであった。学生たちの通学は、名鉄バスをチャーターした直行バスであったが、乗りこぼれや渋滞に巻き込まれるなど難渋を極めたものの、とにかくにも新天地での生活はスタートしたのである。ただ、移転当初、学生部長室の設えが全くなされていなかったのには唖然とした。あるのは学生部長の机と高田町から持ち込んだ古びた書類棚一本、そしてむき出しの白い洗面器、応接セットはおろか、次長の机すらない!聞いてみれば、学生部から何の要望もなかったからと言う。確かに、入試の準備作業に追まわられて、そこまで気が回らなかったことは確かであるが、それにしても愕然とさせられた。

また、新しい校舎であるためか、庶務方から「汚すな、壊すな、ビラは貼るな!」とのお達し、学生との間に立って、何度走りまわられたことか。同じようなことが、大学祭の時にも生じた。学生実行委員会から、「花火を上げたいが、許してもらえない!」との陳情。あの狭い高田町で認められていたのに、なぜこの広い長久手キャンパスで?この交渉にも、かなりの時間がかかった。まだまだ数え上げればきりが無いが、全体として、新キャンパスでのことは、楽しい思い出の方が多い。

先年、県庁に赴く用があって出かけたところ、当時の学生部の職員にばったり。彼が急遽声をかけてくれて、数人の元職員が集まってくれた。なつかしい顔ぶれである。よもやま話の中で、やはり強烈な思い出はあの情報科学部の入試である。皆の元気そうな顔を見ながら、私は思った。あの学生部の時代は、この人たちの「怒涛の青春」であった!と。

図書の引っ越し

槇島 隆教 学術情報部図書情報課 職員

平成6(1994)年4月に私は愛知県職員として採用された。最初の勤務先が県立大学附属図書館である。当時は名古屋市瑞穂区の高田町にキャンパスがあり、平成10(1998)年4月の長久手への移転に向けて非常に忙しくも充実した日々を過ごした。その時の思い出を一部この場を借りて綴りたいと思う。四半世紀も前のことなので多少記憶違いも入っているかもしれないが、それはご容赦いただきたい。

図書館における移転のメインは当然図書である。作業は図書館職員全員で分担し、通常業務と平行して数年かけて行った。私が最初に携わった作業は、目録カードと現物の照合である。当時図書館にはまだ電算システムは導入されておらず、図書のタイトルや著者等のデータが記載された目録カードで蔵書を管理していた。そのカードをケースごと書庫に持っていき、一冊一冊現物と突き合わせていった。時には何時間も書庫にこもって作業を行うこともあった。

当時の附属図書館には、カウンターと閲覧室、そして事務室の入った2階建ての中央棟を挟んで東西に書庫棟があった。まだ建ってから10年足らずの新しい東書庫に比べ、西書庫は私が入ってきたころにはすでに老朽化が著しく、書架と書架の間の照明も暗かった。そのため西書庫では蛍光灯式のランタンを持ち込み、カードを持つ手を照らしながら図書との照合を進めていったことを覚えている。まるで洞窟の中を探検しているかの感覚であったが、それも懐かしい思い出である。

その次に関わったのが図書の配架計画である。現在の蔵書を分類ごとに何冊あるか把握した上で、将来の増加分や新設学部・学科分(長久手移転時に文学部日本文化学科、外国語学部ドイツ学科、中国学科、情報科学部が新設された)として新たに購入する分も見込んでどれだけの棚が必要かを計算し、配架図を作成するのである。私は図書館の蔵書の中でも冊数が多い3類の社会科学を担当したが、将来分のための空棚をどれだけ確保するかには非常に苦労した。特に冊数の多かった360の社会や370の教育では何度も計算をやり直したし、配架図に落とし込むときに棚一列分まるまる抜かしてしまうというケアレスミスもやってしまった。何度も手直ししたうえでようやく配架図案を提出したが、提出後もしばらくは本当に間違いや見落としがなかったか心配でならなかった。

平成10(1998)年1月末に高田の図書館が閉館し、図書の引っ越し作業はいよいよ最終段階へと入った。高田から長久手への移送そのものは委託業者が行うが、業者への指示は職員が行わなければならない。現在この書架の何列目の何段目の棚に入っている図書を、新しい図書

館の開架(または書庫)の何番書架の何列目の何段目の棚に入れるのか、図書を詰める段ボールに貼るラベルに記入していく。それが最後の作業であった。作業そのものは単純だが、指示を間違えると行き場の分からない迷子の図書がたくさん出てきて混乱は避けられない。残された時間の少ない中、書き漏れや書き間違いのないよう細心の注意を払った。

何とか無事に全ての作業を終え、4月の移転・開学の日を迎えることができた。図書館開館初日、入館ゲートを通して次々と学生が入り、館内で図書を探す光景を見て、これまでの苦労が報われたことをひしひしと感じた。移転作業はこの他にも様々あり、私はその中のごく一部を担ったに過ぎないが、新規採用されたばかりの自分が県立大学の歴史の大きな節目に立ち会えたことは何物にも代えがたい貴重な経験であった。未熟な私を助けてくださった当時の職員の皆様には感謝の言葉しかない。

ところで、移転したのは図書だけではない。長久手キャンパスの南門から守衛室を過ぎると、右手に「春(La Primavera)」と名付けられた記念碑と大きな楠が立っているのが見えてくる。この大楠は元々高田キャンパスの図書館の前に植わっていたもので、移転時にここへ移植されたものだ。高さは図書館の中央棟を優に超え、その堂々とした姿は図書館の、いや高田キャンパスのシンボリック的存在であった。この大楠の下を通して多くの学生達が図書館へと入っていき、2階の閲覧室で図書を広げて学習や読書にいそしんでいた。読書の合間にふと顔を上げると窓越しに見える大楠の姿に、どれだけ学生達は癒されただろうか。私にとっても移転までの4年間を共に過ごした、とても思い出深い大楠である。この長久手キャンパスでもこの先ずっと学生達を見守り続けて欲しいと心から願うばかりである。

将来計画会議とT先生のこと

日置 英鋭 学術情報部長

「県立大学勤務を命ずる」愛知県庁に入庁して初めていただいた辞令には、このように記されていました。

しばらくすると、庶務課の人が迎えに来てくれ、私を乗せた車は南の方に走り出しました。

私は県立大学のことを何も知らなかったため、「県立大学って、どんな所だろう。一体どこに連れて行かれるのだろう」という不安な気持ちでいっぱいでした。

やがて車は幹線道路を左折し、雁道商店街の細い道を縫うように進み、突き当たった先に茶色のレンガ調の建物が現れてきました。

私は、1992年に長久手に移転する前にあった、瑞穂区高田町キャンパスでの勤務を振り出しにして、都合3回、通算8年間県立大学に勤務した経験を持つ古株の職員です。初めての勤務では、主に大学移転整備の仕事に携わりました。

移転整備を進める学内の組織として将来計画会議が最高決定機関としてあり、そこでは委員の先生方がより良い大学を創ろうと、熱い気持ちで議論されておられました。

私の担当中に将来計画会議の決定事項として記憶に残っている事柄としては、
・移転後は専任教員の担当持ちコマ数を4コマから5コマにすること
・土曜日を休講とし、大学を週5日制とすること
・文学部に属していた「一般教育(教員グループ)」を解消し、教養教育を全学で担うこと

が挙げられます。大学の将来に大きく関わる事柄を決定する瞬間に立ち会うこととなり、とても印象に残っています。

また、将来計画会議のもとに設置されていた委員会の中でも情報科学部設立準備委員会の議論においては専門用語が飛び交い、会議録を作成するのにとても苦労しました。

当時の会議メモを見返しますと、「OSはA社とM社の2社に絞られてきている。もはやソフトは付録ではない」「電子決済はかなり進んでいる。お金がなくても瞬時に決済ができる」「バーチャルという言葉をそろそろ使ってもよい」といったような21世紀の今の状況を見越した発言があります。これを見て、「情報科学部はこれからの未来を切り拓いていく学部である」という思いを改めて強くしました。

移転整備を進めるにあたっては、設置者である県と大学との意見調整や将来計画会議に諮る議題等の整理、文部省や自治省への事前相談などの実務を事務局と二人三脚で行っていただいた調整委員の先生が4名おられました。そして、その中心的な役割を担われた先生が、児童教育学科のT先生でした。

当時は事務室内でもたばこが吸えたおおらかな時代で、先生はいつもたばこの煙とともに事務室に入って来られ、一担当者に過ぎなかった私にも「日置君」と気さくに話しかけてくださいました。

有名なロックバンドが恩師のことを歌った「ぼくの好きな先生」という歌の出だしは「たばこを吸いな〜がら」という歌詞ですが、先生はそれを地で行かれており、またアルコールもお好きでした。

T先生との思い出といえば、1993年にT先生とフランス学科のS先生、事務局のYさんと私の4人で、熊本女子大学と北九州大学へ調査の為に出張したことが挙げられます。

用務が無事終わった帰りの新幹線。その食堂車で「これが一番うまいんだ」と勧められ、ビーフシチューをご馳走になりました。そしてその後、先生が岐阜羽島を過ぎてから車内でお酒を注文されていたので、生意気な声をかけてしまいました。

「先生、もうすぐ名古屋ですよ」

「近鉄の中で飲むから、いいんだ」

もう四半世紀ほど前の会話なのに、ついこの前のこのようによく覚えています。

翌々年、先生は急な病のため、移転後の真新しいキャンパスを見ることなく大学を去られました。主のいなくなった研究室の前の廊下を通ったときに、ひどく寂しい気持ちになったのを覚えています。

大学職員としてここまで勤めることができたのも、先生の温かなご指導の賜物であり、感謝の気持ちでいっぱいです。

2019年、私は3回目の県立大学勤務を命じられました。移転整備に携わった私が、長久手移転20周年という記念すべき年に赴任したのも、何かのご縁だろうと感じています。ふと、先生が今の私を見たら、何と言われるだろうかと思いました。

「日置君、まだまだだな。もうちょっと頑張れよ!」

きっと、こうおっしゃるでしょう。

源氏物語に

「九重を霞隔つる住みかにも 春と告げくる鶯の声」

という歌があります。

ここ長久手キャンパスでも、春になると鶯のさえずりが聞こえます。

先生にもこの鶯の声を聞いてほしかったと思います。

千年も前から人々に愛されている源氏物語のように、愛知県立大学が幾久しく繁栄し、物語を紡ぎ織りなすことが出来るよう、古株の一職員として微力ながら尽くしていきたいと考えています。

世界とつなげてくれた母校 ―1989年度入学の県大生の回想―

川畑 博昭 日本文化学部歴史文化学科 教員(外国語学部スペイン学科 卒業生)

鹿児島島の田舎に育った僕は、1989年4月に愛知県立大学の門をくぐった。当時、名古屋市の瑞穂区高田町にあったこの大学は、隣の中学校よりも小さかったが、「地球を丸ごと」とまでは言わないまでも、「世界とつながっている」ことを実感させてくれる場所だった。それには、在籍していた外国語学部スペイン学科の面々の不揃いぶりも大きかったが、バレー部で得た全学部学科の仲間との存在も欠かせなかった。そこは、「まじめでおとなしい」との通俗的な見方を裏切る、あらゆる意味の多元的で多様性に充ちた空間だった。

1989年とは平成元年――だから当時の県大生の間で、僕らは自分たちを「元年度入学」と呼んだ。日本国内だけに通用する暦の変化に過ぎないはずが、「元年」ということばは、僕らを「ゼロ地点」に引き戻すかのような「新鮮な錯覚」を与えた。それでも、その「錯覚」には、根拠がないわけではなかったように思う。

1989年1月の共通一次試験の直前に元号が変わり、社会は瞬間に自粛ムードに覆われた。自分には過去だと疑わなかった戦争の時代は、昭和天皇と同世代の男性が天皇の後を追って自死した報道に接して、この時代にもなお息づいていたのだと驚愕した。4月からは日本で初めての消費税制が始まる。入学後、県大学生自治会が精力的に反対署名を呼びかける姿は、この大学には「社会とつながろうとする学生」がいることを実感させてくれた。「戦後初めて」が溢れる世の中で、社会には、確かに、一つの「区切り」のような感覚があったと思う。

世界も動いていた。入学直後の「天安門事件」は、「閉ざされた国」と教わった地にも、自分たちと同じように自由や正義を欲する人びとがいる情景を見せてくれた。変動は止まらない。11月のある夜遅く、当時始めていたスペイン料理店のアルバイトから帰宅すると、多くの人が壁によじ登り壁を傷つける姿をテレビが報じていた。ベルリンの壁の崩壊である。ドイツを東と西と別々の国と習った僕は、「年に1度の壁の開放日か何かだろうか?」と思うほど、冷戦とか東西対立は「当たり前の現実」だった。

大学の授業では教養科目が強烈だった。入学後最初に受けた社会思想史の講義では、先生の言っていることが何一つ理解できない。そのことがかえって、僕には「大学らしさ」を刻印づけた。関心を持って臨んだ政治学の授業は、始まってみると受講生はたったの2人。毎週学内の喫茶店での雑談が授業となったが、そこには政治学にはとどまらない世界についての学びがあった。高校時代に選択したという安直な理由だけで受講を決めた地学は、50人ほどの教室に1人の男子学生という居心地の悪さ。体育実技は有名で、前期は毎週おんぼろの「県大バス」

で移転予定地の長久手へ行きゴルフやテニス、後期は冬だというのに同じバスで県体育館へ移動し、温水プールでの水泳の授業。文系の大学とは思えないほどの「体育会系」ぶりだった。

専門の授業も1年次から出席もそこそこに、スペイン語を口にしたいがために、愛知県内にいるスペイン語圏の人を探しては出かけた。犬山のリトルワールドではメキシコやペルーの音楽家やダンサーたちと友だちになり、バレーボールのワールドカップが名古屋で開催されると、キューバの女子チームの通訳の補助に行ったり、来日し始めていた南米からの「デカセギ」の人たちと交流したりと、ひたすら実践的な学びを求めていた。2年次の1990年には、当時の秋休みと後期の開講日を無断欠席して3か月間、高校時代のアメリカ留学で得たスペインやポルトガルの友人たちを訪ねて、イベリア半島をうろちよろしていた。友人たちが連れて行ってくれたスペインの大学の授業は、イベリア半島が今も中南米やアフリカと繋がっている現実を実感させてくれた。

イベリア半島の放浪から戻ると、2年次終了前の1991年3月から南米ペルーの日本大使館に2年間勤務することが決まった。テロ組織による車両爆弾や破壊活動が日課のように起こる国で、「自分の常識は非常識」である社会を思い知った。それでも、ペルーの多くの友人たちと苦楽を共にした時間は忘れられない。1992年4月5日、当時のアルベルト・フジモリ日系大統領が軍を掌握し、一晩にして憲法を停止して、議会を解散し、裁判所を封鎖する強権措置に打って出た。国際的に強い批判を浴びたクーデタを、しかし、ペルーの圧倒的多数の人は支持したのだった。憲法などきちんと学んでいない輩とて、憲法が一晩で吹っ飛ぶ事の重大さは理解できたが、多くの人びとがそれに拍手喝采を送る現実、僕の「当たり前」をことごとく覆していった。法学の研究を志そうと思ったきっかけが、ここにある。

「母校」はラテン語でalma mater(アルマ・マータ)、原意は「知の養分を与える母」。型破りばかりの学生生活は、小さくとも、世界とつながった県大で得た養分なしにはあり得なかったのだと、31年後のいま、強く思う。

夏の思い出

糸魚川 美樹 外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 教員(外国語学部スペイン学科 卒業生)

私は、1988年外国語学部スペイン学科に入学し、1993年3月に卒業、1997年10月から非常勤講師として県大にお世話になり、2007年10月に現在のポストに着任した。大学院は別の大学に進学したが、学部時代にご指導いただいた堀田英夫先生のゼミに引き続き参加させていただいていたので、県大を離れたのはほんのいつきだった気がする。

高田町キャンパス最後の年となる1997年度後期、非常勤講師として外国語学部II部(夜間主)の一般教養のスペイン語を担当させてもらった。ほとんどが社会人の学生だった。金曜日夜間の2コマを担当し9時に終わると、クラスの学生たちに誘われて瑞穂通りの中華料理店に行ったことを覚えている。学びに対して貪欲な学生が多かった。「○○さんは、昼間働いて親に仕送りもしている」という話も聞き、身の引き締まる思いがした。

私は高校まで岐阜県の山間部で育った。大学入学を機に瑞穂区のアパートで一人暮らしを始めた。学部生時代はバブル真っ盛りのはずだがその恩恵を受けた記憶がない。当時は珍しくなかった風呂なしのアパートに住み、お金がなくクーラーも買えず、したがって名古屋の夏は辛かった。最初の2回の夏は続けてひどい夏バテを経験し、2年で体重が10キロ落ちた。当時の高田町キャンパスにも、食堂にクーラーはあったが、教室や先生がたの研究室には基本的に設置されていなかったと記憶している。

卒業後大学院への進学を考えていた私は、4年生の夏休み前に指導教員の堀田先生にそのことを伝えた。「それでは夏休みにいっしょに勉強しましょう」と先生は言ってくださった。暑い夏休み期間中、先生はわざわざ大学に来てくださって、クーラーのない研究室で2本あったうちわの1本を私に貸してくださり扇風機を回し、私の大学院の受験勉強に付き合ってくださいました。当時県大には大学院はなく、他大学の大学院を目指していた私は、いくつかの大学からスペイン語の院試問題を取り寄せそれを解き、先生にみてもらおうという指導をしていただいた。

アジア経済がご専門の田中宏先生にも同時期に大学院受験の指導をしていただいている。田中先生の「研究各論」を4年次に履修したのがきっかけである。在日外国人の指紋押捺の問題でインタビューを受ける先生の姿を入学前からテレビのニュース番組等で拝見しており、先生の授業は必ず履修しようと思っていた。先生の授業は大人気で一般の人も(もぐりで)聴講していた。

私が履修した年、先生は当時人気だったテレビ朝日の「朝まで生テレビ」に出演された。番組終了の朝に授業があり、間に合えば東京から戻って授業をする、間に合わ

なければ休講、ということだった。まあ、間に合わないだろうと、友人何人かで番組終了まで見ていた。当時はインターネットなどなかったのも、休講かどうかは大学に行かないとわからない。行ってみると休講通知は出ておらず、開始時間に先生は教室に現れ番組のエピソードをまじえながら授業をしてくださった。徹夜をした私は眠くて倒れそうだった。

田中先生の授業のレスポンスカードに大学院進学を考えていることを書いたところ、その翌週の授業後に呼び出された。「きみのレスポンスカードを読むと、どうも作文能力が低いようだから大学院の受験勉強のために志望動機について書いて持ってくるように」ということだった(作文能力の低さは今も変わっていない)。指導は先生の研究室だったり、大学の近くの「ラカン」(記憶が間違っていないければ)というおしゃれなカフェだったりした。

前述の通り卒業後も堀田英夫先生には引き続きゼミに入れてもらい、長きに渡り研究指導をしていただいた。私の県大着任後は、先生が退職されるまで大学のさまざまな業務についても先生から多くのことを教えていただいた。現在自分の研究業績の7割程度を占めている医療通訳研究も、堀田先生が立案された「医療分野ポルトガル語スペイン語講座」がきっかけである。

田中宏先生は、教育福祉学部山本かほり先生のご尽力により、傘寿を過ぎた現在も毎年1回講義のために東京から長久手キャンパスに来てくださっていて、私も可能な限り聴講させていただいている。客観的データで迫ってくる先生の授業に30年前と変わらずドキドキするし、自分の教育研究者としての未熟さを痛感する。

自宅にも教室にもクーラーのある生活を送る現在も、名古屋の厳しい夏がくると高田町キャンパスで過ごした学生時代を思い出す。

情報科学部設立の思い出

小栗 宏次 情報科学部情報科学科 教員

愛知県立大学長久手移転20周年・新大学発足10周年に際し、関係各位に心からの敬意と尊敬の念を表します。気付いて見れば情報科学部の中で、その設立準備の様子を知る数少ない現任教員の1人となり、設立の苦労からの思い出を辿りつつ、こうして記念誌に寄稿させていただける事を誇らしくもあり、懐かしく感じています。

県立大学への着任

1994年(平成6年)10月1日、私は学長直属(情報科学部設立準備担当)教員として愛知県立大学に着任しました。当時の愛知県立大学は、文学部と外国語学部、外国語学部第二部の3学部からなる文系大学でした。着任早々、私の研究室として案内された部屋は、机1つがやっと置ける広さで、前任校(名古屋工業大学)の研究室と比べあまりに狭いのには驚いたのを今でも覚えています。部屋にはコンセントが1つしかなく、電気容量が足りない上、エアコンも無かったため、研究用のワークステーションが熱暴走でダウンすることもしばしばでした。そこで、翌年には、キャンパスの片隅にプレハブの研究室を作っていただきました。そこは電気容量も十分でエアコンも設置されたものでした。

大学では情報科学部設立に向けた文部科学省に提出する資料作成の準備作業が主たる仕事で、毎日、全国の大学の情報系学部の分析や愛知県の産業構造の分析を行い、それらをわかりやすい資料にまとめるなどしていました。講義では、情報リテラシ科目を担当し、コンピュータ演習室でワープロや表計算などを教えていました。

調整委員として

高度成長期、「ものづくり」王国として順調な発展を遂げてきた愛知県では、平成に入り「愛知県芸術文化センター」「あいち健康プラザ」とビッグプロジェクトを次々に展開していました。その1つが愛知県立大学の長久手移転でした。東部丘陵地に「科学技術交流センター(後の知の拠点あいち)」や企業の研究所などを誘致し研究学園都市を開発しようというものでした。

こうした中で、毎月のように行われる愛知県の担当部局との打ち合わせや、学内の他学部の教員との打ち合わせへの準備が私の主な仕事でした。これらを担当する教員は「調整委員」と呼ばれ、各学部から1名ずつが指名され、毎日のように大学で情報交換をしていました。

今では店の名前を忘れてしまいましたが、瑞穂区高田町の大学キャンパスの正門前に料理屋があり、大学での打ち合わせが終わった後、今度はその料理屋で遅くまで議論を交わした事を覚えています。

学科名をどうするか

その後、愛知県との調整が進むと今度は文部科学省と

わたしたちの2つの県大キャンパス

小島 伊織 小島 典子(旧姓 増井 典子) 文学部児童教育学科 卒業生

この度の長久手移転20周年・新大学発足10周年、誠におめでとうございます。そして、愛知県立大学の卒業生代表として、記念誌への寄稿の機会をいただき、大変光栄に思っております。

高田キャンパスの思い出

恵那市を出て昭和区滝子で一人暮らしをしていた私にとって、高田キャンパスは、通学途中にある名古屋市立大学に比べて、校門を見落として通り過ぎてしまうような大学でした。

とにかく敷地が狭く、グラウンドも縦長の作りであったため、私の入っていた野球部の練習ではなかなか苦労していました。ネットを越えてライト方向にあるテニスコートにボールが飛び込み、「危ない!3番!」などとコートの番号を叫ぶことは日常茶飯事。テニスコートをさらに飛び越えて、民家の窓を割ってしまい、謝りにいくようなこともありました。

在籍していた児童教育学科は、女子大学かと思うほど女子ばかり。入学時は40人ほどのうち、男子はたったの4名。他の大学に通う友達などからは、かなり羨ましがられましたが、中にいるとなかなか肩身が狭い思いもありました。ただ、当時はルーズソックスのアムラーが全盛期で、ガングロのギャルがテレビを賑わせているような時代でしたが、在籍している子たちは本当に感じのいい子ばかりで笑いの絶えない毎日でした。(伊織)

瑞穂区にあるちょっと古いこじんまりしたキャンパス。それが、移転前の愛知県立大学の印象です。私が入学したのは1998年。ちょうど2年ずつ高田キャンパスと長久手キャンパスに通ったことになります。

瑞穂区は、一人暮らしをしていた私にとって、とても住みやすい町でした。近くに大学や高校がいくつもあり、周りには学生がたくさんいます。学生にやさしいお手頃な飲食店や居酒屋も多数あり、食事の面でもずいぶん助けられました。自転車でもどこへでも行けるという好立地で、よく友人と自転車で娯楽で遊びに行ったのも楽しい思い出です。

在籍していた児童教育学科(今は、教育発達学科)は、同じ学年の学生が40人ほどで、とてもアットホームな雰囲気でした。教室は、後ろに行くほど席が高くなっていくテレビでよく見るような講堂タイプではなく、普通の教室!高校生の頃と変わらないような一人ずつ座る机で講義を受けていました。学生食堂はなぜか地下にあり、日の光の入らない薄暗い部屋で毎日昼ご飯を食べていました。テレビドラマに出てくるようなお洒落な大学生活とは全然違っていましたが、それはそれで楽しかったです。先生たちもフレンドリーで、一人暮らしの私は、よくおうちにお邪魔してご飯をごちそうになっていました。そんな環境だったので、ホームシックにかかることもなく、毎日楽しく大学に通えたと思います。今、思い返すと、すごく恵まれた大学生活だったんでしょうね。(典子)

長久手キャンパスの思い出

高田キャンパスは、古い中でも温かい人間関係がづくら

れていて、移転が近付くにつれて、住み慣れた瑞穂区や昭和区当たりの生活から離れるのにも一抹の寂しさがありました。それでも、移転先の長久手キャンパスを紹介するパンフレットの写真撮影に参加し、建物の中に入ってみると、こんな広くてきれいな大学に通えるのかと寂しさは一発で吹き飛びました。

3年生に上がる時の移転であったため、受講する講義も少なくなることも考え、実家から自家用車で大学へ通うことにしました。恵那市から長久手キャンパスまでは、1時間20分程度。時間はかかりますが、恵那市から瀬戸市へとつながる国道365号線(いわゆる中馬街道)は、信号も少なく、四季の移り変わりも楽しめる素敵な通学路でした。下宿生は、バスに乗って藤ヶ丘まで出ることが多いため、よく学科の友達に「乗せてって。」と車で送るようせがまれました。時代が時代なら、「アッシー君」だったわけですが、当時は、超就職氷河期。岐阜県の教員採用は、どん底の状態でしたが、何とか合格できて今に至ります。

野球部については、学科が増えたことや野球専用のグラウンドが完成したこともあって、リーグ戦における成績も向上し、民家やテニスコートにボールが飛び込むこともなくなりました。(伊織)

住みやすい高田キャンパスでしたが、大学3年時には長久手町に移転することが決まっていたので、それに合わせて私も引っ越しました。ところが、今でこそ住みたい街の上位になる長久手市ですが、当時は本当に何もなかった!そもそも県外出身者の私にとって、「長久手?どこそれ?」の世界です。車を持っていないと買い物にも行けない、大学の周りには自然ばかりでアパートなんてない!ということで、最寄り駅の地下鉄藤ヶ丘周辺で家を探しました。でも、ここから大学までバスで約30分かかります。しかも、料金が片道500円越え…。地味に懐が痛かったことを覚えています。ただ、校舎は断然きれいになりました。敷地も広がってよかったです。高田キャンパスは友だちを探すのに困らない狭さでしたが、長久手は広すぎて友達になかなか会えない。携帯電話の便利さを知ったのは、この時だったと思います。

3年生になり、丸山ゼミに入りました。私達の代は、ゼミ生が3人でした。丸山先生が「いいぞ～、やってみろ～」とドーンと構えている先生だったので、女子3人に先生も含め、和気あいあいと過ごしていました。当時の写真を見ると本当に楽しそう!ゼミの子たちとは20年たっても連絡を取り合っています。丸山先生、お世話になりました!(典子)高田キャンパスで出会い、長久手キャンパスを卒業した私たちは、2人とも岐阜県で教員として勤めるようになり、そして結婚しました。いろいろな思い出の詰まったキャンパスと先生方をはじめ、大学関係者の皆様にも、改めて感謝申し上げます。

情報科学部設立に向けて

辻 孝吉 情報科学部情報科学科 教員

情報科学部設立初期メンバーであるということで本原稿の依頼を受けましたので、私が関わらせていただいた情報科学部の準備～設立～完成【?】を振り返ってみたいと思います。学部認可ということであれば2回の認可申請(大学移転時、大学統合時)に関係させていただきました【ちょうど移転20周年・新大学設立10周年のスタート時期】。どれも初めての経験ばかりで、大変多くの勉強をさせていただき、貴重な経験の機会を与えていただいたことに感謝しております。

まず、私と愛知県立大学との関わりは、県大に情報系の新学部が設立されるということで、学部設立の三年前(平成7年4月)に赴任したことに始まります【文系の大学ということもあり、それまでは愛県大のことを全く知りませんでした(^_^);】。大学はまだ高田町(名古屋市内)にあり、歴史と趣のあるキャンパスが印象的でした【隣の中学よりも小さいかも?】。着任当時、学部は当然まだありませんので、所属は学長直属、校門のところにある仮設プレハブが居室となっていました【親しい方からは「何か悪いことをして学長直属なの?」、「サティアンで怪しいことしてない?」などと言われたりもしましたが】。

情報科学部は、愛知県が平成4年3月に策定した「愛知県大学整備計画基本構想」に基づいて、情報科学への対応を図ることを目的として構想されました。具体的な情報科学部設立に向けては、設立準備室の職員の方々と情報科学部所属予定教員(最大時10名程)によって、外部委員からなる準備委員会からの意見を踏まえながらハード(建物)とソフト(教員、カリキュラム)について準備が進められました。

ハード的なことでいうと、今では違和感がないと思いますが、工学系(特に情報系)では技術的進歩が速いので大幅な値引き、リースを利用する、ということが多いのですが、当時はそういう発想で進めにくかったような記憶があります【ソフトに物品シールを張っていた時代ですので…】。

ソフト的には、カリキュラムに合わせて科目を担当していただく教員の方々を探すお手伝いもさせていただきました【現在いらっしゃる何人かの先生の若かりし頃の履歴書の写真が脳裏に!?!】。

カリキュラム的には、当初は「社会情報」とか「環境情報」とか文系に近い学科を構想されていたようですが、準備委員会や文部省(現文部科学省)からの意見を踏まえ、学部新設抑制の例外として設置するということもあり、理系の情報科学に近づけた内容に変化していきました。具体的な内容は、学部段階における情報専門教育カリキュラムの標準であるACM(米国計算機学会)の標準カリキュラムを踏まえて、情報科学部として持っていなければならない最低限の科目といくつかの独自の科目が配置されました。

そして長久手移転と同時に、平成10年4月に「情報システム学科」と「地域情報科学科」の2学科からなる新設学部として誕生しました。

初回の入試は受験者数が多いため、レインボーホール(現日本ガイシホール)で行い、試験はマークシート式で行いました。限られたスタッフの数で大きなトラブルもなく終了することが出来ましたが、今から考えると少し怖い気がします【支えてくださったスタッフの皆様には頭が下がります】。

開部当時は、情報科学系の理系としての認知度が低かったため、文系の学部と勘違いして入学してくる学生もいたようですが、教職員の高校訪問や予備校訪問など、機会をとらえた継続的な宣伝【?】の効果もあり、現在は理系として認識されているのではと思います。

学部発足後は、学部完成年の平成13年3月に学外委員による第1回外部評価を受け、自己点検評価を行いました【全国から情報系の著名な先生方に来ていただくことが出来ました】。その翌年、平成14年4月には1専攻からなる大学院情報科学研究科修士課程、平成16年4月には大学院情報科学研究科博士課程が無事開設されました。全部が完成した年度末の平成17年3月には外部委員による第2回外部評価が実施され、第1回の指摘への対応も含め自己点検評価を実施しました【資料などのとりまとめとともに評議員として参加させてもらいました】。そして、平成19年3月には無事、大学院博士課程までの完成を迎えました。

これで完成ではなく、前述の2回の外部評価や世の中の変化に対応するため、新しい学部の構想・準備がすぐに始まりました【この時は、構想新学部・大学院将来構想検討委員会委員長、カリキュラム検討委員会委員長としてとりまとめをさせていただきました】。学部は前回と同様にACMの最新の標準カリキュラムを参考に構成し、講義の多様化(演習、コンテスト、プロジェクト、ゼミ、などの導入)、PBLの導入、学部・修士を含めた6年一貫教育等【残念ながら一貫教育は推薦制度としてしか実現できていません(-_-)】を特徴とし、柔軟性を持たせるため2学科から1学科3コース【最初は3学科を構想していましたが、結果的にはコース制にすることで柔軟性を持たせられたかも】の学部教育とそれに合わせて大学院前期課程の1専攻から3専攻への拡充とプロジェクトコースの新設などからなる新学部・大学院が平成21年4月大学統合に合わせて無事設立されました【執筆時運用中のカリキュラムになります】。

以上が2回にわたる情報科学部設立と私との関わりですが、情報科学部は今後も時代の要請に応えるべく変化し続けることと思います【ここに書けなかったエピソードはまた別の機会に(^ ^)/】。

学生として過ごした県大

伊藤 正英 情報科学部情報科学科 教員(情報科学研究科博士後期課程 単位取得退学)

17年目。県大の教員になって今年8年目ですが、学生として過ごしたときを加えると、県大でお世話になった年月はこのような数字になりました。

私が県大に入学したのは、長久手キャンパス移転の年であり、情報科学部スタートの年である、1998年(平成10年)でした。1期生の入試は特殊だったため、旧・レインボーホール(現・日本ガイシホール)で実施され、旧・高田キャンパスを訪ねたのは合格発表のときのみでした。いま思えば学部1年生のときは大変贅沢な体制でした。教員1人に対して学生3名。いまでも1学年あたりは同じですが、1学年しかなかったので文字通りの少人数教育でした。当時の先生方には、懇親会、芋煮会、ソフトボール大会など、様々なイベントを開催していただき、学生同士だけでなく、学生と教員が交流する機会が多くありました。そのときは比較するものがありませんでしたが、学生と教員との距離は本当に近かったと思います。いまではあり得ないことですが、知識も技術もない学生に研究協力者というアルバイト(とはいっても実質は情報科学に関する勉強・実習)の機会をいただいたこともありました。また、新しい学部の1年生ということからか、授業や全学イベントを通じて、他学部の先生方と交流する機会にも恵まれました。

1期生には、実は情報科学以外に興味があったけどここに来た、という人が多かったように思います。私もそのなかの1人でした。いろいろなきっかけから徐々に情報科学に興味を持つようになりましたが、当初、たとえばプログラミングは苦手なだけでなく、その利便性を微塵も感じる事ができませんでした。1期生として受けた授業では、様々な試練(や事件?)がありました。学生にとっても教員にとっても事前情報(過去問や学生の実力想定)なしでしたので、そうしたことが起こりやすい状況だったかもしれません。ある授業では、受講生のほとんどが内容を消化できず、先生はそれに気づかない(?)という状態のまま経過しました。結局、期末試験で誰も合格点に達しないという結果に…(その後、再試験で一部は救われました)。別の演習型授業は、3限に開始してすべての課題をクリアしたグループから解散という形式でした。正規には4限終了でしたが、5限でも終わらず、6限でも終わらず、ついには10限(?)相当までかかる事態に。バス・電車通学していた学生は、車通学していた友人に分散便乗させてもらってどうにか帰宅したものの、翌日2限の授業に皆遅刻するというおまけつきでした。当時は大変でしたが、振り返ってみれば貴重な経験であり、よい思い出です。

学部3年まで、バレーボール部で活動していました。きっかけは2年生以上の他学部先輩との出会いでした。バレーは中学1年に部活動としてはじめ、高校3年間も続けましたが、当初、大学で継続するつもりはありませんでした。しかし、サークルの新入生勧誘で「コレだ」と感じるものがなく、次第にバレーのサークルや部活にしようかと思いは

じめました。そんな折り、学食で友人と歓談していたところ、偶然近くにいた先輩達の会話からバレー部の話題が聞こえてきました。話しかけてみると、いま女子バレー部しか活動していないが、男子バレー部にいた先輩が留学から戻ったところの話でした。復学した先輩とともに、女子バレー部の練習に混ぜてもらう形でバレーを再開しました。やがて情報科学部で興味をもってくれた友人が参加するようになり、男子バレー部は復活するに至ります。その後、先輩を通じて旧・高田キャンパス時代のOB・OGと交流したり、他大学チームと練習試合したりするなど、学部、学年だけでなく卒業生や学外まで、縦横のつながりは急速に広がっていきました。最終的に公式大会のリーグ戦にも参加でき、楽しく充実した課外活動でした。

学部4年以降は、戸田尚宏先生の研究室に所属し、研究が生活の中心となっていきました。研究室を選ぶ際は、お二人の先生でかなり迷いました。研究テーマや人柄では決めきれず、最終的に指導の継続性で判断しました。学部3年後半の進路選択で大学院進学を決意しており、もう一人の先生には定年がせまっていたためです。戸田研究室で行った研究テーマは「制御」に関するものでした。戸田先生の本来のご専門ではなく、私の興味にあわせて設定していただいたものでした。のちに、私が戸田先生に「制御」(!)されていたことを知るようになりますが、自分が学生の研究を指導する立場になって、真似できない、挑戦的な指導形態だったとらえています。当時、指導教員の専門でない研究テーマを進めることに、私はときどき不安を感じていました。そんな私を応援してくださったのが、初代情報科学部長の半田暢彦先生でした。藤が丘から長久手キャンパスへのバス2路線のうち、主でないほうは本数が少ないものの、静かな旧・長久手町内(現・長久手市内)を走り、空いていたことから、都合のあうときは好んで利用していました。旧・長久手町内にお住まいだった半田先生はそちらを利用されており、ときどき車内で会話する機会がありました。半田先生も同様の形態で研究をスタートされていたようで、専門の研究室には得られない視点からアプローチすればいいんじゃないかという助言をいただき、霧が晴れる思いでした。

さて、こうして学生時代を振り返ってみると、新しいキャンパスの雰囲気、学部1期生の仲間たちや親身な先生方など、とても幸運でした。そして、1期生として鍛えられたこと、新しいことに挑戦する楽しさは、いまの私の基礎となっています。教員として母校に戻ってきて、最初の新しい挑戦はロボカッププロジェクトへの参加でした。継続や悲願達成の前途は多難ですが、現在のメンバーは情報科学部の学生だけでなく、活動は全学に広がるかもしれません。授業や研究活動を通して情報科学部だけでなく全学の後輩へ何かしら還元しつつ、県大での年数を重ねていけたらと思います。

県立大学ともに歩んだ20年

小栗 由紀子 学術情報部図書情報課 職員(文学部英文学科 卒業生)

愛知県立大学長久手キャンパス移転20周年おめでとうございます。私は長久手キャンパス図書館で職員をしております小栗と申します。

私は移転2年目に愛知県立大学文学部英文学科の学生として入学しました。当時長久手キャンパスへは藤が丘からバスで通学しておりました。長らくバスに揺られたのち、愛知県立大学のキャンパスが見えると、とてもほっとした記憶があります。また初めてキャンパスを見た時のことを覚えています。バスに乗っていた学生たちが「わっ、きれい、とてもきれいな校舎」と声をあげていたのを思い出します。私も一緒に喜んでいました。昨日のこのように思い出されます。

長久手キャンパスでの思い出はたくさんあります。朝早く来て、教室で勉強して過ごしたこと、学食でお昼ご飯を食べたことなどあります。学食の近くの丘でのんびり過ごすこともありました。お昼には様々な話を同級生としていました。勉強のこと、アルバイトのことなど。英文から訳した日本語を友人と見比べるなど、みんなで遊びながら勉強をしたことを思い出します。

授業は少人数で行われることが多く、皆で授業に参加することができました。課題に沿って、意見を話しました。授業では英語の文章を読み、解読していきました。ややこしい表現でも新しい表現、意味がわかるととても楽しかった覚えがあります。またTOEICの勉強も試行錯誤しながらみんなで勉強をしていたことを思い出します。

夏には英国ブリストル大学夏期語学研修に参加し、イギリスの地で1カ月過ごしました。これは私が初めて海外に出かけたもので、慣れるまでは毎日緊張をしていたように思います。朝から夕方まで授業を受け、英語を話し、ホストファミリーの自宅でも英語を話すという生活をしました。知らない土地でバスに乗ったり、友人たちと旅行をしたりすることは慣れない部分が多かったですが、この経験によりさらに多くのものを学べたと思います。ホストファミリーに旅行先から一度電話連絡を入れるように言われたことがありました。今どこにいて何をしているのか、いつ帰るのかを伝えたのを覚えています。無事伝えることができ、気をつけて帰ってきてほしいということが聞き取れた時とても安心しました。

帰国後はゼミで先輩と交流を深めたり、ゼミの文献を読み解くために図書館でThe Oxford English Dictionaryを引き、語源を調べたりしました。一つの英単語でも様々な意味を持つことがわかり、どの言葉を当てはめればいいのかを考えていました。卒業論文を作成することはとても大変でしたが、完成した後とても充実した気分になっていました。多くの文献を読む機会にも恵まれました。

卒業後は大学で学んだことを生かし、海外から電子部品やパソコン周辺機器を輸入する仕事に就きました。毎日台湾、香港に電話をする日々では、大学時代に培った忍耐力、海外での経験が役に立ち、粘り強く交渉を進めることができました。英語と日本語を駆使しながらいかにお互いの要求を伝えることができるかを考えていました。社会人として、毎日色々なことを学びながら成長をしていくことができました。

大学職員として愛知県立大学に戻ってからは庶務課に配属され、給与や福利厚生を担当しました。なかなか職員として生活していくことは苦勞が伴いましたが、時々庶務課にいらっしやいました恩師の先生方にはいろいろとお声かけをさせていただきました。福利厚生のお話をさせていただくとともに、昔のことを思い出し、心が和みました。英国ブリストル大学夏期語学研修を引率していただいたI先生やゼミのK先生とたくさんお話をさせていただきました。年月は経ちましたが、ついこの前のこのように感じられました。

学生時代から現在にかけて年月を経ても変わらない県立大学があります。

大学時代の友人たちとも交流を続けています。よい時もあれば助けが必要な時もあります。その時にお互いに励ましあい、よい道があればみんなで考えていく少人数のゼミで培ったものがいまだに活用できています。

これから愛知県立大学は先を見据えて多くの学生たちに生きる活力を与えるような学校になってほしいと思います。私も職員として協力し、よりよい魅力あふれる愛知県立大学にしていけたらと思います。

県大での学び：受け手から送り手となった今、考えること

瀬野 由衣 教育福祉学部教育発達学科 教員(文学部児童教育学科 卒業生)

私が愛知県立大学に入学したのは、大学が長久手市に移転した2年目のことでした。それから20年たち、特に今年度は波乱の幕開けとなりました。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、教育の在り方そのものが根底から問われる事態になっています。この原稿を書く機会を頂いたことを一つのきっかけにして、私が卒業した当時の児童教育学科(現、教育発達学科)での学びのこれまでを振り返りつつ、今後について考えてみたいと思います。

私が在学していた時は、授業に行ったら「休講です」という事態も「そういうこともあるよね」という、ゆるやかな時代でした(笑)。もちろん、UNIPAなどありませんし、履修登録も紙媒体が当たり前です。藤が丘の駅から名鉄バスで通学していた日々が懐かしく思い出されます。

当時を振り返ると、どの学年にも様々な背景をもった多様な年齢層の方がいました。塾を営んでいる人、主婦をしながら学ぶ機会を求めて大学に来た人、昼間に小学校教諭や発達支援の仕事しながら夜間主に通う人などです。特に夜間主の授業が開講されていたこともあって、様々な人たちが、一緒に学ぶ土壌があったように思います。どの人も「学びたい」という意欲に溢れていました。学ぶことに関して、年齢差も上下関係もない、共に育ちあえる関係がありました。大学を卒業してすぐに就職する以外の道(大学院に進む道)が拓けたのは、先生方ももちろん、県大で出会った仲間がいたからです。その中の人たちは、今でも先輩であり、親友であり、仲間であり、一言では形容できない特別な人たちになっています。

私の同世代で児教を卒業して教員をしている友人が、少し前にこんなことを言っていました。「教員免許更新講習を他の教育養成系大学と県大の両方で受けたが、やっぱり県大は県大だ一と思って嬉しかった」とのこと。詳しく尋ねると「子どもの権利」「貧困」など、福祉的な視点を含んで子どもを取り巻く状況を考えることが、改めてとても新鮮だった」というのです。「根本的に大事なことを考えられるのが県大だと思った」とも話していました。当時はそのこと自体がある意味で当然で、他大学での学びと比べることもなかったのでしょうか。いったん離れてみて、初めてわかることもあるのかもしれない。

ちなみに、私の友人の中には、教育と全く関係のない仕事に一度就いた後、「やっぱり教員になる」と教育職に戻ってきた人がいます。30代半ばを過ぎてから福祉の道を志した友人もいます。彼女たちが「県大で学んだことがどこかで残っているんだよね」と話していたことは印象的です(何を覚えているかという話になると、先生方の余談でおもしろかったことなどが出てくるのですが・・・)。紆余曲折を経ながらも、学んだことが身体に根づいている、

そういう学びが県大にはあるのだと思います。

現在、教育発達学科は、小学校教育コースと保育幼児教育コースに分かれています。教員養成、保育者養成に特に力を入れているため、当時のように多様な背景の人たちが集まりやすい学科の構造にはなっていません。どのような学びをいかに深めていくのか、学びのカリキュラムを作っていくことが学科全体の課題となっています。実質的には大学院生のために夜間授業が開講されている昨今、意欲をもった社会人は、大学院に集まってきています。大学院生と学部生が垣根なくつながりあう機会を作っていくことも課題でしょう。年齢差、時に文化差を超えて一緒に学ぶ仲間ができると、学生たちの人生観は大きく変わると思います。

私自身は、特に今年度は、遠隔授業に四苦八苦しています。実際に実施してみて、遠隔授業には、これまで見えにくかった個々の学生の学びの深まりや到達度を細やかにみることができるともわかりました。通学することが精神的、身体的に苦痛となる学生にとって救いにもなるでしょう。今後、遠隔授業のノウハウを授業に取り入れていくことは必須だと感じます。一方で、遠隔授業だけで私が学生時代に得た身体に残るような学びはなかなか得られないようにも思います。同じことを実際に対面で伝えるのと、画面を通して伝えるのでは手応えが違うのです。授業の受け手も同様のことを感じているのではないのでしょうか。ライブで実施しているとはいえ、ゼミで雑談がしにくいのは、学生にとってもしんどいですよね。

大学生活はどうでしょうか。休憩やお昼時間、空きコマ、通学中のおしゃべりなどの「余分な時間」が根こそぎ奪われる学生生活は、効率的かもしれませんが味気なさが残ります。「余分なこと」が知らぬ間に蓄えられ、自分の栄養になっていたことに、この年になって改めて気づくからです。今だからこそ、改めて、非効率性の中にある大事なことを問い直し、そのエッセンスを大切にすると生活と教育の在り方を考える必要があると感じています。

激動の時代を振り返って

高島 忠義 前学長(第12代)

1985年4月に県大へ赴任し、2019年3月に退職するまでの34年間で、私の役職年数は、その約半分に相当する16年にも及びます。その最初の役職が1997年度から2年間務めた学生部次長でしたが(部長は日置雅子先生)、その2年目に高田町キャンパスから現在の長久手キャンパスに移転しました。私の主要な職責は入試でしたので、次長1年目に旧キャンパスでの最後の入試を、2年目には新キャンパスでの最初の入試を担当することになりました。当時の思い出と言えば、長久手移転と同時に新設される情報科学部の入試です。新学部についてはセンター試験を利用することができないため、受験生が殺到することが予想されました。そのため、当時の名古屋市総合体育館(笠寺)を借り切って同学部の入試を実施することにしましたが、志願者の数が全く予想できなかったために果たして大ホールだけで足りるのか、大学の教室とは全く勝手の違うホールでどのように入試を実施するのかなど、あらゆる点において手探り状態での入試となりました。それでも何とか無事に同学部の入試を終了することができたのは、当時の入試課職員の寝る間も惜しんでの尽力があったからこそでした。

2005年には、2007年4月の愛知県立3大学の法人化に向けて、県庁内に「県立の大学の改革会議」とそれをサポートする大学改革室(事務組織)が設置されました。私は、副学長(学長は佐々木雄太先生)として、同会議の下で「法人の組織と運営」を扱う部会に参加しました。この部会では、県立の大学を1法人に纏めるのか又は大学毎に個別の法人を設置するのか、県立大学と県立看護大学を統合するかどうか、法人の理事長と大学の学長を分離するのかどうか、教員の任期・評価制度を導入するのかなど、非常にセンシティブな議題が相次ぎに上りました。これらの難題を検討する過程で改革室と3大学との間で丁々発止の議論が行われましたが、最終的には知事の決裁によって改革会議に上申する原案が作成され、平成18年3月の改革会議において「愛知県大学改革基本計画」として承認されました。この時期、当然のこととはいえ、県立大学の設置者が「愛知県」であるという現実を痛感させられました。

県立大学と県立看護大学との統合に関しては、どのような方式と手続でもって統合するのかが焦点となりました。具体的には、看護大学を県立大学に統合するかたちで文科省に「届出」を提出する方式によるのか、或いは両大学を統合した新設の県立大学として文科省の「設置認可」を受け方式にするのかが問題になりました。最終的に後者の方式が採用されることになりましたが、設置認可の審査を受けるタイミングが最悪でした。その当時、

専門学校の設置した新大学でさまざまな不祥事(例えば専門学校の授業を大学のそれとして重複開設する)が発覚したことを契機として、同省の規制が緩和から強化へと大きく揺れ戻しを始める時期だったのです。そのため、文科省に事前の相談に行く度に厳しい注文を付けられ、その部分を補正して同省に持参するとさらに別の注文を付けられるというパターンの繰り返しでした。3月末の申請締切直前には、ほぼ徹夜で提出書類を補正し、翌朝にそれを持参するという有様でした。同行していた事務職員からは「もう諦めましょう」という声さえ発せられましたが、何とか申請の締切期限に間に合わせることはできました。

文科省への認可申請と並行して、県立大学と県立看護大学の統合準備委員会を立ち上げましたが、看護大学の故・川田智恵子学長をはじめとした先生方のご協力によって、新大学の始動と運営に必要な事項について建設的な協議を行うことができました。その委員会が18時過ぎからのスタートでしたので、空腹と眠気に苛まれながら議論をしていたことを思い出します。

以上のような寄稿文を執筆することで、私が新キャンパス移転から法人化、さらには新大学発足までの激動期に役職者として直接関わってきたことを改めて認識しました。しかも、私は、2012年4月から2018年3月までの6年間、こうして難産の末に誕生した法人と新県立大学の運営にも学長として直接携わることになりました。ここまで読んで頂いた方々には、「大変な仕事に係わって、さぞかしストレスが溜まったのでは」とご心配をお掛けするかも知れません。確かに大変な仕事に係わってきたことは事実ですが、自分でも不思議なほどストレスを溜め込むことはありませんでした。強い緊張感を持ちながらも、助力を頂いた教職員の皆さんと楽しく仕事できたことが良かったのではないかと思っています。この機会をお借りして、多大なご支援を頂いた教職員の皆さんに心から深甚の謝意を表したいと思います。

愛知県立大学 高田キャンパス(移転前)



高田キャンパスから長久手キャンパスへ



高田キャンパス図書館前から長久手キャンパスに移植されたクスノキ



図書館前のクスノキ(高田キャンパス)

長久手キャンパス(移転後)



新キャンパスイメージ



奇遇にも周年記念の年に届けられた
旧高田キャンパスの銘板
(2020年8月20日愛知県立愛知商業高等学校より)



図書館前(高田キャンパス)



2007年2月 創立60周年記念モニュメント除幕式
(瑞穂区高田町、高蔵高校)



2008年8月創立60周年記念モニュメント除幕式
(長久手キャンパス)



回顧——県大学長の8年

佐々木 雄太 元学長(第11代)

看護大学との統合に伴う「新県立大学発足」から10周年という。そのスタートに関わった一人としてまずは祝意を共にしたい。県大ホームページの冒頭には2009年4月の新大学発足とともに定められた「大学の理念」が今も変わらず置かれている。これを嬉しく思った。私は2004年4月から8年にわたって県立大学長を務めたが、この時期は現在の県立大学につながる制度的な基礎作りに関わる繁多な数年であり、また多難な時期でもあった。これを歴史として書き残そうと思う。

県大はいらない! その頃、財政危機に陥っていた愛知県は、私の学長着任の半年前に「県立の大学あり方検討会議」を設置し、行財政改革の一環として県立3大学(県大、芸大、看護大)の「あり方」の見直しを開始していた。私の学長として最初の仕事が、有識者からなる「検討会議」に出席し、県大の存在理由をめぐって論陣を張ることであった。この会議では、芸大と看護大はそれぞれの大学のミッションが明確であるとして存続の方向が早々と認められたが、愛知県立大学については、委員を務める県内の大手私立大学の学長や有名教授から「県立大学はいらない」、「少なくともツツウの大学として存続する必要はない。生き残ろうというならばニッチを探せ」という乱暴な意見が相次いだ。つぶれかけている大学に対してならいざ知らず、ひとし並みに存在している他大学に対して「いらない」とは何という無礼か、と感じたが、驚いたことに、これに対して県大の設置者である愛知県関係者は何ひとつ反論しなかった。愛知県は、1998年に400億円超を投じて県大を名古屋市内から長久手の丘陵地に移転し、学部、学科、大学院を増設した。それから6年にしかならないというのに、である。不見識な「県立大学不要論」に対する反論はもっぱら新米の学長に委ねられた。

私は、大学内での議論を重ねながら、県立大学の存在理由を繰り返して主張した。そんな過程で、その後、「大学の理念」に掲げることになった「良質の研究に裏づけられた良質の教育」という概念が生まれた。多くの私立大学が入学生を求めて目新しい看板の店を出したりたたんだりしている中で、大学本来のミッションを貫く「ツツウの大学」こそ「ニッチになる」というのが、暴論に対する私の反駁の台詞であった。

この研究・教育に関わる理念は、看護大学との統合に基づく新県立大学の設置とともに「大学の理念」の第II項として定められた。ちなみに、そのIIIは2005年に県大の隣接地で開催された愛知万博「愛・地球博」の基本コンセプトを大学として継承する趣旨であった。

新県立大学の理念(2009年4月)

- I 「知識基盤社会」といわれる21世紀において、知の探求に果敢に挑戦する研究者と知の獲得に情熱を燃やす学生が、相互に啓発し学びあう「知の拠点」を目指す。
- II 「地方分権の時代」において、高まる高等教育の需要に応える公立の大学として、良質の研究とこれに裏付けられた良質の教育を進めるとともに、その成果をもって地域社会ならびに国際社会に貢献する。
- III 自然と人間の共生、科学技術と人間の共生、人間社会における多様な人々や文化の共生を含む「成熟した共生社会」の実現を見据え、これに資する研究と教育、地域連携を進める。

行革と大学改革 次の難題は愛知県の行財政改革の中での学部・学科再編であった。愛知県は、大学の改組・改革をもっぱら行財政改革の論理に基づいて進めようとした。「数を減らす」と「改革という形」にこだわったのである。

削減は、まず学部・学科の数に求められた。18歳人口の減少とともに入学生獲得が難しくなりつつある状況で大学の学部構成はどうあるべきか、私は予備校や高校等にヒアリングを重ねながら、まずは「顔がくっきり見える学部、学科」という結論に行き着いた。文学部を分割し、日本文化学部と教育福祉学部の設置を決めた。外国語学部のあり方については悩んだが、国際関係学科を新設する代わりに、ヨーロッパ系言語の学科を「ヨーロッパ学科」に統合する数合わせの妥協を余儀なくされた。いまひとつの妥協は「夜間主コース」の廃止であった。これは教員定数削減を余儀なくされる学部・学科の廃止よりも犠牲が少なくて済むと判断したからである。大局的に考えてこれ以上の選択はなかったと思っている。学部数は看護学部を含めて3学部から5学部となった。以上が2009年の「新大学発足」への経緯である。

「法人化」と「統合」 この「新大学発足」に先立って「設置者の変更」が行われた。いわゆる「法人化」である。県立の大学の設置者は「愛知県」ではなく「愛知県公立大学法人」となった。愛知県は行財政改革の一環として「法人化」を進めようとしたが、私は、前任の国立大学法人化の経験から、法人化自体は決して経費の削減にはつながらず、むしろ適用法令に準拠するための初期投資等が必要になることを説いた。すると、県は「法人化」に県大と看護大との「統合」を抱き合わせる計画を持ち出したのである。私たちは「内発性も必然性もない統合」には気が進まなかったが、「統合」自

体は結果オーライであったと思う。

キャンパスを異にする看護学部の学生は、1年間ではあるが、長久手キャンパスで他の4学部学生とともに学ぶことができる。看護学部生は何よりもこれを喜んだ。一方、卒業後の明確な目標を見据えてタイトなカリキュラムに取り組む看護学部生の存在は、長久手キャンパスの、とくに人文・社会系の学生に大きな刺激になったようである。

学部それぞれの教育内容や教育方法の改革・改善もさることながら、私は、5学部から構成される複合大学のメリットが発揮できる教育改革を構想していた。学部・学科を横断的に、また学年の違いを超えて、共に学ぶ仕組みを取り入れたいと考えていた。しかし基幹部分のカリキュラム改革の課題は第2期中期計画に先送りされ、私の手の届かない課題となった。これが心残りであった。

「一法人複数大学」の利点 県立の大学の設置者の変更すなわち「法人化」の際に、愛知県は全国で初めての事例として「一法人複数大学制」を採用した。これは、法人化後の組織形態として「理事長・学長一体型」か「分離型」か、という議論の末に行き着いた仕組であった。「教学と経営の一体性」という観点からは「一体型」が望ましいのだが、現実的には、芸大と看護大を含めて3大学を1大学に統合するか、あるいは一人の理事長が3大学の学長を兼務するか、いずれかの形を取らない限り「一体型」は実現しない。複数の大学長を兼務する事例が他県になかったわけではない。しかし、愛知県における現実の組織運営を考えた時に、芸大、看護大といった文化が大きく違う大学をひとつに統合して運営するには無理が伴うこと、その場合、それぞれの大学の個性が失われるかもしれないことに気がついた。当時は必ずしもそのメリットに確信があったわけではなく、どちらかといえば苦肉の策だったのだが、結果的に「一法人複数大学」の制度はよかったと思う。

この仕組のメリットのひとつは財政のスケールである。財政運用を法人が一元的に行うことによって、一大学ではとても実現できない事業や施設の拡充が年次計画的に可能になった。さらに大きなメリットと考えるのは、一法人が設置・運営する複数の大学がそれぞれの個性を発揮できること、無理にひとつの大学に括られることによって失われるかもしれない個性を維持し発展させることが可能だという点である。後に文科省高等教育局の関係者から一法人複数大学の是非についてヒアリングを受けたが、私はもっぱらこの点のメリットを強調した。

県大のキャンパスのあちこちに、今でも絵画や彫刻の展示がある。これらのほとんどは県立芸大の教員、学生、大学院生の作品である。大学生活の中で、学生は知性を養うとともに感性を磨くことが有意義である。感性を磨くことが

知性を高めることにもつながる。そのような趣旨で、兄弟大学である芸大にお願いして作品の貸与を実現した。また、時には県大の講堂や図書館のホールを使ってコンサートも開いた。これは芸大の学生にとってもメリットだと聞いた。芸術作品は見る人がいて、聴く人がいて、はじめて完成するものなのだから。本当は、芸大の教員の力を借りて、県大の教養教育の中に芸術をふんだんに取り入れたかった。

新・県大ファンファーレ 愛知県内において県立大学は昔から地味な大学で、知名度に欠けていた。名古屋市内でタクシーを拾って「愛知県立大学」と言って、まっすぐ運んでくれることは滅多になかった。そこで、市民、県民の中に「愛知県立大学」のイメージをしっかりと植えつけることがひとつの課題であると考えた。2009年4月の新大学発足を前に、大学の広報活動を積極的に考えた。当時の県大としては思い切り斬新な大ポスターを主要地下鉄の駅等に掲示した。真っ先にOBやOGから「県大、変わったね」と反応があった。しかつめらしい「愛知県立大学学報」に代えて「県大Now」という広報誌を発行した。そして、2008年秋には「2009年春、愛知県立大学が生まれ変わります」を標語に「新・県大ファンファーレ」と銘打った一週間の催しを行った。大学祭を間に挟み、鳥越俊太郎氏、亀山郁夫氏、藤原帰一氏の講演会とともに、県大の教育・研究の成果やこれからの計画の大公開を行ったのである。この乾坤一擲の催しに延べ1万人以上の県民が足を運んでくれた。愛知県立大学もようやく「地域とともに歩む公立大学」として県民の中に浸透し始めたことを実感した。

違った舵取りがあったかもしれない、と今にして思う。10年以上も前に思い至ったディシプリンが生き続けているのを見るのは嬉しいことではあるが、これにいつまでもこだわることはない。社会の変化、知的進化を見極めて大胆な見直しをする英断も期待したい。



ささやかながら振り返る県大の歴史

堀田 英夫 元外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 教授(外国語学部スペイン学科 卒業生)

住宅街の町中にあり、正門に入って少し走れば、裏門から出てしまう狭いキャンパスだった旧愛知県立大学が1998年に、ずっと広く、豊かな緑に囲まれた土地で、近代的な建物が建つ新しいキャンパスの長久手へ移転した。移転に伴う学科・学部・大学院新設、昼夜開講制などについて、移転前の何年かを「調整委員」なる名の役目を与えられ、かなりの数の打合せや会議に出席した。学内だけでなく、県庁の担当職員、それにコンサルタントの財団法人担当者との会合も何度かあった。全学的あるいは愛知県(そして日本)の中の大学という視点を持たなければならない役目ではあったが、先輩委員の山田正浩先生、田中正人先生などから学ぶことのみ多く、自分の所属する学部(学科)としての視点を離れることができずに参加していたのではないかと思う。

移転当初はリニモ(東部丘陵線)が未開通で、学生も教職員も自家用車でなければ、藤が丘から直通バスで通った。時間によっては乗車待ちの行列ができ、座れないこともあった。しかし車内で自分が直接指導しているのではない学生から卒論の相談を受けたこともあり、学生と教員との関係が近いという県大の伝統が続いていると感じた。ただ小生は2005年から学生部長を務めることになったため、自家用車通勤に変えた。高校(生)への広報と入試、入学式、学生の諸問題、就職、卒業式などなど、学生生活全般に関わる学生部の仕事は、優秀な学生部職員と学生部次長太田淳先生のおかげでできたことであった。特にセンター入試は、本学に志願しているのではない受験生も対象の全国規模事業の一環で、担当職員の方々の働きと緊張感を直ぐ近くで感じた。その職員などのおかげで大きな問題もなく行われることができたと思っている。2005年3月のリニモ開通に合わせバスが廃止された。またすぐ隣で「愛・地球博」が3月25日から9月25日まで開催された。会期中は大勢の観客が帰る時間と夜間主学生の帰宅時間が重なり、名古屋方面へリニモで帰宅する学生・教職員は、乗車のため長い行列で待たなければならなかった。しばらくしてからバスを運行してもらえたと記憶している。愛知万博と県大との関係で小生が関わったことでは、メキシコ協定大学のラス・アメリカス大学国際交流部長が博覧会見学を兼ねて、来日・来学され、個人的に徳川園などへお連れした。また学生対象にスペイン・パビリオン館長に講演をしてもらった。

2007年には設置者が、県から愛知県公立大学法人となる。それまで使っていた広い学生部長室が理事長室となるため、同じ管理棟2階の比較的狭い部屋へ2006年度途中で引っ越した。家具は職員が移動してくれたのだが、書類などの整理を太田先生と一緒にした。組織替え

で学生部から学生支援センターとなり、新しいセンター長を迎えるための部屋として、2006年度末に、今度は講義棟(東棟)の1階奥へ引っ越しし、愛知県立大学最後の学生部長として任期を終えた。

続いて新設された教育研究センター長を拝命した。「教育研究の充実と教育改革」を目的としたセンターの事業は、大学としても初めてのことが多く、センター長補佐の宮崎真素美先生、鶴殿悦子先生、宮浦国江先生、太田淳先生、それに北条泰親氏をはじめとする職員の皆さんの知恵と労力によるところが多かった。センターから文部科学省「社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に「ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成講座」の事業で応募し、採択を得た。文科省委託事業として2007年度から3年間開講し、その後も大学として継続してもらっている。この事業は、職員の方々と学部学科・看護大の諸先生、ウェブでの情報提供で太田先生、看護師資格を持つ国際文化研究科院生大谷かがりさんなどの協力を得て実施できた。

2009年の愛知県立看護大学との統合による新愛知県立大学の発足までは、教育研究センター長として、全学共通科目、中期目標・中期計画などの立案に、また何度かの会合に時間を費やした。看護大との全学共通科目の打合せでは、看護大の先生から統合には反対であると最初にいきなりの発言があり、面食らった。この場で話すことではないと聞き流すしかなかった。統合後は、看護学部学生対象のスペイン語授業も担当した。看護学部生もまじめでおとなしく、県大生全般の印象と共通していると感じた。中期目標だったかの立案での何回かの打合せの中で記憶しているのは、「敷地内禁煙」と「高等言語教育研究所」が何度か削除されたのをそのたびに復活させることができたことである。教育機関での禁煙は、現在は一般的だが、当時はまだそれほどでなく、看護大でも禁煙でないとかで異論が会合外で聞こえてきた。研究所については、文系でも共同研究が必要という問題意識から、専門が外国語教育でなくても学部語学教育についての共同研究なら多くの先生に加わってもらえるのではないかという期待を抱いていた。研究所設置後、諸先生の協働により、学生を巻き込むいくつかの活動を行うことはできた。

「学部・学科再編」と向き合った7年間

加藤 義信 元教育福祉学部教育発達学科 教授

2004年4月から2011年の3月まで、文学部長を3年、学術情報センター長を2年、教育福祉学部長を2年、務めさせていただきました。

2004年4月は、ちょうど佐々木雄太先生が新学長として愛知県立大学に着任された時にあたり、以来、私は7年間、先生のもとで学部運営・大学運営の仕事に携わることになりました。ちょうどその頃は、既に全国的には国立大学の法人化や他都道府県の公立大学の再編やダウンサイジングの具体化が進んでおり、当時、財政危機の最中にあった愛知県でも、県立大学をめぐる同様の議論が、前年夏には有識者による「県立の大学あり方検討会議」の立ち上げとともに、開始されていました。これ以後2年ほどの間、この会議を含めてさまざまな場で、とりわけ私が当時所属していた文学部の存在意義が、中でも国文学科、児童教育学科、社会福祉学科の存在意義が、次々に問われていくこととなります。

私が学部長になって、まずしなければならなかったのは、この「あり方検討会議」の準備会として月1～2回の頻度で定期的開催されていた、県庁での打ち合わせ会議への出席でした。ここでも、県庁職員からは県立大学の文系学部の存在意義について、厳しい言葉が語られました。その中でも、思い出すのは、次のような議論でした。

周知のように、愛知県は「ものづくり先進県」としてのプライドがあり、そういった産業振興策の延長上に、大学の存在意義を考える傾向が、かつては顕著に認められました。会議の中でも、例えば県のある部局からは、「これからのモノ作りは、物質としてのモノだけでなく情報を含めた見えないモノ作りの時代だ、愛知でもそうしたコンテンツ産業を育てたい」と言った発言が飛び出したこともありました。こうした発言は、その担い手養成として情報科学部に期待を寄せる善意の意味で語られたに違いありません。しかし、正直なところ、私は少なからずこれに違和感を禁じえませんでした。なぜなら、「コンテンツ」とは、情報技術である前に、何より「それは文化」だ、と強く思ったからです。

どんな情報も中身あってこそその情報です。伝達手段としての情報技術がいかにより優れていようと、中身が人を引きつけなければその情報には意味がありません。その中身には、生活の物質的改善に役立つ知識(まさに産業振興に資する道具的知識)もあれば、私たちの心の生活の質を豊かにする文化的生産物もあるでしょう。実は、地域における後者の蓄積の維持・発展を図り、その新しい時代のクリエイティブな担い手を養成するのが、人文系学部の役割のはずです。例えば、いくらパソコンのゲームソフトやアニメの映像が技術的に進化したとしても、そ

の核心はやはり「物語」としての面白さです。それは文化的価値の蓄積を大切にす風土の中でしか、生まれようがありません。

私は、愛知県が「文化」を大切にす自治体であってほしいと願いました。これからの21世紀の成熟社会では、文化的価値の産出が産業の一翼を担うようになり、そのためにも、県立の大学の文系学部を大事に育ててほしいと願いました。当時の文学部のそれぞれの学科は、そのような視点も織り込んで、自らの存在意義を必死になって県にアピールする作業に、取り組んでくれました。その結果、英文学科は外国語学部の英米学科に合流することになりましたが、残りの国文、日本文化、児童教育、社会福祉の4学科は、それぞれ2学科ずつ日本文化学部と教育福祉学部に分かれて、発展的に生き残ることができました。

それが単なる横並び縮小化による現状維持的生き残りでなかったことは、さらに教育福祉学部の上に、博士後期課程までも備えた人間発達学研究科が順次、設置されていったことを見ても、明らかです。

もちろん、夜間主コースの廃止や各学科の教員定員の削減など、犠牲を払わざるをえなかった側面もありました。しかし、当初、「縮小再編」は不可避と考えられていたところから出発して、2009年の時点で長久手キャンパスの学部数は3から4となり、すべての学部に高度な学問研究が可能な大学院への進学への道が開かれている体制も整備されたことは、今日に至る県立大学発展の大きな礎になりました。

「学部・学科再編」がこのような結果に落ち着いたのは、当時の佐々木学長のリーダーシップによるところが大きかったと思います。県から求められた県立大学の地域貢献力の向上を、大学全体としての研究・教育力の底上げの上を考えるという戦略が、先生の中ではぶれることがなかったからでしょう。

愛知県立大学が、これからもいっそう、ワクワクする学びの場であり続け、学生も教職員も、一人一人がそれぞれに「背伸び」をして自己実現を図れる場となっていくことを、願ってやみません。

新・愛知県立大学発足10周年記念誌に寄せて

草刈 淳子 元愛知県立看護大学 学長(第2代)

新・愛知県立大学発足10周年を心からお祝い申し上げます。2001年4月1日から2005年3月末まで在任致しましたが、初年度から当時の県大の森正夫学長と共用の「サテライトキャンパス設置」について協議し、県御当局のご賛同のもとに、翌年度には名古屋駅に程近い会館に開設されたのは有難いことでした。続いて助産科設置、最終年度にはILO提唱の「教育休暇」の条例が看護職のみならず県職員を対象に制定され、その時点での懸案事項全てが実現し、県の全面的協力に心から感謝しました。

2004年、県立看護大学10周年記念式典の折には、県医師会・名古屋市医師会の代表の先生方の出席も得、初代波多野梗子学長始め当時の教職員のそれ迄のご努力があったからとはいえ、10年という歳月は、全ての組織にとって、将来への更なる発展のために、必要で重要な基盤だと実感させられたことでした。

新・愛知県立大学としてこれ迄築かれてきたものを土台に、今後更なる発展を、久富木原学長のもとで遂げてゆかれますことを、心から期待しております。

日本の医療は1945年の第二次大戦後、予防からリハビリテーション迄を含む幅広い、新たな医療概念の下で再出発し、これを基盤に初の看護教育の大学化が、1952年、県立の高知女子大学家政学部に、翌1953年には国立大学としては初めて東京大学医学部に衛生看護学科(定員40人)が開設されました。私と小玉香津子氏(初代名古屋市立大学看護学部長、ナイチンゲール著作の翻訳者)は同学科3期生ですが、当時指導に当たられた医師・看護職(保・助・看)の先生方は、新しい医療理念の下でいかなる学生を育てるか、大いに努力を尽くされました。入学し、教養学部で他学部・他学科の学生及び多くの他領域の先生方とも論じ合えたことは、その後の幅広い思考基盤となっています。看護の専門職化が漸く確立してきた今日、日本の全大学の約3分の1を看護系が占めるに至りました。

昨2019年7月初旬、名古屋国際会議場で第25回日本看護診断学会が開催されました。実は前年度の学会で、学会発足時の私を含めた役員3人が名誉会員に推薦され、その際の私の挨拶を聞かれた次期大会長(名大・本田育美教授)から、翌25周年大会が、学会発足時と同じ会場で開催されるので、特別企画講演として発足当時の状況を話して欲しいとの要請を頂きました。1991年、当時POS(問題志向型理論)を論じておられた日野原重明院長(聖路加国際病院)を中心に日本看護診断研究会が発足し、1995年に学会を立ち上げたその会場で、これからの若い会員の方々にこれ迄の歩みを継承できる好機と考え、このお求めを受け、特別講演を終えることが出

来ました。多くの参加者から「戦後から今日に至る経緯を通して日本の看護の専門職化への発展過程を知る良い機会となった」と喜ばれたのは幸いでした。壇上から下りた途端、かつて私が、0歳と2歳児を連れて毎週講義に出かけ、18年間通った国立K病院附属看護学院卒で今や大学教授になられた方や、「今回初めて先生の講演を聞いて感動した」と話して下さった現場の方々に囲まれ、講演の機会を頂いた事を、心から感謝しました。

愛知県で、当時の神田県知事はじめ多くの方々との出会いや教職員の温かい連携の下に多くの学びを得させて頂き、80才中半にある今、皆様には是非伝えておきたいことがあります。

人生は「邂逅」である。出逢いを大切に!・・・準備のない者にチャンスは活きない!

1972年、日本看護協会創立25周年記念大会を機に、第6代目小林富美栄協会長(元厚生省医務局看護課保健婦係長)は、看護職の専門職化を目指し、記念講演「職業と専門職性」を石村善助氏(「現代のプロフェッション」の著者)に依頼し、翌年、看護職や社会学者等からなる研究会を編成し協議を重ねました。その最後の合同会議で、偶々私の隣席の男性が「専門職は診断と治療ができるのですよ」と喧かれ、反射的に私は「1972年NY州では、看護職が自らの職務上の診断と治療ができるとした法律が制定されました!」と反応、それが石村先生との最初の出逢いでした。早速関連資料をとのことでお送りした処、先生主催の「プロフェッション研究会」に参画させて頂き、更にそこで米国から帰国直後の天野郁夫先生(当時、名大教育学部助教授)御夫妻にお会いしたのです。2005年3月末、私の学長在職最後の仕事となった「県立大学と県立看護大学合併第1回検討会」で、委員会のお一人として、天野郁夫委員(当時、東大教育学部教授)に30余年振りに再会し、更に夫人とは後年、千葉大学(文学部)に赴任され再会したのでした。

また、同研究会でお会いした平林勝政先生(法社会学部、後の國學院大学副学長)からは、1983年の日本医事法学会第13回大会「アメリカのNP(ナースプラクティショナー)にみる医療業務と責任の再配分」への参画を看護職として依頼され、初めて他領域の学会(唄孝一会長)で発言する機会を得ました。平林先生はその後、厚労省「看護の新たな見直し検討会」委員として尽力して下さいました。

他方、1984年の日米産業比較研究(日本経済研究センター)では、物流・情報等13分野の研究班の「医療部門」でご一緒した二木立先生(日本福祉大学前学長)からは、現在も医療情報に関するメールを毎月配信して頂いており、

また看護職(日本)を担当された篠塚英子先生には、2000年に私が日本看護研究会理事長・第26回大会長として幕張メッセで学会を開催した折に、特別講演を依頼した当時は、日銀政策委員会審議委員(女性初)で、その後お茶の水女子大学学長補佐や人事院人事官(女性初)等を歴任され、今なお交流が続いており、改めて、人生は、人との出逢いによるものと実感させられています。

国立長寿医療研究センターは愛知県(大府市)にあり、赴任以来、長寿科学振興財団機関紙Aging & Healthの編集委員として参画してきましたが、2020年当初、当時の祖父江理事長から新たに委嘱書を頂きました。私は「愛知生まれ」ですので、愛知県立大学のお役に立つことができれば幸いです。

新型コロナ問題で、急速に世界的規模で社会情勢が変革する今日、新・愛知県立大学での他領域の方々との幅広い交流を基盤に、学生の皆様が豊かな新しい発想により、日本の将来を創造されていくことを心から期待しております。



守山キャンパス

大学改革の要請と県立大学・県立看護大学統合

鎌倉 やよい 日本赤十字豊田看護大学 学長(元本学副学長)

現在の愛知県立大学開設への道のりを振り返ると、かなり大変な道ではあったが、愛知県立看護大学として当時描いた将来構想はほぼ実現した。私は、大学改革の渦中に大学院研究科長となり、当時看護大学に学部長のポストはなく学長が兼ねていたこともあって、全速力で走ってきた感がある。教育と研究に没頭したいと願いつつ、大学改革の渦中に入ることを覚悟したことが思い出される。新大学となって初代の看護学部長・看護学研究科長となり、学部としての順調な出発に尽力した。統合に向けての道程など、当時の様子を知っている人も少なくなり、記憶を書き留めておきたい。

平成15年(2003年)の頃だったか、愛知県は県立大学改革として、愛知県立大学、愛知県立芸術大学と愛知県立看護大学の3大学統合を提案し、有識者による検討会が組織された。会議には各大学の学長が委員として参加し、愛知県立看護大学からは第2代学長の草刈淳子先生が委員として出席した。各学長はそれぞれ独立して大学運営することの利益と3大学が統合することのリスクを主張し、将来構想が議論された。その議論の中で、県立大学の入学式にも卒業式にも設置者の知事が出席したことがないのはいかなるものかとの批判があり、それを機に式典に知事が出席するという副産物も生まれた。

検討会は、3大学それぞれに設置の意義があり、独立して運営することが望ましいとの意見書を愛知県知事に答申した。草刈学長を始めとする愛知県立看護大学の教職員は安堵し、答申を歓迎した。ところが、平成17年(2005年)2月の愛知県議会における神田愛知県知事の答弁に驚いた。その概要は、愛知県立大学と愛知県立看護大学は統合する、愛知県立芸術大学はオリジナリティが高いので統合しない、平成19年(2007年)に3大学を法人化して、ひとつの法人が3大学を運営する、といった内容であった。後日、大学改革室に、答申に反してなぜ2大学統合となったのかを質問すると、答申を受けて3大学統合を2大学統合に変更したとの回答であった。

この間、私たちは愛知県立看護大学の大学改革構想を検討し、法人化を見据えて看護実践センターを設置し、がん看護に関係する認定看護師教育課程を2課程開設すること、地域貢献の要として公開講座及び有料の研修会を実施すること、大学院修士課程に助産師コース、専門看護師コース及び認定看護管理者コースを開設すること、さらに博士後期課程を開設すること、愛知県のシンクタンク機能を担うことについて検討を進めてきた。私は平成17年(2005年)に大学院研究科長に選任され、第3代学長川田智恵子先生と共に、教職員一同となって改革を進めていった。法人化に伴い、看護教育センター、看

護学術情報センター及び看護実践センターが設置され、センター長に山口桂子教授、越川卓教授、岩瀬信夫教授が就任した。

愛知県との交渉の場面では、県のがん対策をサポートする構想であること、看護実践センターの収入で運営する5000万円の事業計画を提示した時、大学改革室の担当者の態度が前向きに一変したことを記憶している。愛知県立看護大学からの提案はすべて承認され、法人化の同年(2007年)には修士課程に専門看護師コース及び認定看護管理者コースが開設され、翌年(2008年)には看護実践センターが開設され、認定看護師教育課程(がん化学療法看護、がん性疼痛看護)の教育が開始された。

一方、愛知県の2大学統合との最終決定を受けて落胆はしたものの、この決定を覆すことは困難であることから、看護大学では将来を見通して、どのような形での統合が望ましいか、検討が開始された。県立大学佐々木雄太学長からは教育福祉学部と看護学部を統合し、看護学科になることを求められた。しかし、愛知県立看護大学としての将来構想からは合意できるわけもなく、看護学科となることは看護界での競争力が失われることを意味した。何度も話し合いを重ね、看護学部としての統合が合意された。また、大学院についても、再度の話し合いを重ねて看護学研究科としての統合の合意となった。

2大学の統合様式として、両大学を廃止して新大学を設立する方法が決定され、設置申請を行うこととなった。新大学の名称は、新たな案が提案されたが、結果的に愛知県立大学とすることが決定され、当時は区別するために「新愛知県立大学」との呼称で表現していた。看護大学では、博士後期課程の設置と博士前期課程に助産師コースを開設することを目指して、文部科学省大学設置室への相談、医学教育課への相談を重ねた。また、博士後期課程は、需要調査に始まり、設置の趣旨として博士後期課程の構想を書類にまとめた。看護学部の申請書類は大津廣子教授が、大学院の申請書類は鎌倉が担当した。文部科学省の要請に応じて、2人で意見交換しながら、多くの規程類を作成したことが思い出される。

また、設置申請とは別に、県立大学に包含される組織として、看護学部内の組織をどのように融合させるかが課題であった。全学委員会の機能を聞き取り、新大学全体の運営図を作成し、看護学部がうまく連動するように学部内の組織を構築した。平成21年(2009年)に新大学がスタートしたが、看護学部・看護学研究科も順調にスタートした。今後、愛知県立大学がますます発展することを祈念している。

新大学移行期の思い出

梅村 明里 看護学部看護学科 卒業生

愛知県立大学と愛知県立看護大学が統合した愛知県立大学看護学部の1回生として、私は入学しました。入学式の日、真新しいリクルートスーツを着て、わくわくしながら広い講堂で入学式に出席したことが昨日のこのように思い出されます。

私は看護学部の学生でしたが、一般教養や外国語の講義は他学部の学生さんと一緒に受けていました。他学部の学生さんとお話して友達になり、講義の情報を交換したことを覚えています。文化人類学の講義では、リトルワールドに行ってレポートを書くという課題があり、講義内容もとても興味深く楽しかったです。私はポルトガル語の講義も受講していました。現在は看護師として病院で勤務していますが、ブラジル人の患者さんが入院されることもあります。そのような時にはポルトガル語の講義で学んだ自己紹介のフレーズを活かすことができます。また、外国語学に強い大学ということもあり、多くの留学情報が学内に掲示されていました。私には海外で英語を学びたいという夢がありました。他学部の学生さんや掲示物に刺激され、自ら計画して大学3年の夏休みの1か月間、カナダに語学研修に行くことができました。語学研修に行こうと決心できたのも、長久手キャンパスで学生生活を送ることができたからではないかと思っています。

大学といえば、大きな建物が建つ広いキャンパスを歩き、カフェや食堂で友人とおしゃべりをしながら休憩したり、大きな購買でおやつを買ってワイワイ過ごしたり、サークルや大学祭を楽しんだりするというキラキラしたイメージがあります。長久手キャンパスはそのどれもがそろっていたなと思います。長久手キャンパスには広い学食があり、サイドメニューなどはビュッフェスタイルでした。メニューの種類も豊富で、今日は何を食べようかなと考えながら午前中の講義を受けていたこともあります。また、長久手キャンパスの講義の隣にあった、井専門店にも友人とよく行っていました。テラス席もあり、これぞ大学のキャンパスライフという感じだったと思います。

大変だったこともあります。1年生の後期は、月水金曜日は長久手キャンパスでの講義、火木曜日は守山キャンパスでの講義でした。長久手キャンパスと守山キャンパス間でスクールバスは運行されていましたが、スクールバスに乗って1限目からの講義に参加するためには、朝6時前には自宅を出発しないと間に合わない状態でした。そのため、両親に相談し、長久手キャンパスと守山キャンパス両方に行ける定期券を購入しました。今考えると、学生料金だったとしても通学定期券にとってもお金がかかっていたなと思います。

1年生の後期からいよいよ本格的に看護学の講義も始まりました。長久手キャンパスでも看護学の講義もありました。先生方も長久手キャンパスには慣れていない様子で、プロジェクターなどの機械操作がうまくいかず、講義が中断することもありました。今では友人と笑って話す思い出話の一つです。守山キャンパスでは専門職としての知識や技術を学ぶ場所として、同級生や先生方との交流も深まり、楽しく充実した守山キャンパスライフを過ごすことができました。

楽しくキラキラした長久手キャンパスでの学生生活と、演習など本格的な看護学の講義を受ける守山キャンパスでの学生生活は大きく違うものでしたが、どちらの学生生活でもたくさんの人と出会い、多くの刺激を受け、学ぶことができたと思います。充実した4年間の学生生活は、現在看護師として広い視野を持って働くための礎となっています。そのような貴重な勉強の機会を与えてくださいました先生方のあたたかいご指導に感謝するとともに、愛知県立大学のますますの発展を祈念しております。

新大学開設と国際文化研究科改組

大塚 英二 日本文化学部長・兼国際文化研究科長

二〇〇九年に本学は県立看護大学と統合して新県立大学として開設され、その際、各学部の再編と同時に大学院の改組も行われた。改組に直接関わった者として、今後の国際文化研究科の展開のために、その歩みを少しだけ振り返ろうと思う。

国際文化研究科は、旧愛知県立大学が名古屋の高田町キャンパスから現校地に移転した翌年の一九九八年に修士課程のみ(四年後には博士課程も設置)の課程として出発した。筆者は最初から担当していたわけではなく、同僚教員の他大学への転出により、同分野科目の欠を補うべく、俄かに審査を受けることとなった。当時は文学部(現在の日本文化学部と教育福祉学部、そして外国語学部に移った旧英文学部の教員により構成されていた)と外国語学部の総勢一三〇人ほどの教員のうち、三三名だけが大学院担当となっていた。そして、一学年の学生定員は一五名であった。

その後、学生定員を二〇名に増やし(当時は入試倍率が二倍以上あって今は昔の感がある)、それに合わせて教員定数も四四名となった。それでも、教員の大半は研究科の担当ではなく、人間発達学研究科も二〇〇九年の発足であったから、多くの教員が大学院と関わっていなかった。大学院担当会議は、教授会のない水曜日に独自に行われており、現在のG506の会議室(現教育福祉学部教授会室)が充てられていた。途中から博士前期と博士後期の担当会議は一緒に行うようになったが、当初は別々に行っており、月二回の教授会と併せると、今よりもずっと会議漬けの日々だったような気がする。

その当時、国際文化研究科を構成する二学部の教員の思いは、筆者の記憶が間違っていなければ、大学院の全員担当を求めるものであった。そこで、二〇〇五年頃からそれに向けた制度改革を目指したのである。筆者はその段階で副研究科長の任にあり、新研究科開設に向けたワーキンググループの責任者を仰せつかった。

設置審に提出する書類は、最初に研究科を立ち上げた時のものと博士課程を作った時のものを参考に、グローバル化が進む社会において両学部のブリッジによる視野の広い学びとともに、各分野の専門性も十分に保証するカリキュラム構成となるよう配慮した。更に、今はブリッジであっても、やがて各学部の上に二階建てとなる研究科が作れるよう、定員自体をそれぞれに設けた二つの専攻、すなわち国際文化専攻と日本文学専攻を設置した。新大学院開設直後から研究科会議は専攻ごとに行い、各学部教授会と一体に運営してきたことは、この二階建て化を意識して導入されたものである。

しかしながら、一昨年度からは、試行的にはあるが、

研究科会議は旧会議のように両学部の構成員全員で一体的になされるようになった。我々は、自覚的ではないにせよ、すでに研究科の分離を前提しなくなっているように思う。それは、両学部がディシプリン的には共通する土台を有し、学術面で大きな違和感を互いに感ずることが少ないからであろう。ただ、かつて真剣に考えられた連携・共同する二研究科構想は、現時点では頓挫したままである。

さて、全員担当化にかかわる思い出を一つ語ろう。二〇〇七年度から二年間、筆者は研究科長の職にあった。その際、最も大変だったのは新研究科担当教員の審査であった。授業科目は全員の担当が可であるとしても、論文指導の面で主たる指導を担う教員として適格であるか否か、すなわち設置審での基準をクリアーするものであるか否か、自前の判断が必要だったのである。そのため、研究科内に資格審査委員会を設置し、全教員に業績と教育実績等を出してもらい、一人ずつ審査し、その結果を各自にお伝えしたのである。今思えば、人様に「あなたは合です、マル合です」などと言うのは非常に失礼な話であるが、誰かがやらねばならない。皆さんに届けた封書の差出人に自分の名前を書き入れた時の重たい気分がよみがえる。

そして、今また十年ぶりに研究科長の職にある。筆者らが十年以上前に作った研究科の枠組み自体は変わっていないものの、新たなコースの設置、カリキュラムの改編、入試方法の変化など、中身としてはずいぶん様変わりした。社会のニーズに合わせた人材の育成という点でも、また多様な学的背景を有した人材を確保するという点でも、研究科は変わり続けている。

研究科の変化は、教員組織の面でも大きなものがある。それを資格審査の面でもう一つ見てみよう。研究科では、当初から、前期課程主指導の条件には二年の副指導、二年の授業経験をに入れていた。これは、教授には課されない条件で、准教授のみに適用されていた。教授と准教授を明らかに差別しているように見えるのだが、もともとは准教授にも主指導を任すために考案されたものだった。旧研究科には、助教授(のちの准教授)もいたが、極めて少数で、基本的に教授が大学院学生の教育を担う構造となっていた。それを、業績と授業経験があれば、どんどん主指導になって頂きたいとの考えから、すなわち研究科内の人的資産を十分に活用したいとの思いから付けられた条件だったのである。新研究科発足の頃には、既に採用教員の多くがその時点で博士の学位を有しており、業績的には問題なかったが、副査や授業の経験を積む機会は必ずしも多いとは言えず、この条件が逆に准教授の

主指導への途を閉ざすようなものとなっていた。そこで、今年度からこの条件を撤廃し、前期課程にあっては、教授と准教授を同列に扱うようにしたのである。

そろそろ雑文をまとめよう。十年ほど前には、学部の教育課程はむしろ教養的なものにして、専門的なものは修士課程=博士前期で行うことを推進するような考え方があったように思うが、この間、就職が好調であったためか、理系は除き、そうした方向性はほとんど展開しなかった。しかし、年度をまたいで新型コロナウイルスの影響で社会は大きく混乱し、経済は大きな壁に突き当たっている。思えば、かつてそうした時代には大学院に進学する者が多かった。じっくり思いを巡らせて自らの進路を確認しようとする者が研究科を目指していたように思う。現実には、これ以降進学者が増えるかどうか見直しは立っていないが、学部と研究科の関係をもう一度見直して、どのような学生を受け入れ教育するのか、考えてみる良い機会になるのではないかと、とも思う。



長久手キャンパス 図書館裏

大学職員のひとりとして

口ベル 智子 愛知県立芸術大学事務部門長(国際文化研究科 修了生)

私が愛知県の嘱託職員として大学で働きだしたのは2006年で、当時はまだ大学が法人化する前でした。事務は愛知県から派遣された職員と嘱託職員で構成されていて、学部にはそれぞれ教員センターがあり、職員ひとりが担当する事務業務も今に比べるとずいぶん余裕があったように感じます。その後、法人化に伴い事務の合理化が大きく進んでいくことになりました。

私が最初に担当させていただいた仕事は、外国語学部の科学研究費の執行や申請に関わる事務でした。教務課の課長補佐の隣にデスクを置いてもらい、文学部の科研費担当の同僚とともに、今までにない“研究支援”をモットーに仕事をしていました。今までにない、というのはその同僚と私は、初めて研究支援を担当する職員として採用されたからです。当時の佐々木学長が愛知県と交渉して作ったポジションだったことを後から知りました。

今では科学研究費といえど電子申請が当たり前になっていて、マウスのボタンクリックひとつで書類が提出できますが、当時は提出までいくつかの手作業が必要でした。科学研究費の種別によって提出書類の表紙の右上の角をカラーマジックで指定の色に塗りつぶす作業や種別ごとに求められる必要部数を製本し、最終的にはダンボール箱にきっちり梱包して日本学術振興会へ宅配便で送る、というものです。年に一度、科学研究費の申請の時期になるとそうした一連の作業を行うことが大学事務のルーティンワークでした。

先生方が提出書類を作成する時期になると、その書類に誤字や脱字がないかを確認する作業もあり、その研究計画書を読むことがとても楽しみだったことを覚えています。

2007年に大学が法人化され、嘱託職員ではなく契約職員と呼ばれるようになりました。そして事務の合理化に伴い科学研究費の担当は私1人になり、外国語学部担当から全学部を担当することになりました。現在の県立大学は5学部ありますが、当時は3つの学部でしたので外国語学部に加えて文学部、情報科学部の先生方にもお世話になることになりました。全学部を担当することで各学部の特色がだんだんわかってきて、先生方が実に個性豊かな研究をされていることを知り、毎日何か新しい発見をしていたように記憶しています。

この頃から日本学術振興会の事務手続きの電子化がいつに進んでいき、科学研究費についても電子申請と書面提出のハイブリッド方式を経て、現在の完全な電子化に移行していきました。それまで毎年秋の科研費の申請時期になると購入していたカラーマジックも不要となり、ペン立てに残っているカラーマジックを見て思わず「お疲れ様」と声をかけたくなったものです。電子化に伴い、利便

大学の成長とともに

若子 直 元事務部門長

名古屋市瑞穂区高田町の地から長久手の地へのキャンパス移転開学、同時に情報科学部の新設、長久手新キャンパスの遠方でありながらの高校生からの人気急上昇、入学志願者の急増。

暫くしての、設置者である愛知県の大学あり方検討会による議論開始、議論の行方は大学法人化と県立3大学のうち愛知県立大学と愛知県立看護大学の統合による新大学の設置。

平成元年から令和の現在まで、これらの愛知県立大学の殆ど全ての事象に関わらせていただくことになり、25年間余りが勉強勉強の毎日でした。なかでも、大学の法人化と愛知県立大学と愛知県立看護大学の統合による新愛知県立大学の設置の事務作業は質量ともに、膨大なものでした。

大学法人化の準備では、会計システムの抜本的な変換、つまり収入支出の大福帳の概念しかなかった役所会計から企業会計の基本である複式簿記への転換のための研修であったり、資産整理調査など、毎日の詳細な作業の積み上げでした。そんな中、実際に公立大学法人としての出発が近づくにつれ、ある種の違和感を感じるようになりました。大学の現場の教職員の意識の中に、「大学の法人化というのは、大学の上に【法人】というものが来るらしい」との思いが湧き上がってきたということです。このことは、大学が単なる法人格を有するだけだと思っていた私には不思議な違和感ともいえる感覚でした。この違和感が消えていくには相当な時間が必要となりました。

平成19年4月1日、愛知県公立大学法人が産声をあげましたが、法人運営大学運営ともに事務作業を手探りながらこなしていく毎日でした。年度当初の混乱も少し落ち着きを見せ始めた初夏のころ、愛知県の大学改革のもうひとつの柱である愛知県立大学と愛知県立看護大学の統合による新愛知県立大学の設置の作業に関わることとなりました。

主に事務作業のとりまとめを担当する程度だと思っておりました。ところが、両大学の統合準備委員会の運営、統合スケジュールの立ち上げ、進行管理、膨大な書類作成等々、当時は法人本部総務グループ所属でありましたが、本来業務は全て犠牲にし、新大学設置業務に没頭せざるを得ませんでした。ここ最近の働き方改革などによる勤務時間管理などは無いに等しく、朝であろうが昼であろうが夜であろうが土日であろうが関係なく、どんなことがあっても期限までに文部科学省へ大学設置認可申請書類を届けなくてはなりませんでした。

これが、ただ書類を作成し届けるだけではなく、必ず「大学設置認可」を受けなければなりませんでした。これが、愛知県が公表した「愛知県大学改革基本計画」の大きな柱のひとつを立ち上げることでした。実際に私自身、作業をこなしていく過程でこのような重さに少しづつ気がついていき、時には気持ちが折れそうにもなりましたが、時の佐々木学長先生始め大学設置作業のリーダーであった、高島副学長

先生並びに各学部学科のご担当の先生のご指導やご助言やご助力をたくさんにいただき、なんとか間に合わせることができました。今、思い起こせば本当に膨大な事務作業をよく、仕上げることができたものだと思います。おかげで、それまで経験したことのないカリキュラムのことであったり、授業概要やシラバスであったり、学則を始めとする規程集並びに教員構成や個人調書のことまでも関わらせていただき、大学運営のほぼ殆どを勉強させていただくことができました。併せて、文部科学省大学設置室へ何度も足を運び、質疑やら打ち合わせを重ね、提出期限の平成20年3月の最終週には1週間に3度も上京するなど、目が回るような思いをしながらも、文科省の担当官とも顔見知りになることができ、これも大きな財産となりました。

このようにして、大学設置認可申請書類の提出ができ、その後2回の補正申請を重ね、平成20年の10月、新愛知県立大学の設置認可を受けることが出来ました。この間に大学の現場では、新講義棟の建設を始め、サテライトキャンパスの整備であったり、新教務システムの契約並びに入試実施等々、平成21年度入学生受け入れ準備で忙殺されることとなりました。

平成21年4月新愛知県立大学開学です。

長久手キャンパスと守山キャンパス間の学生の移動であったり、カリキュラムの新システムの運営であったり、両キャンパスの学務系事務の連携であったり、大学運営面の教育研究審議会を頂点とする各種委員会運営であったり、統合前のそれぞれの大学の歴史や文化や慣習等々をすべて統合調整し、運営することが本当に大変でした。私自身は平成21年4月から守山キャンパスで事務を担当しましたが、長久手キャンパスの事務(特に学務系)と統合調整することに苦心したことが思い出されます。新愛知県立大学が真にひとつの大学として回り始めるのに3～4年程の時間が必要であったと感じています。

新大学がスタートしてから、僅か10年余りですが、この間にも学長のリーダーシップのもとに、様々な改革が実行され(学内センターの組織改革、新教養教育の改革、国の補助金の獲得(iCoToBa)、次世代ロボット研究所設置等々)、さらに学生の努力もあり、採用された企業サイドからの評価が年々上昇しており、着実に愛知県立大学が成長していると実感しています。

私自身、今思えば、通算で約25年以上、こんなにも大学運営のことを体験し、また勉強することが出来、並びに文部科学省とのやりとりの体験までさせていただくことができ、ただただ感謝しかありません。私の人生の半分を愛知県立大学で創っていただきました。

歴代の学長先生始め学部長先生や各学科の先生方並びに事務職員の方々に深くお礼申し上げます。

愛知県立大学のますますの発展を心よりお祈りいたします。

プロパー職員第1号

北條 泰親 元事務部門長(外国語学部フランス学科 卒業生)

2007年4月に愛知県立大学の法人職員第1号として採用され、卒業後31年ぶりに母校の門を潜った。国立大学法人化の業務経験を活かして欲しいとの、佐々木学長からのお声かけによるものだった。

緑の丘の上、白亜に輝く県大で着任早々感じたのは、その風貌に似合わぬ事務室の様子であった。「除籍された学生の成績は入学時に遡って全て消えてしまうのだ」と某係長が話すのが聞こえ、慌てて訂正しに割り込んだ。事務の質を早く高める必要性を感じた。

着任後の自分の課題は、法人化による業務運営方式の導入と定着化、2年後に迫った看護大学との統合、夜間主コースの廃止、新教務システムの導入、そして、何よりも急がれたことが先に触れた、職員の育成であった。

法人化の業務運営、例えば中期目標・計画、年度計画・実績報告など制度的な運用は、幸いなことに国立大学法人とほぼ同じ制度設計であったため、比較的取り組みやすくなりできた。ただ、息つく間もなく新しい事業が次々と舞い込んだ。法人の初代理事長、清水理事長からの提案で、「中部の企業トップに聞く」の連続講義を開講することになり、外国語学部の堀先生が授業担当となるも、直ぐに半期10数人の講師を探しに、理事長にお供して、講義の趣旨説明と就任のお願いに走り回った。奇跡的な調整だったが、中日新聞の大島社長、CBCの夏目会長、東邦ガスの水野会長、松坂屋の岡田会長、豊田通商の古川会長、名古屋鉄道の木村相談役から始まり、神田知事、大村知事ほか、清水理事長ならではの豪華な顔ぶれが毎年揃った。宮浦先生の英語特別講義も始まり、スペイン学科主導の「医療分野ポルトガル語スペイン語講座」にあっては、法人化初年度から始まった。

統合関係では、設置審の事務を大学庶務と法人総務の担当の方が鋭意進めてくれたので、担当した学務の方では、教養科目のカリキュラム統合や学生支援関係のすり合わせから始まった。教養科目は、県大側は外国語学部の堀田先生が中心となり、凄まじいスピードで看護大学側との協議を進めてくださった。その他、記憶を辿れば、入試問題、募集要項などの統一、入学手続きの日程、センター試験やオープンキャンパスの実施方法、入学式・卒業式の開催、奨学金事務の運用、入学金・授業料免除、定期健康診断、サークル活動、看護学部1年生用のロッカー、第2食堂の建設、大教室の設置計画、キャンパス間の移動手段、時間割・シラバス履修登録の統一、科研費関係、公開講座・学術講演会の実施方法等、一つずつ検討を進め、担当職員が大いに気を吐いてくれた。教務システムの導入では、知り合いを頼って名古屋外国語大学を訪ね、懇切丁寧に助言をいただき、ありがたかった。

肝心な「職員の育成」だが、事務職員向け研修を着任後2

年目の夏から行った。大学制度と関係法規を自分が担当して、中教審46答申、臨教審から大学審、産学連携と競争資金、国公立大の法人化、「多様化」から「学士課程教育」に至るまでの流れと、学校教育法から学則までの法的な枠組みを説明し、実務担当者にも講師をしてもらい、教務や教職事務についても勉強があった。プロパー職員も少しずつ増え、業務への改善提案さえ出始めた。佐々木学長が中教審大学分科会の大学教育部会長をされていたことも職員達の学習意欲を後押ししていたかも知れない。

その後、自分で鉛筆を舐め、文部科学省の「就業力育成支援事業」に申請し不採択となったが、キャリア支援の重要性を法人が理解してくれ、キャリア支援室の人員増につながった。続いて、初めて採用となったプロパー女性職員のうち1人がJASSOの国際大学セミナーに申請し、見事に採択され、素晴らしい国際交流事業ができた。高島学長時代へ移り、事務方では外国語学部担当のプロパー女性職員2人が中心になり、先生方とともに文部科学省「グローバル人材育成事業」に申請し、これも見事に採択され、その後の大学事業展開の大きな原動力となった。

その時期には、理事長が2代目の笹津理事長に交代されており、輪をかけて職員の育成に力を入れてくださった。また、就任早々、20社を超える就職先の企業回りを提案され、ご同行いただいた。随行する車中では、矢継ぎ早に大学運営について質問され、後で関係資料をお届けすることも幾度かあった。県大のオフィスの改修にも大いに関心を持っていただき、若手職員を重用して、見事に改装が成し遂げられた。そのほか、インドネシア関係の事業を始め、様々な業務を通じて、職員のやる気を大いに引き出してくださいました。

自分は国公立、全ての設置形態の大学に勤務するという幸運に恵まれた。学生として県大を卒業した時は、オイルショック後の就職難で苦労したものの、良い学生時代だったと感謝して大学の門を出た。その数年後に国立大学職員として大学に戻ったが、爾来、自分が常に良い大学作りをしてきたかといえば、必ずしも胸を張れる思いばかりではない。今の大学で良いのか、大学とは何ぞやという疑問から逃れられたことは片時も無い。高等教育行政の方法論が縮こまってきた昨今、苦労の割には本質的な部分で躍動感に欠ける印象さえある。もう一度人生があったとしても、再チャレンジで同じ職業を選ぶことはないかも知れないが、愛知県立大学で勤務したあの激動の7年間に、ご指導いただいた理事長、学長を始め、ご支援をくださった先生方や県職員の方、そして、何より大学事務職員として立派に育てていった多くの人たちとどこかでもう一度一緒に仕事をしてみたいという気持ちだけは大きいにある。

長久手キャンパス



守山キャンパス



キャンパス移動のためのバス
(長久手C⇄守山C)

新大学5学部

外国語学部



教育福祉学部



日本文化学部



看護学部



情報科学部



施設整備

特別講義棟：S棟(2009年2月完成)



食堂ラウンジ棟：IL棟(2011年9月完成)



iCoToBa(多言語学習センター)：E棟2階(2013年3月設置)



次世代ロボット研究所：R棟(2016年2月完成)



大学院講義室等：守山キャンパス(2014年9月完成)





記念事業・関連企画／コラム／大学のあゆみ

記念事業

周年記念行事 2019年11月3日(日)

1. 記念講演

「ロボットで探る昆虫の脳と匂いの世界
—ファール昆虫記のなぞに挑む—」

時間:13:30~15:00

場所:長久手キャンパスS201教室

講演者:神崎亮平教授(東京大学先端科学技術研究センター所長)

参加者:約230名

ご来賓22名(他大学学長、経営審議委員、名誉教授等)、
一般69名、学生95名、その他教職員等



2. 神崎亮平教授と学生との懇親会

時間:15:10~16:20

場所:長久手キャンパス情報科学部棟演習室1

参加者:約30名(主に情報科学部、看護学部学生)



3. 記念式典

時間:16:00~16:45

場所:長久手キャンパス多目的ホール

内容:式辞・来賓祝辞等(式典終了後、記念撮影)

参加者:約70名

- ・ご来賓(登壇者):8名(愛知県知事、文科省大学振興課課長補佐、
公大協会長、大垣共立銀行会長、長久手市教育長、
岡崎信用金庫副理事長、後援会長、
県立芸術大学副学長)
- ・ご来賓(参加者):36名(元学長、他大学学長、経営審議委員、名誉教授等)
- ・同窓会関係:15名程度
- ・その他教職員等



4. 祝賀会(同窓会主催)

時間:17:00~18:00

場所:長久手キャンパス多目的ホール

参加者:約100名



5. 記念行事当日の基金受入状況

受入金額:26,000円 受入件数:5件※ 受入項目:使途を特定しない大学支援事業(全件)

※返礼品は全件ともあまぎけ(5,000円以上であまぎけ1本)



文部科学省情報ひろば企画展示

「フィールドワーク写真展:世界の〈いま〉を切り取る学生のまなざし」

期間:2019年9月2日(月)~12月19日(木) 場所:文部科学省ミュージアム「情報ひろば」3階企画展示室

この展示は、本学外国語学部国際関係学科発足(2009年)から10年の節目を機に企画されたものです。学科の学生や教員が、世界53の国・地域で自ら撮影してきた写真作品141点を展示しました。これまでも、留学、海外調査、ボランティアなどで世界を踏破する学生たちの自慢の写真を学内外で公開展示してきており、この10年間の出展写真総数は735点を数え、撮影地は世界82の国・地域に及びます(2019年12月現在)。世界中で学生が活躍する本学科の特色をよく示す行事であるとともに、フィールドワーク実習などの教育成果の発信、地域貢献の役割をもあわせもっています。

本企画展示は、広報の上でも大きな成果を収めたほか、学科設立10年の節目の年に、本学構成員自身がこれまでの国際的活動と社会貢献の蓄積を振り返るよい機会となりました。また、学生が文部科学省本省を訪れて作業し、館内見学の機会を得たことも含めて、学生たちにおけるよい学習機会ともなりました。

(文責:亀井伸孝(国際関係学科))



企画展示データ

展示した写真作品数:141点(67人(在学生38人、卒業生25人、教員4人)による53の国・地域における撮影作品)
観覧者数:約5,000人(全会期16週間の合計、推計値)

サイドイベント

本企画のサイドイベントとして、以下の行事も開催されました。

(1) 文部科学省情報ひろば公開シンポジウム

「アクティブ・ラーニング教育実践の10年:愛知県立大学国際関係学科の挑戦」

日時:2019年11月1日(金)14:30~16:15 場所:文部科学省情報ひろば1階ラウンジ 参加者:30数名

(2) 愛知県立大学長久手キャンパスにおける国際関係学科写真展

会期:2019年12月24日(火)~2020年1月14日(火) 場所:愛知県立大学長久手キャンパスH棟地下ホール

地域ものづくり学生共同プロジェクトスピノフ企画

ポスターセッション&発表会

日時:2019年10月16日(水)13:00~15:00

場所:長久手キャンパス 講堂ホワイエ

発表者:4チーム29名

参加者:約120名

協力企業:松井本和蠟燭工房(岡崎市)

有限会社大橋量器(岐阜県大垣市)

福井酒造株式会社(豊橋市)

株式会社クラウン・パッケージ(小牧市)

今回は、5学部連携による周年記念事業の一つとして、2018年度に実施したプロジェクトを学生が自主的に継続、発展させたスピノフ企画を開催しました。複数学部の学生・教員の連携と、東海地域の企業との共同により実施した企画や調査した結果などをポスターとプレゼンテーションにまとめ、発表を行いました。発表会場には、多くの学生や教職員、同窓生などが集い、プレゼンテーションの内容を熱心に聞いたり、ポスターを見ながら学生に質問したりするなど、大いに盛り上がりました。また、協力していただいた企業の担当者の方にも会場にお越しいただき、企業の方に直接お話を伺える貴重な機会となりました。発表会終了後は茶話会が開催され、スピノフ企画に参加した学生は企業の方や教職員と交流し、有意義なひと時を過ごしました。



※地域ものづくり学生共同プロジェクト:2015年度から外国語学部専門科目として開講。愛知県・東海地域の「ものづくり」の良さを広く発信するための、企画立案と広報物作成を行う取り組みとして、2018年度までに32社の協力企業および延べ160名の学生が参加。

愛知県 災害弱者対策・支援プロジェクト

愛知県は、南海トラフ地震による甚大な被害が予想されており、私たちは災害を身近の問題として捉え、自分のいのちと同時に他者のいのちを守るための意識と知識と行動力を身につける必要があります。そのような中で、乳幼児、高齢者、傷病者、障害者、外国人などいわゆる災害弱者に目を向けることは、災害の際に自分たちのいのちを守る方法や災害対策・支援の本質を捉えることにつながります。

『愛知県 災害弱者対策・支援プロジェクト』は、「いのち」の学びと探究」という愛知県のビジョンを反映した

活動であり、文系・理系・看護を含めた5つの学部から成る本学の特徴を活かし、愛知県の公立大学として災害弱者やその支援に関わる教育・研究・実践の底力を県民の皆様に発信すると同時に、さらに今後、災害弱者対策・支援に関わる研究・教育・実践の拠点になることを目指すものです。

この目的を達成するため、学内外に向けた様々な企画・活動を実施しました。



①H棟地下通路

②長久手キャンパス図書館

【防災展示】

「防災グッズからふりかえる日頃の防災意識」

期 間:2019年11月13日(水)～11月27日(水)

場 所:長久手キャンパスH棟地下通路、同図書館

教職員の防災意識を高めるため、H棟地下通路では、防災グッズ、パネル展示、図書館では、テーマに沿った図書の展示とあわせて、災害備蓄品の展示を行いました。



【講演会】

「愛知の災害弱者のいのちを守る」

日 時:2019年11月20日(水)13:15～14:30

場 所:長久手キャンパスS201教室

講演者:看護学部 清水宣明教授

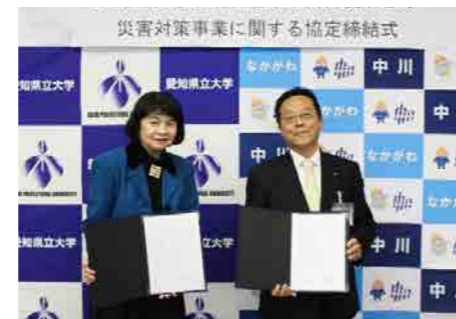
参加者:79名(学生61名、教職員18名)

【事業】「名古屋市中川区役所との災害対策事業協定締結」

2020年2月20日(木)、本学と名古屋市中川区役所が、子どものいのちを守るために、災害対策事業協定を締結しました。本協定に基づき、災害弱者を地震・津波による風水害から守る防災方法を確立するため、中川区役所が実施する「子どものいのちを守る子育て防災対策事業」の一環として、また本学「愛知県 災害弱者対策・支援プロジェクト」の一環として、保育園を拠点とした災害弱者

対策事業が開始しました。本学看護学部清水宣明教授が中心となり、名古屋市立正色保育園にて災害弱者対策モデルの実施検証を開始しており、「保育園を拠点とした防災対策モデル」を確立する予定です。

今後、両者が保有する情報、資源、研究成果等を用いて連携を深めることにより、災害対策活動を活性化させ、広く地域社会に貢献することを目指します。



【シンポジウム】「愛知県は災害にどう向き合えるかー5学部からのアプローチー」

日 時:2020年11月1日(日)9:30～12:30

場 所:長久手キャンパスS101教室 及び オンライン(Zoom)

参加者:110名(大学会場:40名、オンライン:70名)

本学は「命の尊厳」を基軸にして地域・愛知・世界の人々と繋がり、全学で「いのちの学びと探究」を進めていくことを大学ビジョンのひとつとして掲げている。本学の5つの学部にはそれぞれ「命の尊厳」に関わる教育・研究の知恵と底力があり、5学部が連携してそのポテンシャルを発信し、多くの県民に知ってもらおうこと、県民の声を聞くことがこのシンポジウムのねらいであった。5学部の学部長がシンポジストとして一同に揃い発信するシンポジウムは本学では初めての試みである。

コロナ禍の中にあって、今回のシンポジウムは大学会場での対面方式とオンライン方式(Zoom)の併用で実施した。100名を超える参加者があり、シンポジウムへの関心と期待がうかがわれた。シンポジウムでは、まず5学部の学部長からは各学部で災害や災害弱者支援に対してどのような教育や研究が可能なのかについて報告がなされた。その後、特別報告として、元駐ブルキナファソ特命全権大使の二石昌人氏にはハイチ地震(2010)の際に現地でも起こったこと、混乱した状況の中で国際緊急援助隊医療チーム団長としてどのような活動を展開したのかについて臨場感あふれる話をいただいた。続いて、県民サイドを代表する3名の方からは、災害弱者対策・支援に関わる現場が抱える課題や本学に期待するものは何かについて発言をいただいた。その後の質疑応答では、それぞれの参加者からは県民目線で、現場で起こる

生の声を各シンポジストにぶつけ、シンポジストがそれぞれの立場から真摯に応えるという場面が多く見られ、大学と県民をつなぐ視点での議論がなされた。今回のシンポジウムでは、まず大学と地域の現場がお互いに知ることー対話を始めることー一本音を語り合う関係を作り繋がることーそして地域が抱える問題や課題と愛知県の教育・研究の繋がりを作りながら共同して活動を進めていくことの必要性が確認された。

今回のシンポジウムについて参加者にアンケートを実施した。アンケートの結果、シンポジウムに”満足した”と答えた参加者が約9割(89%)であった。「各学部がどのように災害と関係しているのかわかることができよかった」「5学部が同じ土俵で議論できる企画はよい」「県立大学としての使命感を感じ取ることができるシンポジウムであった」「ハイチ地震の報告は臨場感があり、興味深く、この感動的講演を学生たちにも聴かせたい」「県や現場の方の生の声が聞けたのは貴重!」というような参加者の感想からも、本学への期待や多くの参加者の関心とニーズに応えるシンポジウムになったと思われる。

これから本学が「命の尊厳」を守るために、地域・現場とともに災害弱者対策・支援に関わる教育・研究を進めていくその第一歩を踏み出す機会となるシンポジウムであった。

(周年記念事業実行委員長・副学長(総括)丸山 真司)

【報告内容】

1. 学部長からの発信ー5学部それぞれの目線からー

○ 外国語学部長 竹中 克行「災いから立ち直る人間社会の力」



人間社会の災害との向き合い方について、リスクを低減する防災とともに重要なのは、災いから立ち直るための復元力やしなやかさの考え方である。環境学や組織論などの分野では、そうした人間の力をレジリエ

ンスという概念でとらえる。本報告では、外国語学部が得意とする多様な文化・価値観への洞察を基本に置きつつ、世界の人が災いからいかに立ち直ったか、また回復すべき「平時」の状態をいかに理解し、リスクと向き合っているかについて考察した。そのために、外国語学部教員が専門とする世界各地の調査フィールドから、3つを事例として取り上げた。

最初に着目したのが、2004年スマトラ島沖地震による甚大な津波被害を受けたアチェである。海岸沿いの集落で命拾いをした人びとは、長い避難生活ののち、慣れ親しんだ海辺に戻って集落と生業を再建することを選択する。またその過程で、30年にわたって武装対立を続けた独立運動とインドネシア政府が和平協定を結んだ。アチェは、自然災害と人災からの復興が同時並行で進んだ興味深い事例である。

つづいて、サハラ砂漠の南縁に位置する半乾燥地域サヘルの事例では、廃村を強いるだけの力をもつ砂漠化の脅威を前に、農法上の工夫によって土壌保全に努める人びとの営みに光を当てた。砂漠化には、気候変化とともに過耕作などの人的要因が働いている。自然の支持力を無視した開発への反省から環境共生へと向かう変化には、独立直後から積み重ねられてきた国際的なNGOの働きが深く関わっている。

○ 日本文化学部長 大塚 英二

「文化で命と暮らしを救う—日本文化学部は災害に対して何ができるか、2つの観点から—」



「文化で命と暮らしを救う」ということについて、2つの観点、即ち学部の教育研究領域と文化財・資料レスキュー活動の面から言及した。

第1の観点として教育研究領域の面であるが、そもそも日本文化学部はヒューマンズムの分野を担う。本学部の教育・研究は人間の尊厳の根本を問い、人に寄り添う意識や感性を覚醒させるものである。文学・思想、歴史学などは本来そうした学問である。

まず古い時代の文学ということで、災害と関わる前近代の代表的な作品として、鴨長明の『方丈記』や『菟心集』を挙げる。ここには、天災等に直面して、それにどう向き合うかというテーマが込められている。無常観とは諦めではない、心静かにして悟りの境地に至る大きな世界観を示す。現代文学では、様々な形で被災者に寄り添う文学としての試みがなされている。東日本大震災のあとに展開している「災害後文学」に注目したい。

次に歴史学では、各種の編さん事業を通じて災害史や地震史等と直接かかわっている。瀬戸市史では明和4年(1767)大水害の記録を発見した。また、豊

最後に、東日本大震災後の復興過程で動員された土木的手法に対して、イタリア人研究者が示した驚きの反応を紹介した。「アックア・アルタ(異常高潮位)」の度に冠水するヴェネツィアの事例にふれつつ、レジリエンスの文化について、多様な時間スケール、自然災害と人災の複合性、グローバルな事象の連鎖の視点からコメントして、締め括りとした。

田市史では、安政元年(1854)の東南海地震の記録を発見した。翌年の江戸安政地震も含め、これ以降全国調査が行われるようになったが、こうしたデータは非常に貴重で、現在の地震学などに活用されている。

以上、2つの分野から見て、学部の教育研究領域は、人々がどのように災害に向かっていくか、人々を見つめ、励ますものであったと考える。

第2の観点として文化財・資料レスキュー活動の面から見るが、「人はパンのみにて生きるものにあらず」と言われる。災害時にライフライン確保の後に必要になってくるのは文化である。文化として我々はものとしての文化財や歴史資料を重視する。そうした文化財は未指定のものを含め、地域の人々が生活していくうえで不可欠である。学部ではいま、文化と文化財を学びレスキューするための教科科目の準備を進めている。それに合わせ、12月6日には、本学部と県立芸大が連携して、シンポジウムを行った。

また、非常に実践的なことになるが、学部の教員には歴史資料保全ネットワーク(通称「資料ネット」)に参加する者が多くいる。これは、被災の現場で資料レスキュー活動を実際に行うボランティア組織で、全国、各県レベルの単位で作られている。愛知県でも東海資料ネットができて少しずつ活動を始めている。具体的には水損・汚損資料のレスキューへ向けた準備を行い、講演会やワークショップなどを開き、こうした実践活動の意義とそれを普及することの重要性を訴えている。

文化財・資料レスキュー活動は実践的な活動として、学部の教育研究領域とは少し異なるように見えるが、これはやがて学部の教育研究領域と重なってくると考える。以上2つの観点から見て、日本文化学部は「文化で命と暮らしを救う」ことができると考える。

○ 教育福祉学部長 山本 理絵「災害弱者に寄り添う専門職を育てる」

教育福祉学部では、2011年の東日本大震災被災地へのボランティア活動参加後、学生たちは、愛知でできることを考え、障害のある子どもたちや地域の人々と交流するようないくつかのボランティアグルー

プを立ち上げ、地域住民とかかわりつつ学んできた。また、授業で震災時の状況や災害ボランティア等について取り上げたり、災害にかかわる保育・教育について調査研究したり、学生の自主的研究では災害時避難における

障害のある人へのニーズ調査を行ったりしている。今年度からは看護学部や情報科学部と連携した研究の中で、防災・避難計画、避難所、避難後のケア等について障害児者施設等へのインタビューによるニーズ調査も始めている。

災害福祉や防災教育、災害時において災害弱者に寄り添った対策・支援を行える専門職を育てるためには、災害・防災に特化した教育・研究を行うとともに、平時からのコミュニケーションとネットワークづくりができる力量も育てる必要がある。いずれにしても、一方的支援ではなく、相手のニーズを聴き取り必要な支援ができるようになること、双方の特徴や強みを生かした支え合いとなることが重要である。教育福祉学部では、「認知症カフェ」や「学習・生活支援」等に関わりながら教育・研究を行う「地域共生プロジェクト」を推進しているが、地域の方々と結びついた活動を通して多様な立場の人々への理解と共感、つながりが生まれ、その中で、専門職としての自己の役割を再認識



することが、コミュニケーション力とネットワークづくりの力量につながると考えられる。

今後、他大学とも連携して教育・福祉の視点だけではなく他分野の視点を含んだ多角的視点からの共同調査・研究を進め、その成果を学生の教育に活かし多職種連携のできる専門職養成を行っていきたい。

○ 看護学部長 柳澤 理子「災害時に生命(いのち)を守る、生活(くらし)を支える」



看護学部は、病人、障害者、高齢者、乳幼児、妊産婦など、要配慮者、避難行動要支援者の人々と直接接する機会が多い学部である。災害に関連する看護学部の活動は、次の4つに集約できると思われる。

第一に、災害時に人々を支援する人材を育てる、すなわち教育である。看護学部では、本年度からカリキュラムを改正し災害看護を強化した。災害看護学の一部を日本文化学部、教育福祉学部の学生も受講できるようにするとともに、災害看護学演習を追加した。これらの授業を中心に、災害が及ぼす健康影響、医療救護活動と看護、避難所・仮設住宅などでの支援、要配慮者等への看護、被災者等の心のケア、多職種連携などを学ぶ。

第2に、看護学部がもつ知識や技術を、学生以外の人々、たとえば看護職や介護職などの専門職、要配慮者やその家族などに伝える活動である。防災に関する講演会や研修会、災害対応シミュレーションなどに、看護学部教員が携わっている。

第3に、災害に備え、災害時に学生と教職員を守る活動、すなわち看護学部自身の災害対策である。昨年度から力を入れて取り組み、守山キャンパスBCP(業務継続計画、発災直後の学部の対応と授業再開に向けた計画)を作成した。本年度はBCPの試行訓練を行い、本部立ち上げ訓練や学生等の避難訓練を行っている。実際に訓練してみると、課題も明らかになったため、今後も訓練を繰り返し、業務継続マネジメントとして運用していく予定である。

最後に、地域とのつながりを強め防災および発災時の被災者支援に協力する活動、すなわち地域貢献と地域と協働しての研究である。保育所を中心とした災害対策支援に取り組んでいる教員があり、また、病院、エリア支援保育所、高齢者施設、訪問看護ステーションなどと、実習や相談事業などを通して既に連携があるため、災害に関する協力にも発展して行ける可能性がある。そのためには、災害に特化した関係をつくるよりも、平常時からのつながりが必要で、多面的な協力関係の一つに災害支援もある、ということが望ましいのではないかと考えている。

看護学部がもっている資源、すなわち、人材、知識、技術、また地域とのつながりを、災害時にも活かしていきたい。



意見交換の様子

2. 特別報告－ハイチ地震の経験から－

○ 元駐ブルキナファソ特命全権大使／元国際緊急援助隊医療チーム団長 二石 昌人氏「自然災害と国際協力」



ハイチは西半球の最貧国で経済・社会的弱者が多い。このハイチで2010年1月、地震が発生し、約31万人という多数の死者が出た。この地震は弱者ほど命の尊厳の危機に晒されやすいことを示した。

この地震に対し、日本は国際緊急援助隊医療チームを派遣した。活動の拠点はレオガン市の看護学校であった。同市にある医療施設は崩壊しており、我々が最初にレオガン市で医療活動を開始した。活動初日、負傷者が診療所に大勢集まってきた。負傷者は地震後6日間も放置されており、重症化し、手術を要する患者もいた。

厳しい活動の中、我々は三つの国際協力を行った。

まず、レオガン市に派遣されていた国連PKOのスリランカ軍との連携。医療活動上、治安の安定は重要であり、我々はスリランカ軍のところに赴き、警備を依頼したところ、司令官は「2004年、スマトラ島沖で地震が発生し、スリランカも被害を受けた。その時一番に日本の医療チームが救援に駆けつけてくれた。今回、恩返しのため、警備ができることを嬉しく思う」と述べ、我々医療チームの警備をしっかりと行ってくれた。

次に外国の医療チームとの連携。日本の医療チームはクリニックとしての機能を予定し、手術を行うための医療器材及び全身麻酔薬は携行していなかった。後から来た外国の医療チームの中でこれらを携行しているチームがいたので、手術を要する重症患者はこのチームにお願いした。また、外国の医療チームはレントゲン装置を携行しておらず、外国の医療チームの所に来る患者のレントゲンを我々が担当した。

最後に、現地住民との連携。患者の多くは現地語しか分からない患者が多く、看護学校の生徒が自発的に現地語からフランス語に訳してくれた。

現場での支援のポイントとして、①被災者にしっかりと寄り添うこと、②お互いコミュニケーションをしっかりと取ること、③連携・助け合うことが重要。これを実行することで厳しい環境の中でも信頼関係・希望が生まれる。

3. 現場の声－住民と接する場から－

- 愛知県福祉局福祉部障害福祉課社会参加推進担当 担当課長 坂上 滋泰氏
- 長久手市社会福祉協議会地域福祉係 係長兼ボランティアセンター長 興石 亮氏
- 愛知県県営住宅自治会連絡協議会 会長／「外国人との共生を考える会」会長 川部 國弘氏



住民と接する立場から、災害時の障害者・高齢者・外国籍住民等に関する現状と課題や、災害時の多言語情報、日頃からの人と人との繋がり、学生への防災教育の重要性などについてご発言いただきました。

○ 情報科学部長 神山 斉己「社会を支える情報科学の広がり」



情報科学部は、1998年4月、愛知県立大学の長久手キャンパスへの移転拡充と共に、愛知県立大学初の理学学部として誕生した。当時はITという言葉も世間には普及しておらず、インターネット黎明期であったが、1995年の阪神淡路大震災を契機に、災害時におけるインターネットの役割についても検討が進められ、1996年からインターネット災害訓練も実施されるなど、情報通信ネットワークがライフラインとしても強く意識されるようになってきた時代である。総務省が公表している「情報通信白書」の特集テーマを見てみると、インターネット、IT、ユビキタスネットワーク、ICT、IoT、ビッグデータ、AI、Society5.0、5Gといったキーワードの変遷から時代の変化を改めて感じることができる。情報通信技術（ICT）は、社会インフラ、ライフラインとして人々が日常生活を送る上で欠かせ

ない存在へと発展してきた。こうした観点から、情報科学部では、情報科学と技術に関する基礎知識を身につけ、激しく変化する技術情報に対応できる能力を有し、高度情報社会を支えて社会で活躍できるIT人材を養成し、地域に送り出していくことが重要と考えられる。

一方、学部レベルの包括的な人材育成の取り組みと並行して、研究室レベルでは、災害を直接の対象とした教育研究も進められている。2020年度には、看護学部、教育福祉学部と連携し、災害弱者の避難シミュレーションに関する研究が立ち上がった。さらに、愛知県福祉局との連携により、障害者や外国人など日本語の会話によるコミュニケーションに支援が必要な人を主な対象とした支援ボードをスマートフォン・タブレットのアプリとして実現する、コミュニケーション支援ボードのIT化に関するプロジェクトもスタートした。

これまで情報科学部を巣立った約1500名の卒業生の多くは、ICT企業をはじめ一般企業のICT関連部門等に就職し、社会で幅広く情報基盤を支える役割を果たしている。本学部では、情報科学の理論や技術を身につけて社会で活躍することはもちろん、情報科学の意義や価値を人に語り、社会を幸せな未来へとつなげられる人材の育成を心がけている。困難な状況では、知識や技術を生かし周りの人たちの情報の受信、発信、ネットワーク環境のサポートなどにも力を発揮してくれるものと確信している。

【記念動画】「愛県大は災害にどう向き合えるかー5学部だからできることー」

2年間にわたる「愛県大 災害弱者対策・支援プロジェクト」活動の締めくくりとしてプロジェクト動画を作成しました。プロジェクト動画では、本学の各学部で進行中の災害弱者対策・支援に関する教育研究活動の具体的な取り組みを紹介しています。

この動画を通して、本学の5学部だからこそできる様々な取り組みを、本学のステークホルダーや多くの県民に発信しました。

※当初は、2020年11月に実施したシンポジウムに引き続き、2021年1月にシンポジウム第2弾を開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で開催を断念し、プロジェクト動画の作成を決定しました。



各学部の取り組み例

- 外国語学部：長久手市との連携による多言語防災便利帳の作成、外国人向けワークショップの実施。
- 日本文化学部：人の心、命を救う文化財保護活動。
- 教育福祉学部：日進市との連携による障害を抱える人の災害避難のあり方に関する調査研究。
- 看護学部：名古屋市保育園との共同による災害時避難のフィールド研究。
- 情報科学部：看護学部・教育福祉学部との連携による災害弱者の災害時避難シミュレーションの作成。愛知県の福祉局との連携によるコミュニケーション支援ボードアプリの開発。 など

2年間のプロジェクト活動を契機に、各学部の教員・学生が地域と連携し、災害弱者対策・支援の教育研究活動の第一歩を踏み出すことができました。

愛県大オリジナルあまざけ

「愛riche」(あいりっしゅ)

本学教員が関わる研究成果をもとに半田市天然記念物「萬三の白モッコウバラ」から最先端テクノロジーを活用して生成した花酵母と米麴から作り上げたあまざけで、酸度が低く甘みを抑えた乳酸菌飲料のような味わいと天然のバラに由来する香り成分が強いことが特徴です。

「愛riche」は、周年記念事業開催期間(2018～2020年度)に本学大学生協にて販売しました。

「愛riche」の誕生

大学等の研究シーズを企業の製品化へと橋渡しする産学行政連携の共同研究「知の拠点あいち重点研究プロジェクト」により「あいち産業科学技術総合センター・食品工業技術センター」、「中埜酒造株式会社」、「愛知県立大学」の連携により誕生しました。

シンクロトロン光を利用し、酵母の変異処理、選抜、育種をすることで、香味のバランスに優れ、なおかつ尿素非生産性酵母を使用した純米酒(愛知ブランド清酒)の製造を国内で初めて実現。その清酒の酒粕を利用してつくられたのが、愛県大オリジナルあまざけの「愛riche」です。

Technology

国内初となる
シンクロトロン光による
酵母育種技術

Aichi Product

・愛知の水
・愛知の米麴
・天然記念物の花酵母

Hybrid

麴と酵母のダブル発酵
・米麴(やさしい甘み)
・酒粕(深いこく)



名前の由来

あまざけの名前“愛県大オリジナルあまざけ「愛riche」(あいりっしゅ)”は、愛知県立大学周年記念事業の一環として学内公募により決定しました。本学初のオリジナルグッズとして、以下のような様々な想いが込められています。

- richeはフランス語で「豊かな」という意味(英語のrich)で、「愛」と組み合わせることにより、愛知県立大学の豊かな発展や、愛知から愛にあふれる社会を創造することをイメージしています。
- 愛知県の県花・愛知県立大学の学章である“かきつばた(アイリス)”を語源とし、日本語と外国語(フランス語)の合成語とすることで、“日本の文化と技術”、“グローバルな教養”、“知の融合”といった愛知県立大学の特色を表しています。
- このあまざけの3つの特徴「あまくて、いい香りで、リフレッシュ効果」を表しています。
- 出発に際して飲む酒を「立酒(たちざけ)」と言うことから、「あいりっしゅ」を「愛立酒」と置き換え、卒業や入学などの門出を祝う気持ちも込められています。

関連企画

2018年度

タイトル	日程	時間	場所
情報科学部設立20周年記念 「情報科学部の成人式～初めてのホームカミングデイ」	11月3日(土)	13:00～17:00	長久手キャンパス
外国語学部国際関係学科設立10年 記念パーティー	11月3日(土)	14:00～16:00	長久手キャンパス

2019年度 ○一般向け企画

タイトル	日程	時間	場所
第2回東大国際セミナー「世界情勢、2019年の焦点」	4月26日(金)	19:00～21:00	サテライトキャンパス
子育てひろば「もりっこやまっこ」(全15回)	5月9日(木)、16日(木)、23日(木)、 30日(木)、6月6日(木)、13日(木)、 20日(木)、27日(木)、7月11日(木)、 9月19日(木)、10月17日(木)、 11月21日(木)、12月19日(木)、 1月16日(木)、2月20日(木)	10:00～12:00	守山キャンパス体育館
もしかして認知症?～認知症の理解と対応について～	5月19日(日)	13:30～15:00	サテライトキャンパス
2019年度連続公開講座「県大アゲイン」(全4回)	6月2日(日)、9日(日)、16日(日)、23日(日)	11:00～12:30	サテライトキャンパス
健康の維持は、眠りから～質の良い睡眠をとるための処方箋～	6月16日(日)	13:30～15:00	サテライトキャンパス
近世東アジアの交流ネットワークと日本・朝鮮	7月5日(金)	16:10～17:40	長久手キャンパス 多目的ホール
キッズパーク内交流企画「こんにちは! 外国からのお友達」	7月14日(日)	10:00～15:15	長久手キャンパス
はじめての外国資料	7月14日(日)	13:00～16:00	長久手キャンパス 小ホール
スウェーデンの保育とゼロ年生への移行	7月17日(水)	10:30～12:00	長久手キャンパス 小ホール
第1回世界史セミナー「近世ヨーロッパをどう見るか」	7月20日(土)	15:00～18:00	サテライトキャンパス
生涯発達研究所連続セミナー 多文化社会における多職種連携-教育と福祉の現場から- 第1回「多文化ソーシャルワーカーと医療・教育・福祉との連携」	7月20日(土)	13:30～16:30	長久手キャンパス 多目的ホール
和装本講座	7月24日(水)	13:00～15:00	長久手キャンパス 多目的ホール
多様なメンバーシップを前提とした大学教育を考える研究会 教育におけるバリアフリーとは 第1回「性的マイノリティと外国語教育」	7月24日(水)	13:00～15:00	長久手キャンパス B101
発達障がいフォーラム 「感受性豊かな子どもが輝くために ～特別支援と音楽療法の実践から～」	7月27日(土)	13:45～15:45	瀬戸市文化センター 31会議室
豊田市公開講座「糖尿病って何?なぜ怖い?」	7月28日(日)	13:30～15:00	豊田市 産業文化センター
オープンキャンパス(長久手キャンパス)	8月7日(水)、8日(木)	10:00～16:30	長久手キャンパス

タイトル	日程	時間	場所
オープンキャンパス(守山キャンパス)	8月7日(水)	9:30～16:00	守山キャンパス
多文化共生をめぐる社会的課題と地域連携の取り組み 「地域生活から見えてくる外国人住民を取り巻く社会的課題」	8月31日(土)	13:30～16:30	サテライトキャンパス
豊田市公開講座「とっさの英会話、とっさの異文化マナー」	9月1日(日)	10:00～12:00	豊田市 保見交流館
愛知県史連続講座(全3回)	9月14日(土)、21日(土)、10月6日(土)	13:00～16:30	サテライトキャンパス
NVC、マインドフルネス、社会変革	10月10日(木) 10月11日(金)	16:10～17:40 12:50～14:20	長久手キャンパス
転倒予防の一丁目一番地は食力の向上にあり	10月20日(日)	13:30～15:00	サテライトキャンパス
国際HAIKUプロジェクト:世界文学としてのHAIKU: もっと楽しむ英語俳句の世界(実践・スキルアップ編)	10月22日(火)	13:00～15:00	長久手キャンパス 多目的ホール
生涯発達研究所連続セミナー 多文化社会における多職種連携-教育と福祉の現場から- 第2回「教育現場における多文化共生の今」	10月25日(金)	14:30～16:00	長久手キャンパス 多目的ホール
多様なメンバーシップを前提とした大学教育を考える研究会 教育におけるバリアフリーとは 第2回「教育現場における性別違和」	10月30日(水)	10:30～12:00	長久手キャンパス B211
多文化共生を巡る地域連携と社会課題への取り組み 「東日本大震災・福島第一原発事故による外国人避難者と 支援からみえてくる課題と共生への可能性」	11月2日(土)	13:00～16:00	サテライトキャンパス
東アジアの民主主義を台湾から考える一雷震日本留学 (一高1年・八高3年・京都帝大3年半)百年記念・ 逝去四十周年記念国際講演会/ 同時開催:雷震・国際シンポジウム	11月9日(土) 11月10日(日)	9:00～17:45 9:30～16:00	長久手キャンパス S201・S101
朝鮮民主主義人民共和国における障がい者支援の現状と課題 -私たちにできることは何か?	11月13日(水)	13:30～16:30	長久手キャンパス S201
生涯発達研究所連続セミナー 多文化社会における多職種連携-教育と福祉の現場から- 第3回「子ども福祉における多文化共生の今 -療育・保育現場からの報告-」	11月16日(土)	14:00～16:00	長久手キャンパス S101
多文化共生研究所 公開セミナー 「外国人留学生の育成・雇用を考える」	11月17日(日)	13:30～16:30	サテライトキャンパス
スペインの古文書・研究文献に見る日本観 -明治維新の前・中・後の日本像を中心に-	11月20日(水)	13:00～14:20	長久手キャンパス 小ホール
学術講演会「批評家を招く 講師 藤田直哉氏 ～虚構と現実【SFカラ、震災マデ】」	11月30日(土)	14:00～15:30	長久手キャンパス 講堂
多文化共生研究所設立10周年記念シンポジウム 「多文化共生社会を目指して: 10年の実践事例と今後の展望」	12月3日(火)	12:50～14:20	長久手キャンパス 小ホール

タイトル	日程	時間	場所
基礎インドネシア語集中講座	1月28日(火)～30日(木)	18:30～20:30	サテライトキャンパス
公開講習会「災害から文化財をいかに守るか」	1月29日(水)	14:00～16:30	長久手キャンパス 多目的ホール
第2回世界史セミナー「習近平氏とはどのようなリーダーか？ ～政治認識、リーダーシップ、政治家像～」	2月22日(土)	16:00～18:00	サテライトキャンパス
多文化共生を巡る地域連携と社会課題への取り組み 「多文化社会における協同性と新しい社会のあり方 ～多文化共生と協同組合の可能性～」	3月8日(日)	13:00～17:00	オンライン

2019年度 ○その他(専門職向けセミナー等)

タイトル	日程	時間	場所
看護実践センターセミナー「看護研究スキルアップ講座①」	5月24日(金)	9:00～15:00	守山キャンパス 大講義室
看護実践センターセミナー「看護研究スキルアップ講座②」	6月19日(水)	10:00～16:00	守山キャンパス 大講義室
看護実践センターセミナー 「日々の疑問を研究計画へ(初級実践編) ～看護研究に初めて取り組む方のための演習～」	8月9日(金)	13:00～16:00	守山キャンパス 中講義室4
スクールソーシャルワーク研修	8月21日(水)	9:00～16:30	長久手キャンパス 多目的ホール
「英語で教える英語の授業教授法」Part II	8月25日(日)	10:00～12:00	長久手キャンパス 文化交流室B
看護実践センター 認定看護師教育課程 (がん化学療法看護、がん性疼痛看護)説明会	8月30日(金)	13:30～15:30	守山キャンパス 大講義室
看護実践センターセミナー 看護研究個別指導	9月～3月		
看護実践センターセミナー 「予防接種に関する最近の話題を知ろう ～感染症から身を守る支援をするために～」	9月13日(金)	14:00～16:00	守山キャンパス 中講義室2
認定看護師教育課程フォローアップセミナー(秋季)	9月21日(土)	10:30～15:30	守山キャンパス 大講義室
看護実践センターセミナー 「PowerPointを用いた効果的で効率的なプレゼン作成術」	10月14日(月・祝)	13:00～16:00	守山キャンパス
看護実践センターセミナー 「いわゆるゴミ屋敷に住む方への関わり方と支援の在り方 ～アセスメントツールを活用して～」	10月22日(火・祝)	9:30～14:30	守山キャンパス 中講義室3
看護実践センターセミナー 「原発を経験した親子の長期追跡研究から見えてきたもの」	11月4日(月・祝)	10:00～12:00	守山キャンパス 小講義室2
看護実践センターセミナー 「看護を取り巻く制度の動向を理解し、看護現場に活かす」	11月10日(日)	11:00～16:30	サテライトキャンパス

タイトル	日程	時間	場所
看護実践センターセミナー「大災害発生!いざ、どう行動するか? ～病院参集から傷病者受入準備までを考える～」	12月8日(日)	13:00～16:00	守山キャンパス 中講義室4
認定看護師教育課程 「がん化学療法看護分野認定審査対策セミナー」(全2回)	12月20日(金)、2月12日(水)	13:00～16:00	守山キャンパス 小講義室1
看護実践センターセミナー 「これからの病院経営に役立つ財務管理の知識」	1月25日(土)	13:00～16:10	守山キャンパス 中講義室4
医療関係職者のための医療安全セミナー	2月1日(土)	13:00～16:15	守山キャンパス
看護実践センターセミナー 認定看護師対象セミナー 「あなたのその論文を実践にするために」	2月2日(日)	10:00～16:10	守山キャンパス 大講義室
看護実践センターセミナー 「いつでもどこでも医療メデイエーション ～安全で安心な医療をつくる～」	2月11日(火・祝)	9:30～12:30	守山キャンパス 大講義室

2020年度 ○一般向け企画

タイトル	日程	時間	場所
子育てひろば もりっこやまっこサロン 「新型コロナウイルスから身を守る」	6月18日(木)	10:00～10:30	オンライン
多文化社会の異文化「終活」を考えるセミナー	7月11日(土)	13:30～16:30	オンライン
教育福祉学部・人間発達学研究科 ホームカミングデイ2020	7月25日(土)	13:00～14:30	オンライン
子育てひろば もりっこやまっこサロン「ベビーマッサージ」	7月28日(火)	10:00～11:00	オンライン
発達障がいフォーラム「ウィズコロナ時代の子育てを考える」	8月21日(金)	13:30～15:30	オンライン
多文化共生を促進する地域・社会的連携の取り組み 「『地域で支える医療・保健衛生』と多文化共生」	8月23日(日)	13:00～16:30	オンライン
連続公開講座「大災害から命を守る」(全3回)	9月19日(土) 10月24日(土) 10月31日(土)	13:30～16:30 13:30～16:30 14:00～17:00	長久手キャンパス S101/オンライン
愛知県歴史資料連続講座(全2回)	10月11日(日)、18日(日)	13:00～16:30	サテライトキャンパス
公開シンポジウム 世界展開する海外日本研究者に学ぶ 「大航海時代のキリシタン文学ーグローバル社会の形成に 果たした日本の役割ー」	10月14日(水)	14:00～17:00	オンライン
学習・生活支援事業の論点:教育と福祉の(協調)と(対立)	10月28日(水)	13:00～15:00	オンライン

タイトル	日程	時間	場所
子育てひろば もりっこやまっこサロン 「いやいや期を乗り越えよう！」	10月29日(木)	10:15~11:00	オンライン
子育てひろば もりっこやまっこサロン 「トイレトレーニングを始めよう！」	10月30日(金)	10:15~11:00	オンライン
和装本講座	11月4日(水)	14:00~17:00	長久手キャンパス 小ホール
学術講演会「不完全で完全なワタシ」	11月7日(土)	13:30~15:30	長久手キャンパス S101/オンライン
学術講演会「大災害から命を守る」	11月8日(日)	13:30~15:30	長久手キャンパス S101/オンライン
多文化共生を促進する地域・社会的連携の取り組み 「『With コロナ』時代の労働市場と外国人材の育成」	11月8日(日)	13:30~16:30	オンライン
第1回世界史セミナー 「第一次世界大戦とヨーロッパ東部地域の再編」	11月14日(土)	16:00~18:00	サテライトキャンパス/ オンライン
国際HAIKUプロジェクト 「詩人と俳句一俳句と詩のバイリンガリズム」	11月23日(月・祝)	13:30~15:30	オンライン
第3回県大国際セミナー 「2020年の世界情勢 新型コロナと世界」	11月29日(日)	13:00~15:15	オンライン
虐待防止・対応セミナー	12月4日(金)	14:00~16:00	オンライン
「災害と文化財」シリーズ5周年シンポジウム 「地域の文化財ネットワークを考える 一瀬戸・長久手・豊田エリア」	12月6日(日)	13:00~15:30	長久手キャンパス S201/オンライン
インドネシア現地経済事情講習会	12月11日(金)	18:30~20:10	オンライン
多文化共生を促進する地域・社会的連携の取り組み 「障害者権利条約と多文化共生」	12月20日(日)	13:00~16:30	オンライン
子育てひろば もりっこやまっこサロン「クリスマス会」	12月24日(木)	10:30~11:30	オンライン
子育てひろば もりっこやまっこサロン「ヨガ教室」(全2回)	1月14日(木)、2月18日(木)	10:30~11:30	オンライン
もっと知りたいインドネシア語講座(初~中級)	1月26日(火)~29日(金)	18:30~20:30	オンライン
第2回世界史セミナー 「第一次世界大戦の国際科学協力体制と日本」	2月20日(土)	16:00~18:00	オンライン

2020年度 ○その他(専門職向けセミナー等)

タイトル	日程	時間	場所
看護実践センターセミナー「看護研究スキルアップ基礎講座①」	8月6日(木)	9:30~15:00	オンライン
看護実践センターセミナー「看護研究スキルアップ基礎講座②」	8月29日(土)	10:00~12:00	オンライン
看護実践センターセミナー「あなたの実践を論文にするために」	9月4日(金)	10:00~16:00	オンライン
認定看護師教育課程 「がん性疼痛看護分野認定審査対策セミナー」(全2回)	9月4日(金)、10月23日(金)	13:00~16:00	オンライン
認定看護師教育課程 「がん化学療法看護分野認定審査対策セミナー」	9月18日(金)	13:00~16:00	オンライン
認定看護師教育課程フォローアップセミナー(秋季)	10月16日(金)	10:00~15:40	オンライン
看護実践センターセミナー 「看護を取り巻く制度の動向を理解し、看護現場に活かす」	10月31日(土)	11:00~16:30	オンライン
看護実践センターセミナー 「コンフリクトマネジメント~医療メディエーションの理論と技法~」	11月3日(火・祝)	10:00~12:00	オンライン
看護実践センターセミナー 「新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大と制御の考え方 ~保健医療福祉施設における感染予防の疑問にお答えします~」	12月11日(金)	14:00~16:00	オンライン
看護実践センターセミナー「病院で看護にできる収益アップの実際」	2月11日(木・祝)	13:00~16:00	オンライン
看護実践センターセミナー「日々の疑問を研究計画へ (初級実践編)~看護研究に初めて取り組む方のための演習~」	2月23日(火・祝)	13:00~16:00	オンライン
認定看護師教育課程 フォローアップセミナー(春季)	3月22日(日)	10:00~15:40	オンライン

新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念事業及び関連企画(2018～2020)



記念講演



記念式典



記念講演

(左から富木原学長・神崎教授(講演者)・鮎京理事長・田坂先生(周年委員))



記念講演後の神崎教授と学生との懇親会



記念式典後の記念撮影



祝賀会



情報科学部の成人式(20周年)



国際関係学科設立10周年パーティー

広報活動



周年記念ロゴ掲示(長久手キャンパス講堂)



県庁地下通路ポスター掲示



地下鉄中吊広告



地下鉄窓ステッカー



周年記念ロゴ掲示(長久手キャンパス外回廊)



周年記念ロゴ掲示(守山キャンパス)



周年記念ロゴ掲示(守山キャンパス)



愛・地球博記念公園駅改札前ポスター



“愛riche”ネーミング表彰式



学報(周年記念事業特集)



記念グッズ(ロゴ入り今治タオル・巾・袋など)



学生広報スタッフによる探県大・Instagram開始



2019年11月5日(火) 中日新聞 朝刊



2020年11月24日(火) 中日新聞 朝刊

※この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

新大学誕生・キャンパス移転と 大学をめぐる外的状況

愛知県立大学が大きな変化をくぐり抜けた1990～2000年代は、大学一般を取り巻く状況も大きく変容した時期であった。公立大学の場合は設置者である地方自治体の動きも加わるため、多種多様な様相を呈することになる。本項ではこうした外的状況を中心に整理し、愛県大の歩みを理解する一助としたい。

90年代以降に展開されたのは「規制緩和と自己責任を基本とする大学改革」¹と整理される。その皮切りは91年に文部省が発した「大学設置基準の一部を改正する省令」であった。大学設置基準で細かく規定されていた授業科目や履修、教員組織の基準などを撤廃し、緩やかな大綱のみとした改正で、画一性が高かったカリキュラムを各大学で編成できるようになった。全国の大学でカリキュラム改訂が進められることとなったが、ほとんどの場合、一般教養を担う教養部の解体という組織改編を伴っていた²。愛県大でもキャンパス移転と並行しつつ学部組織の改編が行われたが、これが可能となった背景が91年の制度改正であった。

ただし、キャンパス移転そのものは大学制度改革とは異なる文脈で議論がなされており、表立ってはすでに80年代半ばの愛知県議会で質問が現れつつあった。最も早いものでは、現在の長久手キャンパスに愛県大が設けていた体育館の工事に関連し、83年に移転計画の有無を問う質問が出ている。県側は大学の規模拡大と学生増加によりキャンパスが手狭で全面移転は検討課題であることを認めつつも、当面の移転は否定している³。

当時の県の答弁では、愛県大の特色として夜間学部の存在や、東海地方の国公立大学で唯一の外国語学部をあげる一方、大学院新設は目下のところ困難としており⁴、研究機能よりも教育機能の重視がうかがえる。また、87年策定の第四次全国総合開発計画で名古屋東部丘陵地域が「研究学園都市構想を推進する」と位置づけられたことを受け、県は現在の長久手市を含む尾張北部から西三河にかけての7市5町(当時)を「あいち学術研究開発ゾーン」とし、所在する大学の研究開発機能にも期待がかけられたが、移転前の愛県大は構想に含まれず、県議会における関連づけや理工系学部の設置を問う質問にも、財政上の困難や学内での議論を待っている旨を答弁するにとどめている⁵。しかし、89年3月には移転構想を前提とした質問⁶が出るようになり、同年12月には移転が新聞で報道されている。そこでは、愛県大を「あいち学術研究開発ゾーン」構想の中核として、移転に伴って「情報科学部」・「発達福祉学部」の新設による総合化と大学院新

設による研究機能の強化がなされることが報じられた⁷。移転を検討するプロセスで、愛県大の位置づけや役割も広がりを見せたと言えるだろう。郊外への転出を前提とした学部学科再編と施設設備の調査費が計上された90年2月の議会では、すべての代表質問で愛県大に言及がある⁸など、注目が高まるなかで移転計画は準備されていた。その反面で、キャンパス移転と昼夜開講制への移行で通学をあきらめざるをえないという夜間学生の声もあった⁹。

一方、国による大学制度の改革もさらに進められていく。自己点検や外部機関による評価の義務化といったチェック機能の導入などが行われたが、最大の変化は国公立大学の法人化による民間的経営手法の導入であった。大学の再編統合も前提にしており、2002年大学審議会答申で日本が大学の供給過剰を迎えたという認識が示されたことが象徴的である。国立大学の文部科学省依存を断ち切ると同時に、大学自らの責任と権限で運営を行う改革とされ、04年施行の国立大学法人法へと結実する。90年代に重ねられた検討が、小泉内閣での構造改革の流れとして推し進められたものと位置づけられている。公立大学の法人制度も同時に検討され、基本的に国立大学法人法に対応した条文が地方独立行政法人法のなかに設けられることとなった。ただし、公立大学を法人化するかどうかは設置者である地方自治体の任意とされ、法人と大学との関係についても裁量の余地が残された¹⁰。

県議会では早くも99年には国立大学法人化の文脈から県下3県立大学のあり方について質問が現れており¹¹、民営化・第三セクター化という意見¹²や、「財政的配慮」からの大学統合・教養部門の一元化という意見¹³も出ていた。80年代後半から90年代にかけての議論と比較すると、財政的な観点が極めて強く表れている。国立大学のように即時の移行ではないため、全国の公立大学では財政不安や改革への意欲など、さまざまな状況から検討や様子見があった¹⁴が、愛知県では03年8月に「県立の大学あり方検討会議」を設置し、方針が議論された。財政悪化の一方で万博関連など大型事業が予定される状況下で大学関連の支出はますます抑制されたという指摘もある。07年に公立大学法人を設立して県立の3大学を運営することとしたうえで、このうち県立大学と県立看護大学とを09年から統合するという再編をはじめ、夜間主コースの閉鎖などの整理を伴う改革となった¹⁵。一法人で複数の高等教育機関を運営し、さらに法人の理事長と大学の学長を分離する形式は、地方独立行政法人法施

行後すぐの事例では首都大学東京(現在は東京都立大に名称を再変更)に近く、愛知と同時期の事例では静岡県立大学・京都府公立大学と同様である¹⁶。

以上たどってきたように、県立大学の位置づけは国による大学制度改革とも大小の関連を持ちながら変遷しており、財政的な観点が強まる流れは続いている。さらに、18歳人口の減少という逆境は現実のものとなっている。いかに学生に対して魅力的な大学となり、選ばれるか、また、いかに設置者に対して教育の重要性と愛県大の役割を主張できるか、そして、直面する課題に対応しつつもいかに大学のあり方を見失わずにいられるか、重要な課題であろう。

註

*1 草原克豪『日本の大学制度』(弘文堂、2008年)P159参照。

*2 同前および矢田俊文『公立大学論《上》』(原書房、2019年)参照。

*3 1983年12月定例議会における小池まさる議員の質問と甲斐一政総務部長・鈴木礼治知事答弁。

以下、県議会での発言については各年の『愛知県議会会議録』を参照。

*4 1985年6月定例議会における浅井栄也議員の質問と鈴木礼治知事答弁参照。

*5 「第四次全国総合開発計画」(国土庁、1987年)、「あいち学術研究開発ゾーン構想策定調査(概要)」(愛知県、1988年)、1988年2月定例議会における立松誠信議員・同年9月定例議会における武田等議員の質問と奥田信之総務部長・鈴木礼治知事答弁など参照。

*6 1989年3月定例議会の松山登議員の質問参照。

*7 『朝日新聞』1989年12月29日朝刊参照。

*8 1990年2月定例議会において山本芳央議員はこれがかつてないことと述べている。

*9 『朝日新聞』1997年2月13日夕刊の天白区三十六歳主婦の投書参照。

*10 前掲註2参照。

*11 1999年12月定例議会における青山秋男議員の質問参照。

*12 2000年12月定例議会における三浦恭嗣議員の質問参照。

*13 2003年6月定例議会における伊藤勝人議員の質問参照。

*14 『読売新聞』2003年9月22日朝刊参照。

*15 早川鉦二『愛知万博の落とした影』(風媒社、2008年)、『中日新聞』2006年9月14日朝刊、『朝日新聞』2008年8月1日朝刊など参照。

*16 前掲矢田『公立大学論《上》』参照。

(周年記念事業実行委員(日本文化学部歴史文化学科教員)中西 啓太)

7. 大学のあゆみ

	愛知県立大学	愛知県立看護大学
1966年	愛知県立大学開設 文学部(国文学科・英文学科・児童教育学科・社会福祉学科)新設 外国語学部(英米学科・フランス学科)新設 外国語学部第二部(英米学科・フランス学科)新設	
1968年	外国語学部にスペイン学科を増設	
1995年		愛知県立看護大学開学
1998年	愛知郡長久手町(現長久手市)へ全面移転 文学部に日本文化学科、外国語学部ドイツ学科、中国学科を増設 情報科学部(情報システム学科、地域情報科学科)新設 大学院(国際文化研究科修士課程)新設 文学部及び外国語学部のすべての学科に昼夜開講制を導入	
1999年		愛知県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻(修士課程)設置
2002年	大学院(国際文化研究科博士(後期)課程)設置 大学院(情報科学研究科修士課程)設置	
2003年	大学院(国際文化研究科博士課程[夜間コース])設置 サテライトキャンパス設置	愛知県立看護大学助産師課程開設
2004年	大学院(情報科学研究科博士(後期)課程)設置 外国語学部第二部廃止	
2007年	設置者を愛知県立大学法人に変更	設置者を愛知県立大学法人に変更 大学院に高度専門職コースを設置
2008年		看護実践センター認定看護師教育課程(がん化学療法看護、がん性疼痛看護)開講
新しい愛知県立大学		
2009年	愛知県立大学と愛知県立看護大学を統合、学部・学科・研究科を再編成 ・外国語学部(英米学科・ヨーロッパ学科・中国学科・国際関係学科) ・日本文化学部(国語国文学科・歴史文化学科) ・教育福祉学部(教育発達学科・社会福祉学科) ・看護学部(看護学科) ・情報科学部(情報科学科) ・大学院(国際文化研究科博士(前・後期)・人間発達学研究科修士・看護学研究科博士(前・後期)・情報科学研究科博士(前・後期)課程)	
2011年	大学院(人間発達学研究科博士(後期)課程)設置	

新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念事業実行委員会委員一覧

(※2018年度のみ周年記念事業準備委員会)

氏名	所属・職名等(委員着任時)	着任期間
丸山 真司	副学長(総括)[委員長]	2018～2020
半谷 史郎	外国語学部国際関係学科 教授	2018～2020
中西 啓太	日本文化学部歴史文化学科 准教授	2018～2020
三山 岳	教育福祉学部教育発達学科 准教授	2018～2020
佐藤 美紀	看護学部看護学科 准教授	2018～2020
田坂 浩二	情報科学部情報科学科 准教授	2018～2020
谷口 博伴	県大総務課 課長/学生支援課 課長	2018～2019
北上 隆夫	県大総務課 課長	2019
速水 毅	県大総務課 課長	2020
阿嶋 悟	学務課(長久手C) 課長	2018～2020
加藤 慎治	入試課 課長	2019
吉田 将典	入試課 主事/戦略企画・広報室 主事	2018～2020
石塚 正弥	入試課 主事	2020
佐藤 美咲	学生支援課 主事	2018～2019
今津 美沙	学生支援課 主事	2019～2020
春木 幸	図書情報課 主査	2018
小栗 由紀子	図書情報課 主事	2019～2020
上嶋 綾音	研究支援・地域連携課 主事	2018～2020
中村 純子	守山総務課 課長	2018～2020
松原 朱里	学務課(守山C) 主事	2018～2020
山下 達治	全学同窓会 会長	2018～2020
佐野 正	全学同窓会 副会長兼事務局長	2018～2020
坂井 麗	戦略企画・広報室 主査	2018～2020
城處 恵理	県大総務課(事務局)	2019
池田 敏幸	県大事務部門長(オブザーバー)	2018
鈴木 雅仁	県大事務部門長(オブザーバー)	2019～2020

編集後記

新大学誕生10周年・長久手移転20周年の記念誌をお届けします。本誌は教員・職員・同窓会が協働した記念事業の最後を締めくくる取り組みとして企画されました。とりわけ、全学同窓会からは本誌の予算をすべてご支援いただくなど、多大なお力添えをいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。また、実際に編集作業が動き出してからは、職員の方々の働きがなければとても完成には至らなかったでしょう。さらに、本誌の軸となった寄稿文は、教・職・同の様々なネットワークがあってこそ、多くの方からお寄せいただくことができたものです。この間の本学の歩みを多様な視点から眺められるのではないのでしょうか。私自身は本学に赴任してからまだ日が浅く、現在のキャンパスでは物理的にも大学の外とのつながりを感じにくいものです。しかし、大学を支えるつながりは前身の時代から脈々と続いているのだと、本誌の編集を通じて実感しました。大学を取り巻く環境は少子化や財政窮乏といった直接的問題だけでなく、高等教育・学術研究の意義といった次元まで、いよいよ厳しさを増していくと予想されます。しかし、そのような時代を歩むにあたって、本誌を作り上げたようなつながりが本学を支えてくれることでしょう。

周年記念事業実行委員(日本文化学部歴史文化学科教員) 中西 啓太

愛知県立大学 新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念誌

発行年月日 2021年(令和3年)3月1日

編集・発行 愛知県立大学新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念事業実行委員会
〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3
TEL 0561-76-8811

印刷 株式会社ITP
〒450-0003 名古屋市中村区名駅南三丁目3番33号
TEL 052-589-1541

デザイン TAKAYANAGIDESIGN 高柳 文雄
